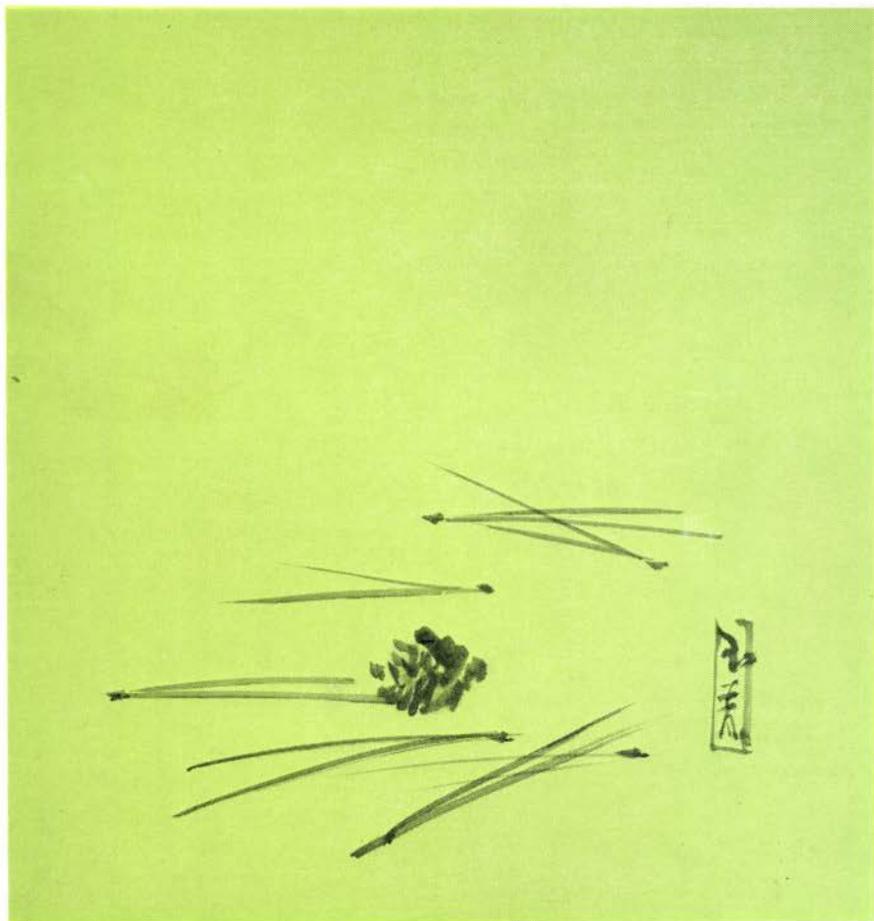


川柳塔

昭和五十九年四月二十五日
印刷
昭和五十九年五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十二年 通卷六八四号



日川協加盟

No. 684

五月号

遠山可住川柳句集

「ふろんぼ」出版記念

本社六月句会

日時 昭和59年6月7日(木) 午後6時
会場 なにわ会館

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12

地下鉄谷町9丁目・近鉄上本町下車東南

電話06(772) 1441

おはなし

兼題

「遠い」

「道」

「踊り」

「城」

「とろろ(芋)」

西尾

平野百合子

辻文平

北山越山

遠山可住

黒川紫香

席題

当日一題

各題3句・締切午後7時

会費

千五百円(句集「ふろんぼ」呈)

川柳塔社

親善と観光 川柳塔中国大陸へ



桂林・漓江下り

☆川柳塔還暦記念事業の一環として
日中親善・観光旅行を行います。
(詳細は逐次発表いたします)

川柳塔社

- 59年10月
- 上海・蘇州・桂林6日間コース
- 費用21万5千円(全食事付)
- 20名限り

美しき五月

西尾 葉

長い冬をぬけると初夏だった。

今年の冬は本当に長い長い冬だった。

愈々美しき五月に入った。

「美しき五月となれば」という小説の題もあつた。

爽やかな緑の風の吹く、美しき五月である。高村光太郎に「五月のアトリエ」という詩がある。

五月の日光は ほんとに

金髪の美少年

十七のモデルの娘は

来るといきなり 着物をぬいで

ああ何という好適な五月初旬の生き

ものか

天然自然の自由さて

とんきょうな鬼のように

耳を立ててモデル台にうずくまる

みどりの揺れる大空を背にした

うすくれないの乳首に

たわむれるものは

いつか忍びこんだ

あの翼ある美少年

美しきかな五月。樹々の若葉が特に美しい。

兼好法師の「徒然草」に

「卯月ばかりの若楓、すべてよろづの花、紅葉にもまさりて、めでたきものなり」とある。

とある。

また芭蕉の「笈の小文」に

一つ脱いでうしろに負ひぬ衣更へ

少し汗ばんだ一枚の襦袢をぬいだ、旅行

行く心が惚ばれて面白い。

味覚では蚕豆である。酒の肴に私は蚕

豆の塩茹が一番好物である。

蚕豆や妻の話はあとで聞く

植物では卯の花が咲く。

卯の花匂う垣根に

ホトトギス はやもつ来鳴きて

という小学唱歌がなつかしい。

五月十四日は、転宅好きで有名な食満

南北忌である。

路郎の句に、南北氏を悼みてという前書で

宿替も今度は番地のないところ

は有名である。

路郎

◇

三月の電車息子自慢の声高し

約束の女が締める金ベルト

週一度逢う瀬はかなし水中花

麗人のロマン「徹子の部屋」できく

どこやらに自慢がまじる嫁の里



座右の句

砂時計しずかに沈む炎かな

(千代)

私の句

渡し舟みんないい顔して渡る

沢田千春

川柳塔 五月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

美しき五月	西尾 栞	(1)
亡妻の唄	黒川紫香	(2)
川柳塔(同人吟)	西尾 栞	(4)
自選集		(30)
■川柳太平記(7) 《川柳の群像》 和田默然人	東野 大八	(32)
■連載 誹風柳多留廿六篇研究(十五丁・十六丁)		(34)
水煙抄	黒川紫香選	(36)
秀句鑑賞	水粉 千翁	(55)
同人吟	藤井 明朗	(59)

亡妻の唄

黒川紫香

省線(当時そう言っていた)福山駅から一時間、山の中の峠茶屋でバスを捨てた。其処で待っていた妻の兄に迎えられ獣道とでもいえるような細道を枝やら下草を払いつつまた一時間余歩くと其処が妻の実家だった。

初孫を見せに妻と里帰りしたのだが、周りは家もなく、山を開いた段々畠を通して谷の向うにある家が隣だと言う。夜になると電灯がないのでランプが灯った。その頃でもランプは珍しかった。えらいところで生れ育ったもんだなと改めて妻の顔をじっと見た。

薄給だった私を助けて懸命に習い覚えたミシンを踏み僅かな手間賃で近所の子供達の服を縫った。学歴も素養もない妻だったが、私の趣味に馴染もうとして川柳も作った。

もうこんな人出になつた海の色 波矢子
川柳雑誌岡町支部の世話をしていた頃、家の周辺は田圃ばかりだったので螢狩り句会をやろうということになり、鮎美、古方、三司、黙平、風葉等十人ばかり集った。勿論盟友水客、潮花も交っている。前日から妻は小川に入つても螢を採り易いようにと近所からゴム長靴を借り集めたり、当日不漁だと申訳な

愛染帖……………橘高薫風選…(52)

近頃思うこと……………羽原静歩…(56)

あらがいの弁……………早川清生…(57)

「沼」……………小島蘭幸選…(60)

一路集「輝く」……………嘉数兆代賀選…(60)

「忠告」……………中川滋雀選…(61)

初歩教室……………本田恵二郎…(62)

木次の桜に心残して—山陰の旅……………小出智子…(64)

柳界展望……………本社四月句会…(65)

各地柳壇(佳句地10選/森井菁居選)……………(70)

編集後記……………薫風・鬼遊・史好…(83)

座右の句

吊橋が揺れる掟が生きている

(酔々)

私の句

諦めたおとこと皿の花がつお

林 荒介

いと子供達と共に大きな蛍籠にいったい蛍を先取りしていたし、土産に持って帰れるようにと古蚊帳をつぶして蛍袋も作った。

矢張り当日は不漁だったが先取りした蛍の一部を庭に放し気分を味い土産の蛍も持って帰って貰ったので満足してくれたと思う。

人を呼んで馳走したり相談に乗ったりするのが好きで、土木部にいた頃私の部下である線路工夫(保線士)がいつも遊びに来た。言葉の荒い節くれた人達だったが在所の人が多いので「うちで作った野菜だ」と言っけて届けてくれた。大戦中でも一切買出しはせずもっぱら休閑地を借りて芋や麦の主食と野菜を作った。田舎生れが役立ったのである。

その妻が戦後間もなく病に倒れた。「おとうさん、わたしもう目が見えなくなつた。手を握って、にぎって」と病み細つた手を差出すので力強く握ってやると満足そうに笑みを浮かべた。それから間もなく息をひきとつた。朝である。

突然、今迄来られたことのなかった麻生路郎先生が近所の人でこつた返す中を、見舞に来たのだがと前置をしてよたよたと座られた。「そんなに悪かったのか」と啞然として手を合わされたのが未だに眼に残る。

時は昭和23年5月1日初めて我が国にサマータイムが実施されたメーデーの日だった。

川柳塔

西尾 栞 選

吹田市 西川 景子

和歌山市 西山 幸

悪女ではない指切りが好きなだけ

悪女ぶるところが可愛い耳飾り

本当は淋しがり屋という悪女

コーヒーの好みを知っている悪女

結末はかならず喜劇にする悪女

あまりにも計算通りにいく誤算

整形の鼻です自慢で折らぬ様

松原市 谷垣 史好

軍備増強素肌に毛皮着る如し

桃の花霞みこの世はすべて些事

情死行細い男の手が頼り

泣いた鳥が機嫌直した腕の中

瘦身の男の美学嗤うべし

熟演は裸になっただけのこと

生まれ来しものに業あり河馬の貌

わたくしも閉じた聖書もさむい春

水ぐるま自問自答をくりかえす

さよならを言わねばならぬ曲り角

約束へ花は静かに散り終わる

私対わたしの勝負見つめよう

濡れ衣を着つづけている愛もある

春の灯へ頼杖をつく影法師

大阪市 川口 弘生

光背の一尊欠けた秋の風

光背の中に住んでて酒が好き

光背のうらに淡海節幽か

光背から抜けて将棋盤覗き

光背を取ると仏の闇がある

み仏は拝まれ光背眺められ

堂に酔い光背に酔う平等院

岸和田市 高橋操子
紙びなで歌えば母の瞳がうるむ
親の意に添わぬ決心する無口

君が代がきこえてきそう母校なり
生きている音よ此の世はすばらしい

いけられて命みじかし寒椿
倅せですまぬ気をするニユースきく

桜井市 岩本雀踊子
故郷で嘘をつけないつるし柿
雪どけに出稼ぎ戻ってくるたより

身内からはみ出た他人の顔になる
裸婦の絵をまっすぐ見つめる絵の心

ヤジロペーの本心ききたい夜の底
古傷にふれる女の水だまり

兵庫県 遠山可住
受付の女を代えてみませんか
ちよつと乱れた型で女の服流行る

他人行儀やないのお寿司を注文し
湯の街の柳が見てる下手な恋

買う人が居て百万のお雛さま
嫁賞めて賞めてみじめになつて来る

大阪府 小出智子
五月かな豆など煮てはおられない
菜種梅雨夫婦に嘘はさらになし

贅沢なころの話がまだ続き
おぼろ月五十半ばのつつましき

うっかりと傘を忘れた共犯者
或る日ある日のために自立をしておこら

松原市 玉置重人
糖尿の杜長ジンスを気に病んで
春の夜に声の大きい客が来る

一枚の辞令の中の数え唄
法善寺すしをつまみに行く話
地下鉄のホームでお布施を数えとり
古傷にふれてはならぬ花便り

米子市 八木千代
絵の中の男を思いつめる闇
まないたが不協和音をたてている

人形たちの電話ごっこはかなしくて
少し嘘をつける鏡はないですか

縄電車桜の下を廻り出す
死ぬことを知っていながら生きている

岡山県 嘉数兆代賀
風はみどりで絵馬も走ってみたくなる
貧しさの中で春には春の五目ずし

誤算つづきの傘が陽影に干してある
追憶の日誌へあの日の雨が降る

慕洗うときふる里はみな他人
破顔一笑明日はあすの風が吹く

米子市 林瑞枝
未完の絵いきなり廻りうろたえる
色紙絵の余白あなたにあげましよう

炎を掬う少女の絵から夏がくる
石蹴りの石をみつめて良寛に
月やがて少女を攫う白い馬車
夢の壺ときめくコント詰めてある

倉敷市 野田素身郎

成績は今一つだが皆勤賞
女心の不思議が五十にして解けず
だといって今更性転換ともいかず
辞職決意してから胃酸過多なおり
逢うてみたからとて所詮人の妻
定年後のプランも妻と食い違い

倉敷市 小野克枝

何事も無かったようにお早うさん
母宛に平がな多くしたためる
雨の日も黙々廻る花時計
手袋の右手ばかりに穴があき
あぐら組む男を信じようとする
形だけ書いてもらって貸してやり

大阪市 西森花村

方眼紙の余白となつて庶民生き
よそのものが通れば吊橋よくゆれる
沢市は杖で目明きはバスで行く
美男美女とわたしも同じ不倖せ
実印がちゃんと肩肘張ってます
ベレー帽もマスクも防寒用具です

大阪市 中川滋雀

耐えてきた証しに軋む北の窓
早春のときめき蕾に会いそうで
春眠や思い残しが許されぬ
四月馬鹿ひとり芝居にならぬよう
バックオーライ熱い情が背なにある
もうアカンやろうと周りの腹にあり

岡山県 白岩文衛

うぬぼれがやたらと今日は喋り出す
手ぶらでは行けない用を頼まれる
考えを変えると靴が軽うなり
オブラートに包んだ話から始め
大正に生れてくすんだ色が好き
遅れて来たら役がついていた

鳥取県 川崎秋女

三月の蛇口一気にしやべり出す
アイデアが一つ生れた春の部屋
夜光虫飼おうよいつか闇がくる
ポックリと明日は死ぬるかも知れぬ
空白の〇・五秒のものがたり
空白へあなたが好きと大書する

富田林市 岩田美代

三月の風に消え行くかるい罪
言い訳の手紙切手不足なり
おざなりをまだ言うている口臭
だまされてやろうよ春の水になる
手ざわりは虹の端に触れたよ

雪こんこん私のおしんも聞いて欲し

八尾市 宮西弥生

春を待つところに挑戦するテニス

壁かけの少女と春の夢の中

面倒は親にまかせて足を組む

追い越した距離だけ淋しくなってくる

ひとほめる言葉はすこし大袈裟に

赤い彩文句なしに好きになり

吹田市 藤村 女

わらべ唄囲炉裏が匂う芋が焼け

どの位置に座っても遺影の瞳追う

野辺送り根雪の道へ椿咲く

極楽へ旅立つ母の鈴の音

輝いた星を私の母と呼ぶ

母偲ぶ涸れて溢れる涙つば

松江市 小林 孤呂二

花を摘むアダムとイブの血を受ける

人生は点線多きことばかり

役人は好いよ好いよと抑えられ

春めいてくると始まる猿芝居

身の程は弁えています酒の唄

おとこ連れだけでは惜しいおぼろ月

鳥取市 小林 由多香

冬の海砂丘も見えて蟹うまし

運命線見つめ癌とはまだ知らず

うるう年二月のリズム組み替える

避難して水かさ増えるニュース聞く

子らみんな巣立ちしつかり税引かれ

宝石へ女の悲劇仕組まれる

米子市 小西雄々

責任に気付かず遮断機上げた愛

逆探知される電話はまだかけず

アルバムへ貼れぬ写真を持ち歩く

春先へ彩刷りしたい娘が二人

蛇口から噂がもれる昼さがり

春先の豊漁へ鱒おおすぎる

鳥根県 堀江正朗

まだ欲があり両手に受ける春

結局は時計の針が決を採り

想い出へ時の流れを知る速さ

旅みやげ舌の好みを知っている

足音の割に進まぬもどかしさ

盃に無駄な昔を語らない

鳥根県 堀江芳子

雪月花夫の記憶を埋めよ画布

待ちあぐむ春に見つけた心の灯

嫉妬などしない妻だと思ひこみ

拗ねている夫の背を軽く押し

手拍子に乗せられてる夫の歌

凡人の楽しさ味方ばかり増え

大阪市 津守柳伸

テレパシーいつも通じる糸電話

本音だけ見せて世間を狭くする
裕福なおしんが遠い人になる
孤独から逃れる策を練っている
年金のはなしが好きな女坂
妥協する生活の知恵を少し持つ

和歌山市

松原寿子

新緑の激しき揺れにつる愛
胸もとに耳にあなたの真心を
慕うてはならぬ自爆を企てる
悲しみをなせ積み残す春の貨車
ひたすらな想いを契り花吹雪
恋うてなお淀の風に裁かれる

竹原市

小島蘭幸

蟻はきつと豊かに眠る冬の太陽
いつ来ても修理している保存地区
根性が足りぬか春の雪だるま
ネクタイも時計も捨てて旅に出る
保険証書ときどき出してみる父で
厄年の妻とてくたく坂登る

堺市

高橋千乃子

団地とも知らず御殿のおヒナサマ
男と女哀しい芝居して別れ
話し合う余地を残してさようなら
化粧瓶ならべて高卒春らんまん
青空を恋う合格の近視眼
人間の証明朱肉をつけた指

松江市

恒松叮紅

キリストで結び和服で色直し
保険でも入ろと夫婦仲がいい
贅沢な夫婦喧嘩の発火点
女房の特技他人をよく覚え
再婚の話へ梅の香が匂う
記憶だけ確かだ呆けの兆みえ

豊中市

安藤寿美子

税金が高い間が花でしょが
春や春小さな旅に出てみたや
春や春せつせとお掃除いたしましよ
死亡記事先ずはお年を知りたがる
沈丁花咲かず去年の日記読む
今ごろは半七つあんと時差計算

熊本市

有働芳仙

キャンパスに欲求不満の色が住み
交際費時には恋も便乗し
記憶にはないと言う手を使おうか
フライパン言いたいことを言わしとき
咽喉の辺までしか出てこぬ年になり
地下茎を手にぬ造花の刹那主義

大阪市

黒田真砂

三歳児もう自我があるおもちゃ箱
満ち足りた暮しをよぎる老いの影
遠廻しに言えば反応ない返事
実力を買いかぶられた日の不安

子に残す何ものもないぼたん雪
世話やけた順に子供の親孝行

出雲市 原 独 仙

八十でカラオケ世相に遅れまじ
真実も嘘も素直なポールペン

小松園氏を悼む(四句)

君の名が失せた柳誌の寂しかり

川柳に小粒利かした小松園

関西弁育ちも大阪ド真ン中

路郎師へよろしくいずれ俺もゆく

兵庫県 辻 文 平

嘘一つ見抜いて溶ける角砂糖

愛情がこれ程温い平手打ち

子を叱る言葉を里へ聞きにくる

あとがきは母の涙で埋めてある

冗談を拾うて飢えを軽くする

心地良い科白で梓の中に住む

和歌山市 浦 野 和 子

小松園先生を偲んで

行て参じますジョークで結ぶ訣れ道

大人だから加減乗除を間違える

若い日のお伽噺へ逃げ込もう

時々振向いても欲し枇杷の花

これつきりもうこれきりと思ふ恋

忘れよう忘れよ昨日の傘を干す

和歌山市 内 芝 登志代

水がきれいとても倅せだと思ふ

老梅が一生懸命咲いている

父親にも育児法がありABC

昨日より前進したい深呼吸

箱風呂の木の香へ長湯してしまふ

糸切歯母のくらしの唄がある

西宮市 杉 浦 婦美子

古い絵はきれいに捨てた旅かばん

流行の原点白と黒がある

故里が近くになつた木の芽和え

こぶし咲き村出身の議員来る

愛想よい医師横顔の冷静さ

ほうき星わたしは魔女になれるかも

奈良市 宮 口 笛 生

筆好きで墨することの楽しくて

いつまでも優しき妻で酒の爛

色々仕事が多い無職です

終電が去ったホームでする思案

それ以上言うて涙がこぼれ落つ

水仙の一気に伸びたお中日

大阪市 西 出 楓 楽

まちがったドアをときおり叩いてる

中年にしきりなおしが許されぬ

ノスタルジアだけの存在価値でよし

掃除魔になろうと思ふ青い空

助手席に座る心は許さず

一生を喜劇役者で終るのか

寝屋川市

江口 度

鴉はからすホーホケキヨとは鳴けぬ

春だより街に届ける送電線

嫌煙権妻も言いだす数え唄

三月の妻の財布は大胆に

親の愛つつかえ棒をみな外す

ひとり旅そいつはきつと卑怯者

七尾市

松 高 秀 峰

もう一つ胃袋あるか酒の量

五分五分の癌の手術にある祈り

自動ドア大事な客をみな逃し

登り坂ライバル後ろ振り向かず

肩書もないが借金ない誇り

倒産の社長へ別宅出来上り

鳥取市

森 田 熊 生

それもそうだがと酔えない酒がある

ふり出しに戻って話酔っている

僕一人だまされている茶をすする

しかるとこ心得ている腕を組む

発車ベル母の意見を抱いて乗る

初心まだ捨てぬ歩幅にある若さ

弘前市

波多野 五楽庵

腹上死になるかもしれぬ心電図

それ以上言うなと友もつらい顔

文無しの顔にへのへのもへじ書く

もうこれでよそう不倫の白い指

沖繩で花見津軽で雪見酒

両膝を抱いて失意の顔になる

西宮市

奥 田 みつ子

子に負ける日を待っているお父さん

仕舞風呂屈伸運動思い切り

ライバルの長所素直に認めた日

判断を甘くしたのはあの笑顔

フリージアを活けると彼がきつと来る

白梅の白より白い亡母憶う

松原市

北 野 久 子

買わされてひなの始末もさせられる

正直に旅のみやげはわかめだけ

視野広く持てば幸せだと思ふ

お暇の際の涙にまた座り

カラオケの浮かれの中に居る孤独

別世界なれど笑顔は持ちつづけ

米子市

雑 賀 美 世

白布地へ母娘の彩が決まらない

崩し字に慣れるともとの字を忘れ

王様になると谷間の灯が見えぬ

水少しさせば氷の角もとれ

金銀に囲まれ王の座が揺らぐ

父の灯を抱いて積木を崩せない

米子市

野 坂 な み

春ですよ鏡におしゃれ勧められ

王朝のかなの気品を慕うてる

墨をする無心になれと墨をする

幾何模様笛で織りなすマスメーム

足ぶみの合わぬ男へ背を向ける

楷書の様な性でジュリーに憧れる

うつす雨指からませてくれる孫

軽口を叩いてあしたの楯にする

過敏性だったと思う紅椿

贅肉の敵と仲よくなりやすし

ひな壇に官女劣等感を持つ

あっさりと連帯印を押して泣く

春の風バドミントンは屋根が好き

母の耳おそく帰った嘘も聞き

その人も逝って時効の裏話

傷心の道に歪んだ影法師

手伝ってくれる子供に手がかり

企みのグラスに満たす琥珀色

肩寄せる団地の窓は五月晴れ

へそくりに誘われて出た春の街

髪染めて憧れぐらいは許される

控え目と言われ口下手よろこべず

まな板に一人よがりのねぎ刻む

よその人と並べないからいい夫

喜屋川市

稲葉冬葉

尼崎市

西村かすみ

大阪市

鈴木節子

浜田市

中川幸一

男女平等それはあんまり水臭い

うちのより良いテールブルが捨ててある

ゴマ播り器役にも立たず出世する

旗印はんやりさせて右左

高度成長猫も鼠も肥えている

下心たつぷりこめた物貰う

強盗を捕えて見れば警部補で

一票に夫婦別あり投票日

桜咲く日本よい国お湯が湧き

夢の世の夢に夢見る夢の果て

周章狼狽焚火の下のもぐらです

月上り梟啼いて星天に満つ

たまに來た孫ソ連風邪置いて去に

年寄りのひや水若葉会と付け

庭に來る小鳥へ凶鑑買うて來る

時々は突きつ放して様子見る

貸農園になってヒバリはうろたえる

ツバメさえ世代交替して飛來

恋をして目隠し同士の鬼ごっこ

その時はわたしもすがるくもの糸

たのしみは散歩コースで呑むコーヒー

ゆとり出來育ちの良さが欲しくなり

鳥取県

森田布堂

羽曳野市

佐野白水

富田林市

藤田泰子

本当の春にとまどう桜草
夫となら私が払うコーヒー代

西宮市 野呂鶴汀

夜の雪下から上へ降る如し

電話口誰かそばから知恵を貸し

二十年笑い続ける父の額

ああ!!これが極楽という朝の風呂

さりげなく背の糸屑とつて愛

喜んで良いのか席を譲られる

尼崎市 春城年代

大正が明治を繋ぐ底力

風の音今は他人が住む生家

口笛は春の帽子にひそんでる

逢う覚悟してから雪が昂ぶりぬ

着ぶくれて情がうまく出て来ない

痩せている川に河童の愚痴を聞く

大阪市 中西兼治郎

立話あつちもこつちも嫁のこと

環境のよさ喜んで居る左遷

奪われた命お金にして和解

抱いた子を片親にして家裁出る

又風邪を休暇に使う電話口

又金の要る案内状が届き

藤井寺市 児島与呂志

苦勞させ今だに我欲捨て切れず

孫にもう嫌われてるのに念を押し

背伸びすることはもう止めにして寝つかれず
死なれたら困ると妻をいたわりぬ
善人の意固地が善人だけ信じ

伊丹市 樫谷寿馬

三月十日を物置にある水筒と

四十幾歳孤児と呼ばれる顔々々

春にも少し苦きものあり露の臺

少年の球に破れた窓に春

早春のストーブ遙けき国の油燃ゆ

倉吉市 奥谷弘朗

うちの嫁どこから見ても甲の上

喜びを分け合う妻がいて足りる

減税を餌に税金よけい取り

会計は妻と信じて趣味の会

裏切りを責めてアルバムつきつける

松江市 柳楽鶴丸

自然の芸術一面銀世界

雪の日曜残り少ないブランデー

スケジュールにない露天風呂の雪見酒

ぎゅうぎゅうと春雪踏んで出勤す

寒雀どこかのひとと似ています

松江市 舟木与根一

脱サラが春で夢をも膨らます

晩年は花がひらいた墓の石

賑やかな法事は浄土へ着いたころ
往復の切符を買っている過保護

酒たばこ封印なんの余生かな

下関市 国弘 半休門

大阪市 河井庸佑

生活に余裕が出来て趣味に凝る

石油湧く国に平和が何故こない

卒業を待ちわび母と娘の渡世

自転車が上りに向いて邪魔になり

反対に向くと嫌いが言い易い

柳井市 弘津柳慶

独り寂しく酒傾けて古稀の膳

寝酒でも飲むか外は猛吹雪

悪友が後妻の話持つて来る

自転車のペダル踏み踏み独り言

獅子となり狛太となり雲流る

岡山市 時末一灯

まだ若いのに反論に色がある

どこまでか一つの嘘へ賭けてみる

流水の呻き焦りと諦めと

パチンコ台突如他人の貌をする

ラーメンが好き男の見合い劇

兵庫県 河原みのる

ワロワ・ワシリエフ サラエホに舞う(二句)

時ならぬ腕に止った揚葉蝶

脱税が億ションに住む腹立ちさ

億の世や孤老が腹に巻いて逝き

一ト冬の無沙汰を山の樹に詫びる

クラス会独りになったおそろしき

下馬評の本命あっけなく敗れ
隠してる積りはないが言わぬだけ

こんな手もあつたと損してからわかり
まっとうに生きているのを踏みつける

知ったふりしたばっかりに背負わされ

高槻市 傍島静馬

吊橋も二人伴れならこわくない

有難うの一と言改札で聞いたことがない

守銭奴の定義守銭奴にもわからない

小笠原流で注がれ飲んでる気がしない

引かれ者警部補だったのにあきれ

島根県 小砂白汀

日向ぼこひらめくものを失いぬ

花嫁にとても優しいカスミ草

足だけでサッカーボールあしらわれ

雨足をむらさきに染め花菖蒲

受けて立つ構えと知ってる足の裏

岡山県 直原七面山

話せば同病

行間に匂う愛

受胎告ぐ声細し

惚れていて年は別

此の世への別れはジョーク言いながら

美祿市 安平次 弘道

運命が狂うジャンケンだつてある

美祿市 安平次 弘道

指切りへ男の枷が太くなる

十人十色短所は長所かも知れぬ

結び目を確かめ合つて来た夫婦

偏差値より絵馬を頼りにする入試

竹原市 森井菁居

父が書く矢印いつも北を向く

夢を編む十七歳のレース針(長女セブン・ティーン)

海岸線歩くと戻る青春譜

勝負師の違いは明日の切符持つ

春雷へ男の出番やつてくる

岸和田市 福浦勝晴

終電車妻には済まぬわが家の灯

糟糠の妻と銭形平次観る

早寝早起き酒を心の友として

税金に協力しているはしご酒

生活のテンポが狂う休刊日

大阪市 江城修史

美しく老いたし初孫は女の子

視野せまき男の詩は乾ききり

せめてもの若さよ若い語を使う

虹を描く夫婦うしろ指に耐え

歳月の流れ愛憎冷めて来る

平田市 久家代仕男

春一番吹くと芽蓄気負いだし

上役の鼻をあかして左遷され

お地蔵さんが殺し文句を聞いてはる

草粥の苦味で触れる捕虜の頃
自画像を渡すコピイをして渡す

倉敷市 藤井春日

子の願ひ無視されている親の見栄

底辺にある愛情を子は知らず

転んだ子へ手を差し延べぬ愛もある

あの人の思い出手繰る毛糸玉

出戻り哀し父母にも遠慮な日を送り

綾瀬市 大山と金

北空にアンドロポフは星となり

甲子冬日本全国氷点下

お隣の喧嘩お隣で笑い合う

決めかねてまた見本棚見にもどり

首にしたやつがつきつき客奪い

八尾市 飯田悦郎

大股で歩いた父にないドラマ

駅前の空地が目につく自転車数

視野狭い多情に咲いて女生き

中国に勝った悲劇はまだ消えず

ジंकウスに徹した悲しい老母の瞳

東大阪市 森下愛論

尽きぬ話の道は六百八十里

盆栽を置き替え置き替え冬ひとり

みずくきの便り開ければ請求書

束ね髪似合う我が家の働き手

おおびらに飲める日暮の遅いこと

諫早市 原田明春
虫歯などないと入歯が意地を見せ

元士官女のブーツをくやしがり
肩書きを外せばなんでもない男

買う気ないのに他人の空地を値ぶみする
控え目に話せば他人はつけあがり

京都市 都倉求芽
のぞき込む井戸に昔がこだまする

雑草の意地ビニールハウスへ生えてみせ
金封へちと固くなる筆の先

引き金をカルテに握られたままの日々
銀婚の潮騒をきく安房の宿(結婚二十五周年の旅)

京都市 松川杜的
一行でよし風邪の日も書く日記

下町が玉三郎の合言葉
雪もよし雪の地蔵が画きたくて

きつちりと八十路の母の出納簿
冒険とは生きて帰る事やと言うてたに(植村直巳氏還らず)

岸和田市 植山武助
芋蛸が好きで厨へ立つ男

その節はよろしく福沢諭吉様
居眠りしたいのに理容師の話好き

ボルノ館の前で声をかけられて
おばあちゃんだけがもてている無口

倉敷市 稲田豊作
試歩の杖日増し伸びゆく春の影

鉢巻をするとチョッピリ強くなる

文なしが借金無いのを自慢する

反省がやがて自虐となる夜更け

善人の仮面は死ぬまで手放せぬ

針を持つ母の背中は丸くいる
縫物が上手PTA会長で
東大阪市 斉藤三十四

盆栽の椿は小さな花でよい

酒の出る会合だから欠かせない
ていねいな言葉になつてきたいけず

今治市 越智一水
はずかしや六十が来て恋を知る

男と女力合わすも島なるか
ゆうゆうと早春を教える雲のふみ

テーマソング音痴は音痴なりに持ち
未来快晴わが家に泳ぐ鯉のぼり
笠岡市 松本忠三

盲判捺して朱肉の鮮やかに
決断がこの期に及び待ったとは

雷を落とす効果のないままに
女房の一票確実とはね

飼犬に油断サンダル隠される
大阪市 天正千梢

むなしきは人の暮らしの夕ぐれか
写真に助けてもらつて絵はがき出しておく

不要な贅肉削っている言葉

素質の低き鉄砲うちたがり
言い足りない別れテープ投げておく

寢屋川市

宮尾 あいき

春雨にしゃぶり濡れて来た女猫

猫の恋自由にさせぬ血統書

どの猫もうちの女猫の敵に見え

逢いに行くそのたかぶりへ帯が鳴る

娘から妻へ脱皮の帯を解く

岡山市

川端 柳子

しあわせはうしろ姿も歌うたう

南の樹鳥もこちらが好きらしい

女偏午後のリビング花が咲く

眠れぬ夜時計の針が肌を刺す

いい顔をみせる人形で疲れます

奈良市

森田 カズエ

貴婦人列車津和野の雨を恋いつづけ

仲のよい夫婦仮面をかくし持つ

表情の異常をあばくレントゲン

頭が高いなんてヤングわかるかな

上積みの話にあつたおとし穴

和歌山市

福本 英子

ねんねこを街で見かけた男下駄

ためらいが雪にも添えぬ糸柳

女ですものリキュールの酔い加減

転勤の辞令へ四月の廃止線

日帰りの出来る所へ出た辞令

大阪市 神夏磯 道子

大きいと言えば大きいと言う売り子

野沢菜のうまさ長野は雪の中

ひなまつり老女おんなをとり戻し

大根たく匂い戦の外にいる

寒の中根だけしっかり生きていた

大阪市 本間 満津子

冷静に聞けば頷くことばかり

それぞれの道へ子はなれ親離れ

爪切って日向でなにかも足らぬ

小さな財布バーゲンセールしか知らぬ

鮮やかに孤独を守る鬼薊

寢屋川市 柴田 英壬子

無為の日がつづく焦ればあせる程

鯉のぼりのあとに女の児が産まれ

ペンネームぶっちゃけ話で知った職

叱られて覚えた踊り藤の花

真心が通じなかつた日記書く

大阪市 藤田 頂留子

ドラマでは経文呪詛に利用され

自分ではいつもサボらぬ信号燈

いつになく冬將軍の長つ尻

どこへ行こ一度にどつと花だより

家中でも災難よけの要る世相

玉野市 小谷 仙山

春一番夫婦喧嘩も派手にやる

陳列棚の中の一人が売れ残り
蛙には蛙の肌がよく似合う
これきりと言つて尽きない母の愛
春を買う男が髭を剃っている

桜井市 河合茂雄

ここからはひとり歩かず親心
浮草と私は明日の風を待つ
カラオケのマイクに腹を覗かれる
飛び越せる自信もつてる自尊心
春闘の疲れ職場で取り戻し

呉市 林野甦光

アイデアの助言身近にいる他人
埋めてある過去掘り返すのも女
共犯の鳩が顔色ばかり読む
うわべだけコロコロ喋る都会ずれ
話題撒く女に戻る裏話

島根県 西村早苗

失なつた顔を探して見る百羅漢
お前もか笑つて破る宝くじ
駅はそこコーヒーゆつくりゆくり飲む
サングラス何故にあお空さけたがる
逢うて見るそんな気になる京の雨

岡山県 土居耕花

ふり向くな亡母に似ている背がいい
胃カメラに痲癩玉が写りそう
言う事を言うて老妻欠伸する

葬儀屋にすれば芽出度い御臨終
税金が酒屋の棚でうつくしい

藤井寺市 吉岡美房

天地皆弾むものあり春の中
人生は色即是空落椿
ひっそりと咲いてる花が手折れない
励ましの声が化石となる別れ
無防備の男の背へ散る桜

守口市 羽原静歩

五風十雨朝のコーヒー呑みながら
ワンクッションおけばなんでもない話
何時の日か別れる人と手を握り
袂張るみな善人で恍惚で
修羅の世にやっぱり揚げる鯉のぼり

羽咋市 三宅ろ亭

神妙な悔悟へ許す気にもなり
都合よい詭弁へ暮らす正義感
マラソンの放映二時間汗握り
億劫になつた散髪二カ月目
敵意懐く相手の目に出会う

倉敷市 小幡里風

啓蟄の虫またもぐる露のとう
零下続く迂濶に咲けぬ桜です
鶯の初音風邪引らしい喉
水たまり跳ぶ白足袋に無理がある
聞き捨てにするには勿体ない話

神戸市 中村 ゆきをを

もう少しねばると肩をたたかれそう

仏より鬼の上司にひきずられ

啓蟄や神戸の小さなバーの椅子

謎ひとつ解けそうコーヒー混ぜながら

木の芽和え五重の塔の見える部屋

仙台市 川村 映輝

騒音も金次第では我慢する

年金がふえた以上に税とられ

再審無罪殺されたことは事実なり

マスコミが知らせる権利をふりかざし

不平不満この人これが生きがい

島根県 榎原 秀子

はにかみ椿床に一輪朝のお茶

惜しみなく語れる友と春炬燵

何もかも観察される眼に出会い

風花を掌に早咲きの梅を賞で

林檎むきふと子育ての日を思い

神戸市 仲 どんたく

一過性のように消え行くヒット曲

先立たれ妻の寝息が聞こえない

神の意を侵す恐れを試験管

父の土母の土そして僕の土

飽食の檻で野性が錆びて来る

倉吉市 渡辺 苦句

なさけ容赦のない雪將軍

目覚めても穴から出れぬ雪が降る

のど仏まで笑い出す春が来た

空白の底から陽炎が立ち昇る

あげくには鬼のカードが手に残り

倉吉市 渡辺 独歩

ライバルをぐっと押えている序列

百千の鈴を吊している余白

てにをはがどこかに欠けているカード

朧夜の昏だけは鮮やかに

美しい顔には右向け右を言う

高知県 松岡 三吉

人間の瞳さわやか植木市

これ以上飲むとあなたはすぐ眠る

忘れました返すことばが見当らず

春がきて首輪のはまる男たち

仲直りすれば何でもない夫婦

和泉市 西岡 洛醉

ハイヒール穿いて恋猫に成って見る

細雪そんな悲恋は過去に無し

水割りのグラスに恩を売っている

突撃のラッパを妻が吹いている

もう少し背伸び足り無い陽の落ちる

和歌山市 若宮 武雄

歩きましょあんととならば臘月

疑いへ寝言の意味が深すぎる

翔ぶ夢を求めて登るかたつむり

直角にも曲る操り人形で

ロボットよ一寸サボってみませんか

大東市

土岐 トク子

美容院木曜マダムで名が通り

亡夫の言う言葉は今日の我に生き

ふりかえる道は幸あり愛の道

貯えることなくすずめは田に遊ぶ

湯ドウフに花のひらいた家族の和

東大阪市

崎山 美子

大根きざむりズムが違う母と妻

出稼ぎのババの電話を待つ夕べ

別室で男が本心のぞかせる

愛情の裏付けがある娘のいけず

グループ買い値上げへ主婦の知恵が生き

河内長野市

竹中 綾珠

鼻風邪と雪が外出控えさせ

雪の中沈丁花の蓄春を告げ

寒椿散歩の道を楽しませ

ナツメロに亡夫の面影偲ばれる

大阪市

北勝 美

忘却を温めたいのも齢なのか

ほんものの姿が写っている写真

結局は行かずじまいで春のかぜ

ごたごたを聞えぬふりも老いの知恵

無邪気さの孫がほぐしたもつれ糸

和歌山市

堀端 三男

白一色大地はすでに動いてる

足るを知るただそれだけの幸せか

末席の声には彩が付いてない

人徳と言われ雑事と縁切れず

手をつなぐ輪の中にいる安堵感

鳥取県

林露 杖

逢えざるもまみゆも輪廻孤児帰る

孤児帰る黄砂の国の春浅し

翳りある女一人の流し雛

点滴の窓に風花シクラメン

句読点ないおしやべりに草臥れる

鳥取県

金川 満春

世界地図今日も何処かで癌細胞

晩景を描くのに悔いを残すまい

二人で手繰る思い出長い冬

そんな事貴方他人だから言える

懐に辞表責任とる覚悟

京都市

山本 規不風

春の風邪娘に恋の知恵が出来

同じ日に妻と彼女に頼まれる

自叙伝に似た小説で殺される

独り居に馴れたおんなに灯をともし

本心の逆さを読んでる易者

きついこと言うても火の粉払うてくれ

宇部市

平田 実男

たまに言うお世辞へ舌がついてこず

軒合戦明日へ疲れを残さない

馬鹿ネーと妻に言われた正義感

仏より喪主へ香典供えられ

米子市

石垣花子

名跡の重荷にあえぐ小さい肩

ろう人形ポーズしたまま脱がされる

足跡の貧しさ知らぬ子が溢れ

息切れもさせずささえて来た妻で

坂道で二人三脚ひもが解け

米子市

田中亜弥

あの時の謎をカラスが知っていた

死角からそれで明日への種をまく

酒飲んで笑い袋の紐をとく

今日の陽へ昨日の罪が悔やまれる

彩りを持たせ定年切り上げる

米子市

菅井とも子

人形がキャベツ畑でとれだした

あぶり出せばきつと出てくる白い紙

妥協して鈴が一拍おそく鳴る

謎のままで幸せだつてこともある

廻り道そんな余裕のほしい齡

米子市

桑原伊都

縄ばりをひばり空から主張する

いたずらな風に埋み火燃えあがり

折返し点私のペースくずさない

回転木馬残りの旅はゆつくりと
櫓の音も絶えて無口になった川

米子市

青戸田鶴

しあわせをもてあそんでる箸の先

廻り舞台の主役が今日もひとり消え

まっ白なままでおきたい娘のドレス

コンピュータの文字にだまされないように

謎々の話にあいた小鳥たち

島根県

錦織文子

仲のいい夫婦の胸に住む他人

自惚はもう写らない三面鏡

ユーモアが解らぬままのヤジロペー

コルセット小さな悔いも少しある

三歳児のおしゃべりからものはじめ

島根県

梅みどり

足元もすつきり春の草履はく

一言のざんげ日記へ秘めておく

風車子の手にまわる春の風

紅の濃さ鏡の中に問うてみる

漬物の味がしみてる母の石

島根県

大森孝華

円満を願う老境耳遠く

ライバルへもれて善人少し悔い

奉賀帳水子地藏へ筆はじめ

円満へ心の角はぐつと呑み

正論が好きふだん着がよく似合い

貝塚市 行 天 千 代

珍らしい雪もう嫌々氷点下

耐えて待つ時の長さよ春やよい

出嫌いも自分で行かねば足りぬ用

もう喜寿がそこへ来てゐる日のあせり

一人世帯でも家計簿は付けるもの

岸和田市 古 野 ひ で

大根の味も亡母似の雪もよい

雪憎しされど憎めぬ雪景色

水ぬるむ肌なきこえる春の声

決心がつかないままに夜が明ける

子に賭けた夢ひとつ消えふたつ消え

岸和田市 清 野 こ う

校庭に草萌え別れの歌となる

魚売る手にもようやく水ぬるむ

地球の裏真夏の画面見る炬燵

立話うっかり聞かれた辻地蔵

お花見の園児花より猿が好き

西宮市 林 は つ 絵

四捨五入四のあたりにいつもいる

風向きでうまくとどいた蜘蛛の糸

あのころはよく泣いていたねえ鍋よ

天寿まっとうこの世の罪は許される

西宮市 妹 尾 春 江

二十四時間と誰が決めたかもう昏れる

春一番少女が島を離れる日

小舟でも夫の確かな羅針盤

向う岸春の女神へ銀の櫂

土雛の亡母に似ている下がり眉

新宮市 川 上 溪 水

それなりの頭も同じ風邪をひき

車間距離少し守れば割り込まれ

義理で行く通夜 服装を妻と揉め

申告へ哀れな服を選つて行き

義理人情金を持たない人ばかり

守口市 野 呂 右 近

一升枡に八合入れて満ち足りる

不足なし此れしか無いと決めてから

灰皿が終日きれいな日は淋し

運動の散歩に近道等しない

失敗のお陰もあつて今日の幸

町田市 竹 内 紫 鍔

思ひ出の勝負縮刷版に見る

告別の写真いきいきベレー帽

身に照らし祖母大ふんばつの雛

にぎやかに地震のあとの電話網

選手宣誓めいて首相の英語かな

和歌山市 坂 口 公 子

ちぐはぐな心で許す罪と罰

騒がずに急かずに耐えてもつれ糸
許された場所で釘が一本抜けている

口数が増えて心をのぞかせる
縫糸に風邪をひかせてしもた恋

大阪市 欄 蘭

和歌山市 細川 稚代

山の端に残雪光る退院日

退院の不安残してエレベーター

信じない信じたくない計報来る

運鈍根美事こなした極逝く

女二人漬物談義の午下り

和歌山県 天満 三千代

夫の留守部屋いっばいに羽のばす

生き残り軍靴の意地は捨てきれず

仏にも鬼にもなれない顔うつす

恋をあむ一目ひとめに無駄がない

掌をかえず女よ何できる

高石市 牛尾 緑良

傷口を庇い合う手が老いてくる

改めて父と呼ばれる子の育ち

病んだ日の時計は妻の手で止まる

青空を見ようよ二人だけの日は

一日の無事を戸口で確かめる

橿原市 岩井 本蔭棒

あの人と乗る方舟は合歡の木で

反抗を放物線で示す石

売り声に鯖も鰯も活きかえる

顔役がふり返っている寄進帳

分校を師の影踏まぬ子が巣立ち

雪見酒下戸はコーヒーを甘くする
雪景色ビルの谷間で風情なし

越冬の失敗鉢植又枯らし

慢性病無塩醬油味気なし

子放れをして光陰は矢の如し

岸和田市 島崎 富志子

いたわりに甘え朝寝のくせがつき

主婦業に手抜きがふえる共稼ぎ

いいことも悪いこともあり一本気

僕よりも先に逝くなと言う夫

賀状来ぬ友が気になり花便り

岸和田市 原 さよ子

白壁も桜も染めて夕焼ける（お城まつり）

出張の息子案じる今朝の雪

雪道を子にかばわれる歳になる

ひな祭り孫中心の料理でき

分家した子の一言を嬉しがり

出雲市 園山 多賀子

漬物の重石が古稀をたしなめる

春雪に愛の告白綺麗過ぎ

一步退き二歩退いて知る温み

裸足ならすんなり渡れる丸木橋

出不精な夫に磨く春の靴

枚方市 稲葉 星斗

氷割りワカサギ釣れる余呉の湖

フロントのボケ満開で春近し
旅先で美味しい地酒と鱈料理
雪国の哀史を偲ぶ竹人形
帰らざる漁師の墓は北を向き

高知県

赤川菊野

雪しんしんあの世とやらも雪やろか
おそろしい言葉笑顔で嫁の唇
哭くだけはないて女の翔ぶかまえ
和服着て女おんなをとともどし
脱皮した女過去などのぞかせず

倉敷市

斎藤通風

足跡が俺の師匠で砂踏めぬ
知りたくば花の心は花に聞け
黙秘権騙し騙され夜が長い
看板に偽りなしは手作り風
無駄な年生かすも医学の進歩から

唐津市

仁部四郎

失策のない日で遂に早寝する
失策のない女房もしわはふえ
失策の捨て場ポケットよりはなし
失策を打つ直言に明日を見る
失策を有名人は芸にする

唐津市

浜本義美

倅せな夢三畳で足る夫婦
失策の後から湧いてくるファイト
箸袋ひろげ音痴も唄う宿

体重とかわりなしに米が減り
春一番吹けば雷威張り出す

唐津市

浜本久仁於

明日からはボクの名札のない母校
南無大慈煩惱一人此処に居る
誰にでも似合う喪服が怖ろしい
壺置を男が城にする謀叛
失策へ男が投げた果し状

唐津市

木塚素石

おつき合い酒が悩ます三、四月
変り目の翔んだ女と旅の宿
仕様なしと思えど憎し寒気団
筋書の無い面白さスポーツ道
着飾った母の心の眼は斜め

唐津市

久保正敏

出発の窓に確かな目の言葉
水すまし体重だけの水へこむ
同棲の炬燵で卒論書く二人
切り売りの知識に非行の子が育ち
メモ帳にある貸し借りに無い担保

唐津市

田口虹汀

憎まれてまで意見する齢でなし
炉端焼婢と気分を食べに行く
両親を主役で招く布団干す
意地なんて売れっ娘だったときのこと
近いから親孝行の真似が出来

均一の値段で重い方にする
干しあげる手に朝の陽がやわらかい
空瓶になつてもラベルものを言う
空瓶が寄り添うようにひとり部屋
うなだれる女に視線が多すぎる

尼崎市 角野 かず子

振り向かぬ無口の意地に矢が折れる
松竹梅日本風土を消す団地
竹光に斬られて絆が深くなる
倅せを教えてくれる社会記事
一筋にハイでまるめる宮仕え

富田林市 中村 優

国民の信頼資産より倫理
美田まで休ませた罰米不足
警官の強盗素人にめし捕られ
サラ金がまたまた人を殺す因
北からのパンダ南からコアラ

和泉市 岡井 やすお

知恵者ぶる女をさけて席に着く
ぜいたくな食事になれた胃が恐い
もう少し白髪があつて似合う年
食事する孫躰ると嫁がすね
一人かと妙に念押す客が来る

八尾市 山下 みつ子

練炭の湯気が一日振りまわす

米子市 寺沢 みど里

真白い薔薇をさかせた娘の絵筆
横文字のカルテ読めない幸もあり
戦国の世にあれだけの筆の跡
鳶の笛さと切り切れない子を誘う

岡山県 岩道 博友

停年へ牛歩の過去を眠らせず
嘘言も上手に話して洒落夫婦
住み心地言いたくもない米を研ぐ
反論をしてからタクシー別に乗り
落し穴仕組む会議に席を空け

姫路市 大原 葉香

空の青あくまで海と妥協せず
内職という下積みにある暮らし
七曲り同じ景色に又出会い
ゆすつてもゆすつても磁石北を指す
十徳の酒におぼれて胃の薬

出雲市 石倉 芙佐子

ふじびたい花簪は一度だけ
むらさきに染めて上げたい花暦
すかたんを言つてピエロは宙返る
耐え忍ぶ砂丘の砂は風に鳴く
一線を見事に引いた蝸牛

今治市 矢野 佳雲

雨の日の波紋饒舌すぎないか
ラッシュアワー君本当に二枚目か
私にも頼むと言うてくれる人

プランコを揺するうなじが瘦せている
内縁の夫独身寮にいる

浜田市 佐々木 裕

つまずいて大きく俺の痛さ知る
帰省子にはげまされつつ水温む
エプロンの白さが寡婦の意地に見ゆ
さよならが淋しくて背を向けている
失望も励ましも妻の手を借りる

出雲市 板垣夢 醉

川柳は儲けになるかと義父が聞く
過疎のバス今日も赤字を運んでる
正座する上座に下座あわてだし
訓練のようにはゆかぬ火災事故
ボケたかな飲んだかくすり数えてみ

西宮市 津山冬子

花吹雪揺れにゆれてるイヤリング
噴水は五色の心待ちぼうけ
金婚の旅のプランは孫がくれ
マイホーム徒歩のタイムが食い違い
顔見知り乗っておらない遅刻の日

松原市 本多洋子

釣人もカラフルになり春の風
ベネチアのグラスに私を入れてみる
コンパスを広げて私の虹を描く
匂い袋で私の過去が消せますか
迷い道トランペットの鳴る方へ

倉吉市 野中御前

恍惚でなんと悲しい神の慈悲
アジトかな忍者の様な下宿人
美しい思い出ばかり亡夫の墓
雪原に勇士の墓だけ顔を出し
子育ても苦勞した時花だった

大阪市 大野武太

読書するゆとりもできた恢復期
なれそうもない人生の達人に
便利さに負けたカードの落し穴
きびしさに負けないプロと言う自覚
世話人と書いてソフトな案内状

米子市 澤田千春

盆栽に打込む傷を持つ男
土鈴ふる青い小鳥に逢えそうで
仁王さんたまには笑いたいだろう
うなだれた花になさけの雨模様
さわやかな朝の和音は嫁の笛

交野市 山木テルミ

ただ街を歩けるだけの伴もある
真っ赤っかの爪重そうに市場籠
改札を出て振り返る孫の顔
税務署で旺盛な意識引っこめる
腹立てて見ても我が娘の言う言葉

大阪市 長谷川 春蘭

反省のききめを見せた棒グラフ

実力がぐんぐん伸ばす棒グラフ
嫁が来て父の好みも変えた味
軽く見た地図あなどって道迷い
石臼が置かれしままの庭に梅

大阪市 杉本 智慧子

春の海見たいのぞみの旅枕
湯けむりのむこうに光る春の海(南部国民宿舎)
良いほうに考えましよう春の雨
人生の修羅場通つてきた強み
思いやりの部屋が心にありますか

大阪市 橋元 美恵

愚痴をいう女の爪がのびている
私しか語れぬ道だ胸を張る
平凡な暮しださらのタオル出す
逆剥けがしくしく痛むじれつたさ
アメリカン通り雨だよ満員だ

出雲市 吉岡 きみえ

言いすぎた後悔風呂をかきまわす
飽食の中でわたしを見失い
くされ縁たちさる姿落ちつばき
雪解けに男が決める正念場
雑草もやがて芽を吹くマイペース

尼崎市 奥山 美智子

慰めの言葉をくれる春の雨
武家屋敷裏戸がいつも開いている
捨てるには惜しいと思う塵もあり

無精ヒゲ女が嫌いと言っていない
寂しくて笑い袋を持ち歩く

兵庫県 藤後 実男

これ以上話せば嘘がばれてくる
モルモット明日の医学に命張る
想い出を捨てて引越し準備する
夫婦して一つの荷物持つ軽さ
蔵の壁崩れ親子の血が絶える

島根県 岸本 輝水

嘘だろうでも女だから可愛い
中華鍋のようにそつない夫(おとこ)で好き
誘われる欠伸がさそう永い雪
雪を煮て零下六度の朝を炊く
マツチ棒の先で掘り出す地獄耳

島根県 山根 峰雪

県道がついて地藏さん忘れられ
山男山に征服されて逝き
背の孫が重く感ずる喜寿の春
停電に有難さ知る掘り炬燵
父親の忌日寒風思い出す

岡山市 花田 たけ志

コンピュータ袖すり合わず指定席
老人にきかせる子守唄もある
自画像を描けば汚れた線ばかり
貫けば友にはぐれる道に出る
頼もしい息子に見えぬ親のエゴ

大阪市 吐田公一

嫁が言えばすんなり折れる息子がにくい

帯解いてからが女の蟻地獄

父の座の威力が消えた定退日

こちらから折れば解ける四面楚歌

單身赴任妻と逢う瀬もままならず

姫路市 丁坪 サワ子

お彼岸を待ち兼ねている故郷の墓

税制も気になりません低所得

老いの身に嬉しいテレビの旅紀行

亡夫という空白趣味の彩で塗る

満ち足りた中にも少しある不安

豊中市 田中正坊

酔眼に映る車内はみんな美女

胸張ろう我ら年金生活者

銀行の単車に年金狙われる

アイデアは良いが先立つものがない

小さい子をバカにしている自動ドア

河内長野市 井上喜醉

鳩の意地都会の空に住み馴れる

福耳で落ちそう小粒のイヤリング

四面楚歌下手に動けぬ狭い国

一度踏むだけなら許そう勇み足

人間のエゴが気になる花の私語

岸和田市 芳地狸村

暦から平穩無事の日を選び

へそくりも妻に似ている嫁がくる

移り気の選ぶネクタイ多すぎる

高層のビルに死角のある都会

軽口を自然にたたく妻がいる

大阪市 鍛原千里

夢で見たあの人ぬくみ残さない

女とは愛のモチーフ編みつけ

グーチョキパー貴方の答へ何を出そ

ひと時の流れに負けてなるものか

ふと妻を忘れた日の花時計

西条市 片上明水

岐れ路風の冷たいみち選ぶ

そして春祝辞を述べる日が続く

うちの屋根だんだん低うなつてゆく

追風に乗るには小さい父の羽根

一本橋妻の合図で渡ろうか

島根県 松本はるみ

胸にある荷物ズシリと菜種梅雨

大根の瑞瑞しさに負けてくる

差し向い二つ作った茶碗蒸し

帳消しの出来ぬ手足が冷えてくる

島根県 石田清泉

風花の乱舞余命をいとおしみ

風花の一瞬土に舞い戻り

寒椿雪に染まりし春の詩

坊主頭の少年の目は澄んでいる
雪を掘り摘む白菜の芯が伸び

岡山市 井上柳五郎

親兄弟泣かせた遺影笑うてる
聞き慣れぬ俺の声かとテープ聞き
感激のさめない間にと便り書き
オロナミン一本万札くずすなり
残り酒集めてとけぬ輪戦友会

岡山県 荻野 鮫虎狼

さりげなく部下に引継ぐいばら道
一日の無事を祈って雨戸開け
何時の日に役に立つやら輪島膳
体温を置いて帰った散歩道
空瓶が軒一杯に冬が明け

境港市 細木 歳 栄

流し雛子の幸祈る水の冷え
鯉のぼり今は家運を語らない
春よ春頭の回転にぶりがち
背伸びする足サラ金にすぐわれる
カラカラと錦夢みる糸車

和歌山市 坂部 紀久子

やり直す気持をくれる春が好き
まん丸い話に女すぐ飽きる
意識する人へ座席を一つあけ
一行の日記で終る無事な日々
八、百屋にも国際的な品並び

ようやくに入学した子山岳部
儲かってほくほくなのにあきまへん
野次馬に一つもない愁い顔
親の仇貧乏神に返り討ち
霧深し誰か行方に迷わざる

大阪市 山根 いつを

棚からは何も落ちない平和だな
悲しみの見えるめがねはもう止そう
小芋煮る再婚話あれつきり
風船になりたや風と遊びたや
棚に積む蔵書にいつも睨まれる

松江市 竹内 すみ子

糞公害寺に鳩の餌売ってます
我が家には造花見舞の花を買う
小都市の駅も造花よ手間省く
郵便と新聞が来て二人だけ

福岡県 横地 雅 風
兵庫県 梅谿庵 朝 翁

誤字あて字それでも代書屋金をとり
無くなって初めて判る妻の味
血型がどうであろうと親は親
口けんか妻に勝てない弱身あり

神戸市 山口 美 穂

空白の日記心の中には書きとめる
平凡な幸がほしいとひとり言
思慕一途小さな明日へ夢をもつ

雛飾る母娘あの日と変らずに

大阪市

柳原静香

奈良県

宮川古都路

妬いた日も忘れて夫の古稀祝う

春風へうかうか鍵を掛け忘れ

その先を言えば血圧上りそう

春になったら動き始めた腕時計

西宮市

西口いわゑ

きっかけはみかんが取りもつ旅の空

おしっこも指名制なり孫二歳

梅だより寒さの中の春を知る

身動きの出来ない恋や冬木立

島根県

木村はじめ

尼崎市

伊藤春子

ピニールで育ち風物詩も消える

生きるとは耐える事だと又値上げ

式銭銅貨貰って弾んだ遠い日よ

振り返る人生靴の片ちびり

岡山市

行吉照路

バックミラー白バイ写すとはうれし

木枯らしを焼く火が笑い声になり

紫の彩を一匙女持つ

振り込みに月給年金妻のもの

島根県

松本文子

疑問ひとつ抱いた儘亡父三回忌

ほほえみが途中で凍る風の街

一滴の水ここからの川の旅

筋書きがどこかで狂う姫鏡

脇役の妻が多忙で日々たのし

足音に話題の鬼は来てのぞく

インタビュー門を閉ざして城護る

首振れば老化の音に骨きしむ

岸和田市

吉水照江

数々の思い出巡る老いの坂

ボス猿も一族守る肩の幅

流しびないろんな思い胸にひめ

物よりも人の温みのほしい頃

修羅に負け石庭を訪う雪しきり

梵鐘へいばらの道をふりかえる

さむざむと定年からの離婚きく

実る恋散る恋聞いているベンチ

島根県

藤原鈴江

そよ風がハミングしてゆく桜土手

置き替えて見れば善人ばかりなり

ハンカチの白が哀しい喪の女

色褪せた日記が泣かす晴れた午後

姫路市

松浦輝月

適齢期過ぎた娘を持ち低姿勢

初島田夫に解かせたハネムーン

水子地藏男に言えぬドラマ秘め

ハンディを庇い合ってる愛の家

自選集

本田恵二朗

テールルマナーへ口笛が吹きたくなる

若柳潮花

うつ慎を落書ぐらいで晴らせるか
二で割って五にして母の愛たしか
井戸水で炊いたごはんでもてなされ
さりげなく横から車押している
式服が佳い地固めの雨に濡れ

黒川紫香

三味の音が引きずって行く瞽女の恋

工藤甲吉

すんなりと去んだら電話かけて来た
この歳でじゃんじんと来る女文字
ラーメンの袋が残る部屋が空き
素っ気無い男が払うコーヒ代
素泊りをしたのか猫の朝ごはん

正本水客

油断大敵パトロンを盗まれる

大矢十郎

上品に振舞い過去を隠さない
一病を得て顔立ちが深くなる
知ったか振りの声がだんだん大きくなる
ざぶざぶと慕情を洗う減らず口

これほどに悲しきものかインコの死
通夜終る一番先に出る勇氣
三尺さがって生徒の影におじ

議員の名読む弔電は数のうち
父に似て来たか嬉しや情なや

野村太茂津

須磨寺の情に出遭う亡父の影

シベリヤの友よ須磨寺もまだ溶けぬ雪

首塚や武士の情にほだされる

風見鶏見えず饒舌許される

コーヒーに餓えて迂路つく坂の街

山内静水

組皿の一枚ドラマに似た出逢い

お上手のない女房とする芝居

ゲームは終る友達は裏切れぬ

はき出して聞いてもらっただけのこと
別れても挨拶だけはさせてよね

藤井明朗

春謳歌街さわやかに恋模様

口閉じてからおんな隙を見ず

酔いに任せてラ調など気にとめず

人形と同居玄関に靴を置く

しぶしぶと承知それから閑がいる

水粉千翁

ふりかえる道へめがねを拭きなます
啓蟄という正直に這い出ます

背負い切る重さうれしく生きのびる

みな女ばかりで孫の値を上げる

老いの道スタートライン引き直す

金井文秋

万円札耐える限界きてくずれ

あじさいの移り気ならば許される

事故というお酒の害もあるんだよ

金持が泣言言えばやばつたい

話べただだから露骨に出た本音

市場没食子

柳交五十年小松園さんにも先立たれ

老い二人ひとと鼠も居ぬ生活し

老いの肌ゲートボールの汗滲む

春浅く満州生れの従弟の訃

孫大学へ

受験の灯目出度一つ消えた窓

月原宵明

粕汁や女ばかりの謀りごと

平凡のよさが凡人解らない

陽炎の中から貨車が躍り出る

エリートに力瘤などあるものか
冒険がしたい女のサングラス

川柳の群像

和田默然人

東野大八

今日、和田默然人といつてもほとんどの人は知らないう。高齡な川柳人の記憶にわずかに残っているだけである。

默然人は明治の終りに中国天津に渡り、大正十一年天津川柳社を興し、同地初の川柳誌「ホコリ」及び「蒙古風」を刊行したが、終始詩川柳人で通し、作句に柳論に縦横に活躍して柳樽寺の機関誌「大正川柳」の選者、傍ら田中五呂八に傾倒し「永原」同人。戦後の昭和23年復刊した「川柳人」の実現に一役かいた、剣花坊、信子を畏敬し続け同年五月中旬、遂に禍に終る禍福の繩の端

——戦犯より先に弱者の絞首台

——迫る死を前に心の窓が澄み

等の自らの弔句を交遊深かった川柳人数名

に書き送り、千葉県保田駅附近の妙来寺裏山で夫人を道づれにして縊死した。

私がこの故人と初めて面接したのは昭和14年の春、北京であった。石原青竜刀の紹介でその会食の際、青竜刀と私の提案を受け、默然人居を拠点に北京川柳会が結成された。集まる柳人は平松圭林ら約十名で、のちに森東魚と品川陣居も加わり、魯迅の実弟周作人の協賛で北京川柳展まで催した。

この北京川柳会結成の頃、默然人は北京の花街、前門裡小四眼井胡同で、ナニワホテルという旅館を経営していた。余談だがこの旅館を開業するため、土地家屋を斡旋したのは北支・蒙疆視察中の麻生路郎と門下の岩崎柳路の二人だったと終戦後に知った。時に昭和

13年9月（麻生路郎主宰「川柳雑誌」編集後記）

北京川柳会の発足を機に初めてナニワホテルを訪れた時、木造二階建て（元妓楼）の階上階下二十数室の部屋部屋をみて、若い私は眼をみはった。そこには半文銭、剣花坊、五呂八の掛軸、色紙、短冊が目白押しに各客室を埋めつくしていることだった。

「番傘が、日傘かしらんが人の苦勞も知らんと川柳、川柳ばかり言うて……」

と小柄の婦人が帳場の机の上でからからと笑っていたのが今も臉に残っている。この小粋な初老の人物こそ主人の死の道行きの相手をつとめた默然人夫人であった。

子供のないこの夫妻に、二十歳余の独身の私は殊の他眼をかけられよく電話を貰った。

「五呂八は生涯のうち七枚しか短冊を書かなかつた。その一枚がこれ、さしあげるから下宿の柱にでもかけときなさい」

私が訪れると夫人が必ずコップ酒を運んできた。二人でそれを飲み、話はすべて川柳である。柄の大きな見事に禿げ上った額や太い鼻筋はまるで烏天狗のようにながちりしていたが、耳がひどく遠いには参った。

「わしはな幼くして両親に死別、雑貨商の叔父夫婦に育てられた。長じて取引先の雑貨

卸商の許へ丁種奉公に出され、二十年勤めるうち、天津行きの機会に恵まれ、一旗挙げると決心で独り天津に向った。大正四年だ。

黙然人は明治十八年静岡県生れ、本名榮次郎。渡津したときは三十歳だった。

大陸川柳作家同窓会の久門薩城(ハシ)は、大正の初め天津の日本領事館に勤務していたが、同僚でいたのが石原青竜刀であった。

「大正五年私は兵隊検査をうけた時、来津一年後の黙然人は置屋の箱丁だった。それを暫くやって雑貨の仲買人をやっていた」

箱丁というのは芸妓置屋の男衆で俗に箱屋ともいい、芸妓の三味線運びをする傍ら、芸妓の着付けや種々の雑用をつとめるのが仕事である。ナニワホテルでの私の観察によると

黙然人夫人がどこか粹づくりで佻法肌なところから、おそらくこの夫人は水商売の出で、箱屋の榮さんと惚れ合った仲とみた。夫人の名は直(なお)亭主より四つ齡上であった。

黙然人の川柳の師は磯貝意想郎で、往時天津日報の印刷部長。この人物と別に同社の記者をやり、のち天津で邦字新聞を発刊した小林一考という柳人がいた。これが青竜刀を川柳に誘った人物。時に大正八年である。

明治から大正に改元した頃、天津の大倉商事に川上三太郎がいた。三太郎は狂句一辺倒

の天津柳界に反発し、川柳研究会なる新川柳グループを作り、それに黙然人も加わったがこの同志はわずか四、五人だったという。

意想郎に黙然人、それに堀天津郎らは大正11年3月、天津川柳社を結成、機関誌「ホコリ」を出し、二年後に廃刊したあと大正15年2月「蒙古風」を創刊した。この頃、大連から「白頭家」(大正14年刊)が出ており、これ

が昭和3年頃には柳樽寺派の革新川柳誌に姿を現していた。その同人は井上鱗二(劍花坊長男を中心に、佐々木三福、中野柳陽、大島壽明)らである。この誌の招きで劍花坊、信子夫妻も来連している。黙然人はこの同人。

「蒙古風」は誌齡36号。「白頭家」は同30号をもって閉刊したが、この間、黙然人は作品に評論に雑筆に縦横の活躍を示した。彼の最もあぶらの乗り切った川柳活動期だった。

「川柳とは十七字の真実の詩である。日常茶飯時の家庭川柳や、父母兄妹孫などの凡俗な親類川柳など作っているのは、人間生成の真たる心になんの益があらうか。新興川柳の一義相とは生きとし生けるものの魂の宇宙芸術でなければならぬ」(白頭家所載)

これが黙然人の生涯を通じて一貫した川柳主張であり信念であった。

北京でホテル経営に入る直前、懐しの天津

を去るに臨んで昭和13年春、黙然人夫妻は内地を訪れた。これはその前年死去した田中五呂八の墓に詣でるための北海道の旅であった。

このあと北京でホテルを開業したが、戦局の進展につれ北京の観光客の姿もなく、経営も思うにまかせず昭和十八年ホテルをたたみ帰国、横浜の甥御に当る家を頼ったが、その翌年の横浜大空襲で罹災、老黙然人夫妻は裸身同然で終戦を迎えたが、再起の目当てとてなく、わずかに柳樽寺の機関誌で戦時冬眠中の「川柳人」の再刊を祈念しつつ遂に夫妻は死を決意した。その忌日は昭和二十三年五月十九日である。

昭和23年8月の「川柳人」復刊第一号は、「黙然人追悼号」である。この誌上に黙然人の「放浪」と題する絶筆の遺稿が、二頁にわたって黒枠で特集されており、そこに淡々と死出の旅程と句を記し「六十六年の生涯顧みてもうこの世に思い残すことなし、憶い砥の如し」としめくくられている。

この時北海道にあった高木夢二郎は主宰する柳誌「ちまた」を黙然人追悼号にあて一句「日本の罪科を言わず夫妻の死 夢二郎

★次回は「川上三太郎」

俳風柳多留廿六篇研究 (十五丁・十六丁)

石田成佳・大屋六郎・八木敬一
鈴木 黄・石田晋一・南 得二
小野真孝・本多正範・多田 光

故岡田 甫

252 はらみ句で点とりに来る下女か宿

石田成「孕句」は連歌、俳諧で、その場で作るべきに、あらかじめ考えて作っておいた句を提出すること。本句では下女が孕んだことにかかると。

孕句、点取共に俳諧用語を利かせて、請宿が下女と交渉のあった相手から金をゆすりという魂胆を詠んだもの。

づばらんでゐますとにちる下女が宿

拾一・16

多田 贊

岡田 同

253 ひそくと繁昌をする出合茶屋

石田成 出合茶屋は逢引専門の茶屋。普通繁盛すれば賑やかなはずですが、此処ではことがとだけにひそひそしても繁盛をする」と逆説的に表現したもの。

ひっそりを御ちそうにする出合茶や

明四・礼5

いつきやくか有かさみしい出合茶や

安八・梅5

多田 贊

岡田 同

254 色キシやうかかけさりとてハおしい事

石田成 不明。

大屋 大名屋敷の奥家老を詠んだ句では？

八木 小野小町としてはいかがでしょうか。

南 八木氏説贊。「さりとては」は雨乞小町の歌からの文句取。

さりとては小町は雨にはかりぬれ

八七・28

多田 同。

岡田 同。

十六丁

255 松竹て千里も祝くす寅の月

大屋 天下泰平の御代、風もおだやかでまことに結構なお正月を、お江戸八百八町といわず、日本中が松竹を門ごとに立てて祝っていることを詠んだ句。

この句は、「千里同風」という連語を意図してつくられた句で、千里から寅という語がおのずから出て来る。

知的なことばあそびの要素が勝っていて、あまりおもしろい句ではない。

松ヶ枝のとなりへからむ町の春 六・一

八木 贊。「竹と虎」の効かせは考えてよいと思う。

石田晋 家康の寅歳生まれは関係ないでしょうか。徳川礼賛句とりたいのですが。

本多 松竹、寅は徳川家康と深い関係があるが、その意味で徳川礼賛句と限定しなくてもよいと思う。泰平の世の春を祝った句でよいと思う。

多田 私も石田晋さんと同じく、徳川礼賛句ととっていたのですが。

岡田 同感。徳川家康は寅童子の化身と言われ、幼名竹千代、三州松平出身なので元は松平姓。これらが全部詠み込まれている。

256 狂言ににつと冠の緒かゆるみ

大屋 城中お能に、長上下姿で陪覧した諸大名諸役人は、能と能の間に演じられる狂言のおかしさに、思わずニヤリと笑う。衣儀正しく冠っている冠の緒がゆるみ、気分もくつろぐ。

大名の臍をうこかす狂言師 五六・38

本多 贊。大礼能と考える。

萩大名て御烏帽子の緒かゆるみ 五四・2

是本句と同工異曲。

多田 贊。かなりの想像句でしょう。

岡田 同。

257 御ゑらみの枝折にもなる紅葉也

大屋 「枝折」は、山道などを歩く場合、道の目印として木の枝などを折ることから、読みさしの書物などに挿んで目印とするもので現在でも用いられる言葉である。

藤原定家卿が、古歌の中から、百人一首をおえらびになるときに、筆を攜いてお立ちになる時など、小倉山の美しい紅葉を枝折としてお使いになったことであろう。

一二首ハもみちのてりてゑらむ也

紅葉て定家の机そら明り

一四・37
四二・22

多田 贊。百人一首の成立についての論文が「文学」などに出ているようです。

岡田 贊。

258 歌によむ時はやさしい大江山

大屋 大江山といえは、おそろしい酒吞童子が住むおそろしい山とされているが、藤原保昌、和泉式部の娘の小式部が中納言定頼によみかけた「大江山の歌」は優雅な大江山を感じさせる。

小式部ハ地利を功者に口こたへ

二六・28

鬼のすむ山をやさしく一首よみ

三二・30

八木 贊。

小式部の手柄一首の大江山

一三四・35

本多 贊。「大江山いくの道の遠ければまだふみも見ず天の橋立」の歌の出典は、「金葉集」。

多田 贊。

岡田 同。

水煙抄

黒川紫香選

熊本市 永田俊子

名古屋市 藤井高子

肩書を捨てて広がる踊りの輪
決断を促している自動ドア
妥協する酒を飲んでる曲り角
風が連れてきた噂に耳を貸し
絆という紐を子供は投げ返す

尼崎市 田中晴子

言いわけを雨にさせてる袖だたみ
病室へ奥さんでない身のこなし
尖った靴で島を出てゆく次男坊
職退いて中途半端な昼の顔
なにもかも聞いてしまったロバの耳

高槻市 笠鳴 惠美子

夫まるくまるく風にも逆らわず
コーヒータムあなたはチンと待っている
啓蟄や軍艦マーチ鳴り響く
にくめない男と風に吹かれてる
アンテナは外そう二人だけの城

しなやかに柳風速読んでいる
狐が好きででんでん虫の佗住居
流れ藻のざわめき盗作聞いている
割り切った筈をつり銭なぞ数え
以下同文男ひっそり裁かれる

西宮市 紀市郁栄

どの道を行っても花が枯れている
心貧しくてたつぷりと湯につかる
リーターはそれほど冴えない方がよい
なさけある洒落で明るい通夜にする
ある予感老人手帳を持ち歩く

富山市 舟渡 杏花

ロボットのクシャミ人間臭くなる
ささやきを疑いながら髭を剃る
百も承知でカルテに叛くことばかり
いい話なのに依怙地がじやまをする
佗助の一輪くつ音待っている

東千市 小山 悠 泉
父ちゃんが少し脚色した童話
矢印を行けば幸せつかめそう

家計簿の赤字バートの妻が埋め
新聞少年へ声掛けてやる朝の冷え
老妻のおしゃれは花のペンダント

尼崎市 丹下 玉子
鈴の音三日家出の猫掃る
紙雛を飾って孤独をなぐさめる

子は宝指輪知らずの母の指
エレベーター女の匂いにむせる時
止り木が揺れると古傷疼き出す

和歌山市 中尾 まゆみ
白いページを緑の風で染めてゆく
萌える日々素敵な風を抱きしめる

鍵っ子にいつも芽えてる母の鈴
アルバイトの中にわたしの旅がある
十五歳へさよならをするときめきよ

守口市 森川 まさお
妻は妻で小銭の用意する旅行
ポケットに両手船員上陸す

言訳がしたくなったら爪を切る
辻ひとつ曲がると好きな町があり
北風に大事な話さらわれる

和歌山市 福井 桂 香
春を待つ少うし恥ずかしそうな月

スイートピー夢を束ねた春の壺
美容院ハワイの話なども聞き
ダブルベッドゆがみ直して妻の午後
くしゃみ一つしても赤ちゃん主役なり

尼崎市 春城 武庫坊
摺る墨の濃ゆくならない日の焦慮
一言を女の耳に置き忘れ

ロボットのいれた香りのないコーヒー
母の背と同じ丸さの卵焼
世紀末医者卵の無精卵

鳥取県 森山 盛 桜
針先が女を酔わすほど尖り
犬の目にゴミ箱うまい物ばかり

酒いつか税の分だけ愚痴になり
恋冷めてみれば緑が目奪う
濁流が澄めば素直に謝まろう

近江八幡市 前川 千賀子
履き古すサンダル二足妻の四季
早春を演じて果てる梅の花

明日逢える話したいこと溢れそう
四月馬鹿いちど嫌いと言つてやる
うたた寝の夢にテレビの笑い声

高槻市 竹内 花代子
啓蟄へ虫は土出る化粧する
待たされる事に馴れてる置時計

屋上で鳩一列に日向ぼこ

ヒット盤裏も一緒に歩いて行く
薬飲むコップ一つで済む夫婦

尼崎市

吉永伊三郎

行く女は追いなさんなどはぐれ雲
ピーポーが遠く小さく消えてゆく

名古屋

越村枯梢

つまずきの風に頷く庵主さま
孫が背を流してくれる数え唄
茶柱を逃して才女老けてゆく

吹田市

茂見よ志子

銀行の外交無理を言いにくる
アルコール飲まぬが雰囲気に酔う女

吹田市

宮崎シマ子

友の愚痴聞いて幸せかみしめる
花鉢を買って豊かな今日にする
暖かくなればお洒落をしたくなり

米子市

林荒介

春先の金魚売りから来た葉書
老いふたり違う童画を抱いている
舞いおえて笛もごろりと横になる

米子市

後藤正子

彩あせた紙人形でつつがなし
何事もなかったようにネガ破る

岐阜市

市川鱗魚

次の手を考え無地の旗を振る
美女の貌もなき花も春はある
泣き事を言うから石にけつまずき

豊中市

満仲きく子

したたかな寡婦で包丁研いでいる

豊中市

満仲きく子

海底でつぶやく貝の意気地なし
啓蟄へ夫の水虫動きだす
吹く風に逆らいもせず風見鶏

名古屋

越村枯梢

もつれ糸母は解かないままに逝き
呆け病棟童話の好きなどいがる
夜しんしん盆梅の紅まばたきぬ

名古屋

越村枯梢

抱き癖をつけて返して噛みつかれ

八尾市

宮崎シマ子

カラオケに五人囃子が歌い出す
約束へ心がゆれるイヤリング
余生なお急ぐ事なし花に酔う

八尾市

宮崎シマ子

這い這いの子が鏡の裏覗きこみ

和歌山市

後藤正子

ラブソング流れコーヒー二杯目を
レパートリー広げていますフライパン
保険嫌いなあなたへの内緒事

長岡京市

木本如洲

お返しのパントマイムが通じない

長岡京市

木本如洲

二ヶ月の寒さ受話器に計がとどく
ためらいのハンカチ白く干してある
限界を夫婦で駆けて虹に逢う

実印を拭いてしあわせなど思う

藤井寺市

赤木和子

打ち返す波あり訣れの一瞬に

藤井寺市

赤木和子

音信の絶えて久しい花馬酔木
白壁の剝げ落ち具合も旧家なり
句読点打って呼吸を整える

高槻市 久保和友

安っぽい酒が並んだ父の部屋

組板の上の鯉めく心電図

すぐ辞表叩きつけたい二度の職

朝ぼらけのよさを背後に駅のそば

熊本市 宇野昭代

左遷地の春へやさしい猫柳

いい日和上衣はベンチへ忘れられ

折り返し点から時計の早い足

走り過ぎ袋小路に突き当り

熊本市 大川幸子

カタログ文化色んな知恵を教えこむ

雨女ねとそれなりに覚悟する

生きがいの中におしやれも女いれ

とつときの言葉を胸に暖める

熊本市 高野宵草

ぶらさげてニッコリミシンを掛け終り

満更でないかと鏡が言いました

オドオドと僕は大金持ちすぎた

封したら書きたいことを思い出し

宝塚市 丸山よし津

浅はかな見栄が言わせた嘘一つ

地下出口間違えたらし雨の街

役目終えた母は幸せだけ運ぶ
答ボン仕組みは見せぬコンビニーター

高石市 浅野房子

待ちわびる桜前線雨しとど

さくら貝春の渚に忘れられ

春一番吹いて財布が軽くなる

黒髪を結び上げ女の顔になる

寝屋川市 平松かすみ

おでんぐつぐつ夕刊読み終り

一口の加減やっぱり妻のもの

面積は坪に直してみたくなる

見上げてても宇宙遊泳など見えず

寝屋川市 堀江光子

子が描いてくれた瞳はきれいすぎ

片かなの忠告が来て煙草やめ

生真面目な男マスクでやって来る

案内状に寄付の追伸従ってくる

京都市 松川芳子

心地よく酔うて絆をたしかめる

仏顔して浮浪者の群にいる

心にはそむかぬ日記書きつづけ

孝行の話へ素直になれぬ耳

竹原市 岩本笑子

チクタクチクタク僕の心の海探す

やっと来た春だよキラシずしいかが

孤独とはツクシの一人言なのか

切り絵にも似て残雪の中国路

大阪市 古川 美津枝

大陸へ夢を落して来た女

露天風呂悪女が夢をあたたためる

乱れ髪ゆうべの夢を梳く鏡

つり橋の向う極楽あるやろか

吹田市 井上 照子

ひとり旅案内板を指で追う

置き手紙斜めに読んで撫でる胸

風邪薬散歩の帰り買いに寄る

彼を待つ鍋煮詰ってしぐれする

岡山市 広田 小菊

向かい風うけて女は裸婦になる

ま夜中の雨は女のしのび泣き

三つ指をつけて女はうそをつく

帯とけば女の乳房こおりつき

岡山市 山本 玉恵

気楽さが今日も明るい風を呼ぶ

遠ざかる足音を追う耳になり

指切りによわい女で待ち呆け

つかの間の愛におぼれた雪あかり

滋賀県 安田 志津

茜雲小さい悔いが追いかける

あてがあるから御機嫌も取っておく

スーパ―のチラシで夕餉考える

いいすぎを酒のせいにはしたくない

吹田市 栗谷 春子

奥の手も出せずにしまふ懐手

出嫌いと出好きがいつももめている

ペン先がひとつの言葉探しかね

枯草の蔭に小さな春一つ

羽曳野市 天崎 只士

春の風蝶が私を連れていく

人が好きとてもひとりで暮らせない

何もかも話した後で裏切られ

主役にはなれぬビエロの薄い影

豊中市 上田 登志実

新緑の山に向って深呼吸

中流の上がローンで苦勞する

未亡人指環に悩み訴える

好運の木花屋も知らぬ花が咲き

熊本市 北川 一進

本当下戸ねと真赤な顔の色

お隣のピアノ届いた音でなり

予算内済んで幹事は呑み直し

税務署の窓口かたい話だけ

伊丹市 樫谷 郁子

幼き日祖母と飾った雛の宵

雛の日に摘んだよもぎのなつかしき

水仙が恥らう様に蕾つけ

春らしい色になつて土の黒

尼崎市 山田 保蔵

戎さんホントに福をくれますか

鏡餅ノミで割ります小正月

二十一世紀幕のあくのを是非見たい
乗手ない電車にドアーみんなあく

尼崎市 児玉歌子

自画像へ願望を盛る筆加減

風に乗る噂土足で押し寄せる

渦巻に負けてしまったトンボの目

塩振って魚屋明日は売る構え

尼崎市 鈴木良征

鼻唄は音痴の方がたのしそ

白足袋に渴きがつりの不倫の恋

去る人の背なに吹き矢が突き刺さる

隠しごと心にささる妻楊子

大阪市 萩谷まさ

背伸びする足を引張る神もいる

肉親を探す孤兒らと共に泣き

ホッとして先ず一番にスポーツ欄

サラ金で一生棒に振る男

竹原市 古田比呂子

竹の子の支えよ空からみてほしい (小松園先生を悼み)

鍋いっぱいカレーをたい日曜日

気くばりの姑と嫁とで円を描く

三世代同居たくわんのきざみ方

寝屋川市 岸野あやめ

色即是空心当りはあるけれど

默契ということもある大人です

引き算が上手わたくし主婦ですの

鯛焼かせ蟹買いに行く戎橋 (配偶者還暦)

弘前市 田中叶

起こされて雪の夜妻とする話

ビルの裏のつべらぼうで窓少し

正面に山ありゴミを焼いている

仏壇の部屋でいつまで待たされる

指宿市 渡辺伊津志

さよならをする手袋の赤いこと

遮断機が下りて急用思い出し

凧つなぐ糸が西陽にひっかかり

つらいから人の痛みが分るだけ

岸和田市 高橋よし子

無表情のまま最終の地下鉄道

平凡を幸福として母は生き

ゴキブリを横目でにらむ風邪の熱

少しだけやさしさほしい酔いとなり

岸和田市 奥礼子

子育てを終えて再び妻になる

雨降って柳誌じっくり読める午後

絵筆とる心も満つる八重桜

城下町名残りとどめる武家屋敷

鳴門市 八木芳水

ひと言で失意の胸に灯を貰う

温室に色よく育ち出歩かず

春風に恋の便りをなぶらせる
正論を吐けば帰りは一人ぼち

尼崎市 佐藤美代子

パパのメニュー野菜のためと目玉焼
笛吹けどそっぽ向かれる郊外地

忠告が素直に聞けぬ恋敵

手なぐさみ一枚だけが残ってる

羽曳野市 田中隆二

寒くとも花の季節に花は咲く

母の手の温もり知ってるにぎりめし

パチンコに勝った話に夢がない

頑固さが一筋の道歩かせる

米子市 足立由美子

待ちわびた春といっぱい話する

平凡な一日家事と内職で

心境の変化花でも活けて見る

雑談の中で拾った生きる知恵

出雲市 落合正江

欲の手で握る財布は出さず入らず

さりげない口調急所を突いてくる

留守番の夫にくどくど置き手紙

和歌山市 神平狂虎

角砂糖の数はあなたの胸にある

あいまいな答が春の酒にある

丸木橋渡って春に逢いにゆく

西宮市 松本一郎
一日が何もなかったように暮れ

職業欄無職は嫌で自由業

廃線のその沿線にある自然

守口市 中原好恵

うす雲のマフラーかけてる冬の月

大いびき夫のだから眠れます

よどんでる沼とも知らず蛙住む

尼崎市 大江かね子

神様にすがる思いの鈴鳴らす

まわらぬ舌で募金を拝む車椅子

時かけて作るシチューで舌つづみ

唐津市 前田広幸

シーソーに似たていねいなご挨拶

子沢山子が一輪の花を描く

鼻たらず子が探せない不安感

兵庫県 森脇和子

一日を病んで信心の気にさせる

子離れの糸あみ替える夜のしじま

手の届く範囲に辞書と老眼鏡

大和高田市 岸本豊平次

人生は旅また旅の七曲り

日も長くなりましたなと春の客

許す気になって言葉に艶が出た

西宮市 山片紀雄

熟年の夢は温泉に入り匂を食べ
黒潮にとつと繰り込む初鱈
雑種の仔可哀想だと去勢する

和歌山県 北山 凡太

細糸も巻いてるうちに毬となる
犯罪の裏に男の顔が見え
葉書の見舞に手紙の札が来る

芦屋市 上田 佳秋

コーヒーが苦い左遷の話聞く
サヨナラの話プランコゆるく揺れ
二、三日嫁を楽さす旅を練る

唐津市 浜本 ちよ

客の靴少し広げて揃え置く

長男の開店祝う心に危惧の念

田園の風さわやかに季も佳し(レストラン田園)

京都市 森川 春子

草餅にしようと摘んだ時もあり

日差し延び枯芝に土入れてやる

老いて尚嬉しい誕生日の電話

羽曳野市 吉川 素美

北風が去んで多弁な春の花

泣きにゆく老母のあまりに小さい膝

オンザロック独りの刻を深くする

竹原市 石原 淑子

貴方次第女はいろんな顔を持つ

満足気魚くわえた猫の髭
しょうぶ湯に入れてワンバクの皮を剥く

大阪市 上田 柳影

同居せぬ老父母年金のあるかぎり
片想いでもよい春風について行く
何時からか風呂の帰りに寄る喫茶

和歌山市 玉井 豊太

待たされる診察室を兎が覗き

片恋の長さを抱いた蜘蛛の糸

マネキンの服が迷わす親ごころ

愛媛県 八塚 三五島

断崖の底悲しくも美しい

マンシヨンの緑はみんな鉢を持ち

何度でも同じ字をひくあほらしさ

鳥取県 羽津川 公乃

白熱の論議右派よし左派もよし

公約の重荷を一つずつ外す

臨時でも権力の座を意識する

橿原市 西本 保夫

惜しまれて去ったつもりの砂時計

ボクが居るゆとりか妻がよく笑う

何でもが言える立場のいまのボク

大阪市 川原 章久

じつくりと見せる寛美の泣き笑い(中座にて)
返品の効かぬ薬を医者を出し

どぶ漬けはかき廻さずに買うてくる

姫路市 人見 翠 記

屋根の雪ドサドサ落ちて犬吠える

シクラメンの明るさにある独居

亡母に似た背の丸さを影に見る

竹原市 古 田 鈍 舟

色即是空竹大空にゆれている(悼 小松園先生)

絵になった顔は修正などはせぬ

欲のない男と思う花の中

守口市 結 城 君 子

左遷地でのどかな浜の風にあい

天国の壁画がならず鐘の音

白魚の汁に春を告げられる

岡山県 後 安 ふさえ

病院の廊下の長い試歩の朝

金婚に三十人が孫と子で

転寝の夫へ毛布そつとかけ

水戸市 上 鈴木 春 枝

意地を張る甘えてならぬ人だから

ある期待あって休みの日の化粧

本心を秘めて相槌うまく打ち

羽曳野市 麻 野 幽 玄

愚痴言えるだけ倅せよと聞いてやり

テレビから笑い貰うてる一人ポッチ

ダムそして梅の名所で釣の席

岡山県 二 宗 吟 平

ゴマ搗りが味方のように座を囲み

横目では助言ができぬもどかしさ

一喜一憂私の器小さすぎ

和歌山市 森 敏 子

石ころよ丸いお前にけつまずく

流れ星とつきに願いごと忘れ

モナリザのほほえみ無言で真似てみる

鳥取市 武 田 帆 雀

吸い殻が積る目の出ぬ男たち

梅干が中心妻の手弁当

手放さぬピアノの部屋が狭くなる

西宮市 飯 森 泰 世

厳寒に生きてる証し小菊咲く

何だろう看護婦さんが不機嫌で

一日の機嫌紅茶の色にある

箕面市 坪 田 紅 葉

芽を出したチューリップの雪払う

あちこちにメモおいてある老夫婦

気にいったセーターばかり着る私

岡山県 松 葉 雪 花

何ごともなかったような月の顔

たっぷりとお茶を供えて朝の経

発車ベル友との別れを裂くように

高槻市 上 原 逸

歩いて歩いてもなお遠い道
大学に合格してから遊びぐせ
花言葉なぞかけられた蘭の花

大阪市 渡部 さと美

入学の手を引く母の美しい
口紅を買うだけなのに弾む妻
クレジツ看板多いねとこいのぼり

和歌山県 寺田 裕美

野良犬でいたい首輪を辞退する
桃李を植える空き地を考える
下の子を泣かした記憶の悦に入る

尼崎市 野瀬 昌子

掛けもせず掛ってくるのを待っている
母の部屋昔むかしが生きている
糸売りのおばさん春を連れて来る

諫早市 江副 二牛

寒風に赤く燃えてる寒椿
一日のドラマ日記に書き終る
表札の父その儘に母子家庭

兵庫県 円増 貞子

うとうととさせてあんなの話好き
思い出をバッグに入れて旅に出る
打明けて胸のしこりのとけた朝

泉南市 坂根 流水

お水取りすめばと自分を慰める

啓蟄に春闘の声きこえくる
頑健で長生きしすぎもてあます

大阪市 堀口 欣一

ふるさとを写すテレビに早い梅
新聞を読まぬ日などもあってよし
京染のここもおんなじ構えなり

兵庫県 奥野 テル

したたかな女切札握りしめ
子の巣立ち母の歩幅はせまくなり
白足袋のこはぜ律義な一人言

高知県 小澤 幸泉

コーヒーのムードでつつむ隅の席
春なのに顔より太いマスク掛け
また行くと弱い夫の旅支度

岡山県 伏見 すみれ

母はもう起きて居ります水の音
羨まれる程楽ではない社長
好きだったナーとビールをかけてやり

枚方市 二宮 山久

少年の輝く瞳信じよう
もう春がそこにと沼の虫たちが
切干しの大根届く里の味

寝屋川市 立床 晴風

友達の無いまま鍵っ子二年越し
方言で聞けば手振りで教えられ

学校の出費は妻も口にせず

大阪市 板東倫子

凶悪なニュースに目も馴れ耳も馴れ

生き甲斐もないといいつつ貯めている

祝日のバスに見つけた日章旗

出雲市 竹治 ちかし

プログラム慣れと奢りがミスを生み

人よりも機械を知って管理職

付き合えば機械にもある心知り

米子市 宮本 佳女男

悪筆を心でカバーする手紙

不自由な暮しに知恵を働かせ

居眠りの醍醐味を知る齢になり

大阪市 北山 悟郎

手土産の軽さに敷居高過ぎる

律儀者馬鹿を承知で生きて居る

税金が無職の城をつつきに来

西宮市 朝山 千世子

美人画家受賞に輝きロマン閉す(上村松園)

いぶし銀かも余生を飾る句が生れ

梅ほころぶ公民館に娘の木彫り

岡山県 牧野 秀香

七人の孫それぞれの春の夢

洗濯機家族の汗を一つにし

亡母の齢近うなつたと鏡を見

唐津市 山口 高明

一直線帰るつもりのタイム押す

絵馬一つ揚げて三つの願ひ書く

鳶舞う空蒼あおと蜥蜴の死

和歌山市 山川 克子

これからも時々逢うて見たい人

マンネリとみられるかもねマイペース

手が荒れてここから嫁の出番です

桜井市 前山 美恵子

給料日数えて家計引き締める

ちえの輪に夢中になれるお人好し

鯉のぼり男児がいると誇らしげ

西宮市 草刈 墮駄

春の風子と戯れる野原あり

餌をねだる雀に今朝も起こされる

ゼンマイの時計は常に話しかけ

大阪市 町田 達子

ひょうきんなお玉杓子が春運ぶ

女子大生輝くように変身し

合格通知へ睡眠足りて輝く目

弘前市 真喜内 實

ささめ雪好きな枯木の花となり

君に会ってそよ風になる心地

曲りたい釘親方真直にたたく

鳥取県 武田 照子

日だまりで女がまわす口車
ジャンパーのポケットから出すはだか銭
豊かさの中で借金して回り

広島市 望月晴彦

影法師そんなに俺は冷たいか
赤字線広い座席の旅をくれ
丸い日と角な日のある父の顔

倉敷市 赤沢沢の藤

熨斗紙に野心の文字が透いて見え
持ち駒を揃えたままの負将棋
揭示板集まる顔の七面相

泉佐野市 大工静子

暇には少女のままで六十年
叱られて怒られて鴛鴦夫婦
アルバムからあの世行きの顔をよる

大阪市 平井露芳

旅役者女形はどれも玉三郎
捻子の役任され電池休まれず
板チョコもハートで箱に畏まり

富田林市 植松慶子

雪の朝雀早くも春の声
幼な孫病んで乳房が疼く夜
娘の帯も結べぬ母でズボンはく

鳥取県 林原一尚

死角から目覚める電池入れ替える

と空白にして置こう恋の距離
明暗の人間模様織りあげる

岡山県 長尾つた子

明日開く花を嵐が持つて逃げ
枯れてなどいませんわよ梅が咲き
猫に逢う予感鼠は道を変え

愛知県 国分甲子郎

逆ろうている妻やはり頼もしい
そばに居る慰めだけの妻でよし
生甲斐は妻のささえと知る寢息

岡山県 小林妻子

孫の瞳澄み切っていて負ける
豪雪に母の内職だけになり
顔色も変えず野仏雪の中

高槻市 芦田静江

孫の部屋に逆なでされる音激し
しじみ貝春待つ膳の霞色
このままの冬を念じた鴨の池

大阪市 日阪秋子

長い眼で見てとサボテン言いたそう
悩みごとばかり作る人らしい
素っ気ない言葉に心さらわれる

岡山県 戸田種子

幸福は嫁の笑顔の中にあり
お隣がペットを飼うたと子がせがむ

ランドセル親の期待も背負わされ

西宮市 待田麻黄

お水取り素足の僧に春を見る

けしゴムで消せない私の泣き笑い
連れ立って歩きたい子の背の丈

八戸市 島田昭治

白酒に酔うて女の愚痴一つ

泥沼の苦勞も思ひ出の一つ

出雲市 園山よし子

かけがえない友やさし雪の道

すこやかに老いの流れに二人乗る

芋づるを食べた仲間と還曆会

山口県 高崎雀声

遮断機がさせる心をととのえる

やせる本だけがたまってやせもせず

大阪市 田中節子

日当りの氷だけ解け沼静か

北陸の雪垂らしつつ貨車走る

大阪市 松尾柳右子

のら猫の会議ゴミ収集日

小銭入れ忘れて気付くバスの中

高知県 曾我部裕

思案する背広を二つ吊って見る

売上げが落ちると社長顔をだし

島根県 北川民子

レモン切る窓にかかりし春の虹

音沙汰がだんだん遠のくのも老いか

竹原市 佐藤令子

たれかれに話しかけたいすてきな湯
ロボットが販売機からジュース買う

岡山県 後安江山

案じた娘母より強い母になり
肩よせて走る夜汽車の窓の影

大阪市 高橋八重

通院も一人で出来る程になり
泥沼に染まらず白鳥美しい

新潟県 高野不二

答弁のだんだん地声になって来る
脱ぎますと女が一手多かった

岡山県 池田半仙

電文の様な葉書の大きな字
歩いても五分自動車クルマで倍かかり

出雲市 小白金房子

沿道の小旗選手の息白く
出る涙こらえ娘の角かくし

島根県 田中幸里

誘惑のキスを許した月の影
枯れるまで可愛がられる壺の花

吹田市 西岡豊

巣立つ子へ旅する地図を書いてやる

憤懣を妻にたたいて高軒

兵庫縣 脇田米朝

和服着てとたんにオチヨボ口となり

宝くじ抽選会場貸しただけ
睡眠薬恐ごわ一粒分けて飲む

ふと受けた言葉の端に浮く知性

川西市 野村静雄

希望的観測もある若い夢

還暦へばちばち血圧意識する
春ですわ隣の猫も浮気する

宿帳へ嘘を書く日へ浮いている

鳥取縣 松本みをき

なつかしいメロデー若さ取りもどし

新年度单身赴任に身震いし
被災地の臨時電話が生々し

年とればとるほどふえる妻のぐち

大阪府 北田秀月

夜中書く作家の心わかりかけ
駄作でも作る気分がさわやかで

正座よりあぐらの方の酒の味

松江市 福岡芳枝

紫の毛布を妻が大事にし
贈ったものと同じ枕カバーする

同情にすぎる女の薄い胸

守口市 岸野キミ

カサコソと春の足音夜の窓辺
床の間でウメが咲いてる北の国

掃除器に女家族の髪の毛
おたふくで可愛く祖母に似てる孫

米子市 本吉宗光

先生の眼鏡は裏もよく見える
寄せ鍋を囲んで雪の夜を和む

敗戦を空白にして軍作る

合成酒でも晩酌のあるくらし

一生に一度心のおごる出会いある

いつの間か親亡くなった年越える

鳥取縣 園山世^せ似^に

和歌山縣 森三枝子

鳥取縣 福田あや子

八尾市 葛幸子

益田市 里本たかし

青森縣 波ただお

高知市 北川竹萌

大阪府 山本炉^ろ齊^{せい}

岡山縣 松本元江

疑心暗鬼吐いた言葉が凍りつく
スマイルで逢えば歯痛も止んでいる

八尾市

松下蕉露

親方の技術盗んで賞められる
出土品ビルの工事の邪魔をする

岡山市

藤瀬比沙子

春を盛る夕げもたのしフキノトウ
草に寝てツクシンボーの物思い

和歌山市

桜井千秀

駆け出せばポケットの小銭踊り出し
ポケットで拳震える妥協案

泉佐野市

真崎浪速子

るんるんのコーヒー桜が咲きました
紙芝居提げて婦警が相手する

大阪市

野田君枝

ねぎ刻む一筋ずつの値を刻む
玉ねぎの高値が主婦の目にしみる

大阪市

大塚節子

亡き人に似たる羅漢にそと触れる
光る髪風のまにまになぶらせる

和歌山県

西村重彦

寝る時は孤独になるよ僕の夢
黄金は輝くことを知っている

大和郡山市

岡田すみれ

ひと時の余生楽しむお風呂かな

細雪晴れて明るく春ひざし

岡山市

豆原千代女

吊り皮に職それぞれの手がさがる
身延山ふもとの駅で富士の吟

兵庫県

野々口ゆう也

老い二人炬燵で聞いている風の詩
傘寿来てわが一生のあっけなさ

岡山市

矢野山人

招く客招かないのが来て座り
魅力などないが人生丸く生き

岡山市

千原理恵

耐えること時には馬鹿の顔になる
整形をした目鼻だちが冷たすぎ

大阪市

山脇正之

沼地でも知らぬ間に家が建ち
どろんこの土の中から蓮の花

大阪市

山田妙子

口閉じて春の嵐を見送ろう
白旗を女たやすく振り過ぎる

豊中市

小林一夫

思い出を二人はつくり過ぎました
初恋の話もきいたかすみ草

新宮市

船越正

座るだけ絵になる枝雀の面白さ
筆不精電話が付いてケチになり

唐津市 筒井朴竜
摩れ違うジョギング親子よく似たり
さすが佐賀「古伊万里」で酌む嬉野茶

守口市 長谷川 司
一点を見つめる瞳にある野心
カラフルな靴下山の男行く

大阪市 長岡 周太
演奏がすむまで咳を待たせとき
お隣が空家になって落ち着かず

東大阪市 小林 勇人
退き際のよさやられたなと思う
嬉しさは故郷に近く赴任する

大阪市 今西 静子
初雛を選ぶ春冷えの松屋町
爪染めて女の意地に賭けるもの

大阪市 松本 ただし
「どうでつかっ」「まあまあです」とすれ違い
竹やぶにかくれた沼にも来る野鳥

大阪市 権安 達一郎
大阪の孤児に二日じゃ気が残る
逢引きに雪がちらつくアーク灯

八尾市 椎尾 公子
勲章に恥じない人生続けねば
見学もあつちこつちで点呼うけ

大阪市 稲本 凡子

一人居のちよっぴり贅沢風呂沸かす
冬眠をしすぎて場所が見当らぬ

千葉県 中村 有人
女房も虫の居処悪い貌
声で出す訳にもゆかぬ事もあり

和歌山県 山田 久子
生活のにおいも届く友の声
親の役果してやっと今日暮れる

大阪市 田 潤 晴子
ビルの窓眩しく夕日輝きて
合格に瞳輝く孫の顔

島根県 喜島 ノブ
過疎の家ペンペン草が生えて朽ち
春雷に庭の紅梅ふくらんで

高槻市 大池 好古
かあさんと沼のほとりで芹を摘み
雪もとけ庭石ぎわに福寿草

富田林市 松本 今日子
左遷され妻と初めて旅に出る
風見鶏東西南北うけ流す

ジュニアの部

岸和田市 奥 京子
おしいれのあなふさいでるカレンダー
みなとまちふねのきてきがなりわたる

京子
(九さい)

愛染帖

橘高薫風選

青森県 工藤 甲吉
三月の光くちびるを光らせる
三月は蕾も胸もふくらませ
岡山県 土居 耕花
惚れている様に難聴そばへ寄り
ロボットに女の事は聞かされぬ
笠岡市 木山 遠二
老いて尚この世に居たき小春かな
南のわしが小庭も雪景色
米子市 野坂 なみ
眠り過ぎて何時か緑青染みついた
止め札へ野仏さまがうなずかれ
和歌山市 浦野 和子
許そうよ血液型のせいにして
考える百足で足がもつれ出す
伊丹市 榎谷 寿馬
モノクロテレビ心のいろがあり
白酒の残りへ桃の花浮かす
米子市 青戸 田鶴
夢にだけ残しておこう古い地図
子の箸をいつまで残す冬の家

寝屋川市 堀江 光子
筆を描く灯の夕闇になじむ頃
陽に向い皆伸して見る見ええない手
今治市 月原 宵明
ロボットに臨機応変など出来ぬ
生きているものみな影をもつ五月
川西市 野村 静雄
権謀術数頂点に総理の座
貧乏と思う中流とも思う
岡山市 白岩 文衛
問いつめねばよかつた噂など
スト権のない雪掻きにくたびれる
豊中市 満仲 きく子
ある時は逃げ腰になる影法師
電照菊春の光がまぶしかろ
岸和田市 古野 ひで
学校へ歴史と共にある桜
亡兄の忌にやっぱり亡母の事にふれ
和歌山市 北山 凡太
許す気になれば許せる程のこと
蜘蛛の目は彼岸へ向いて風を待つ
西宮市 奥田 みつ子
雛飾る娘は翌日はエーゲ海
横顔に男の値打ちためている
島根県 松本文子
亡父に出す宛名のいらぬ贈物
少年の口笛が呼ぶ早春譜
近江八幡市 前川 千賀子
かたつむりもう振り向かぬ蝶の羽化
米子市 八木 千代
咲いて散るいのちが欲しい紙の花

大阪市 小出 智子
いみじくも晩年という語をきらう
和歌山市 西山 幸
亡母の日は亡母を攫った風が吹く
和歌山市 中尾 まゆみ
憧れは絵のままでよし十五歳
大阪市 江城 修史
汗知らぬ男のゆとりうらやまず
西宮市 草刈 墮駄
チヨコレート甘さにひそむ資本主義
寝屋川市 岸野 あやめ
棄て時の大事な夢と思つたり
寝屋川市 宮尾 あいき
唐梅や千姫様のあで姿
富田林市 岩田 美代
コーヒーからコーヒー話題ひとしきり
富田林市 藤田 泰子
タンポポの黄を輝やかす紋白蝶
米子市 寺沢 みど里
王さまの花にはなれぬ母子草
大阪市 北勝 美
赤い瓜パートタイムへ着る毛皮
守口市 結城 君子
春浅し今日はさよりの糸造り
尼崎市 伊藤 春子
つますいてつますいて虹遠くなり
唐津市 浜本 久仁於
七十を生きて手相の運を聞き
島根県 堀江 正朗
合掌のひとつき善悪入りまじり
富田林市 植松 慶子

夫婦雛嫁いだ十六一つ欠け

高知県

山下登舟

そつでもないこうでもないといひな飾る

唐津市

田口虹汀

極道の父極道の子を嫌い

指宿市

渡辺伊津志

吐く息が深緋の帯になる日の出

尼崎市

春城武庫坊

球根のささやき美人コンテスト

島根県

小砂白汀

夢買いに行く老毫の試着室

米子市

林荒介

活然と目覚めて兄の樹を倒す

鳥取市

森田熊生

反対や反対髯がよのびる

宝塚市

丸山よし津

ラッシュアワー中年の肩みな重い

吹田市

栗谷春子

雪の通夜汁もお酒も熱からず

岡山県

松本元江

もう寒さ忘れて軽い立話

名古屋市

藤井高子

狐には狐の安らぎ朝のミルクティー

兵庫県

脇田米朝

雑音は軽くないなしている自信

堺市

高橋千乃子

その事にふれず男は酒をのむ

名古屋市

越村枯梢

号泣の果ては笑って見たくなり

和歌山市

桜井千秀

逆縁の墓石許しを乞う如く

大阪市

中西兼治郎

雪見酒には多すぎる雪が降り

和歌山市

神平狂虎

後向きに走る電車に乗っていた

和歌山市

若宮武雄

テトラポットの寝呆け顔こそ春景色

岡山県

千原理恵

世辞ひとつ言えず世間のことにふれ

大阪市

川原章久

脱サラがバツジの重さしみじみと

羽咋市

三宅ろ亭

飛んでゆく心があつて広い空

倉敷市

藤井春日

闘志と忍耐それが男のロマンです

八尾市

山下みつる

猫の目が輝きだして春近い

岡山県

嘉数兆代賀

少年の決意うしろを振り向かぬ

吹田市

西川景子

サンルームでおしゃべりしだす春の花

岡山市

広田小菊

旭川今日も二人の愛流し

高槻市

上原逸

灰色もブルーも長い日もたえ

高槻市

笠嶋恵美子

築く夢築かれぬ夢時の流れに

豊中市

田中正坊

十銭でペベルモコ見た青春譜

藤井寺市

赤木和子

寄り添って歩く今宵を忘るるな

高知県

赤川菊野

午後の雨哀しみばかりつれてくる

羽曳野市

天崎只士

夢を追う男の髯が白くなる

大阪市

渡辺さと美

やきいもを食べつつ話す娘の未来

富田林市

中村優

アドリアのせりふが温い夢芝居

高槻市

梁川吉子

大声で夕日に投げた厭な事

西宮市

朝山千世子

能に酔い日永の街に吐き出され

唐津市

木塚素石

鮎を得て何年振りの炭火たき

島根県

堀江芳子

戦盲に三月十日の血が疼く

唐津市

浜本ちよ

日本晴良い言伝てがありそつな

豊中市

上田登志実

上役の夫人お世辞が嬉しそう

吹田市

井上照子

チューリップ菜種なげ入れ床に春

唐津市

筒井朴竜

平常心穏かならぬ首班の座

京都市

木本如洲

雑談の夫婦に鍋は音たてる

唐津市

相葉あき

会合の都度リーターになる婦人

唐津市

浜本義美

回覧板だけは回して独り居る

米子市

雑賀美代

被露宴氷の花も落けて来る

鳥取県 奥谷 弘朗
駆け引のある忠告はいただけず
和泉市 岡井 やすお

兵庫県 辻 文平
寒さまで一日多いうるつ年

妻の掌にいつまでもある未完の絵
岸和田市 芳地 狸村

望郷の心がうづく都会の灯
西条市 片上 明水

不器用な父にも小さい羽根が生え
羽曳野市 吉川 寿美

泣きに来た娘は妻であり母であり
鳥取県 林 瑞枝

甘えの声でころころ笑う絆だよ
羽曳野市 麻野 幽玄

適材適所で無いから現場もめている
大阪市 上田 柳影

雛飾り娘より親が嬉しそう
岡山東 山本 玉恵

峠道母の思いを抱いて越す
弘前市 田中 叶

古本屋たそがれ奥で鳴るラジオ
米子市 田中 亜弥

宝塚少女は蝶の列となり
大阪市 萩谷 まさ

シクラメン薄紫が良く似合う
今治市 矢野 佳雲

武蔵敗れたりを私に置きかえる
岡山東 小林 妻子

雪中を讃岐へ来れば梅の花
尼崎市 春城 年代

万葉の恋か大和の夕映えよ
出雲市 原 独仙

おしなべて円満家庭恐妻家
高槻市 久保 和友

農家の縁側見えるレールが消えていく
岡山市 川端 柳子

賑やかに眠ろう累代墓として
大阪市 大塚 節子

明日も又風になぶらる髪洗う
奈良市 森田 カズエ

即席のライスカレーに妻の味
尼崎市 田中 晴子

二日目は我慢しきれぬ猫かぶり
今治市 越智 一水

とまり木で歌うおんなの歌悲し
鳴門市 八木 芳水

汗も売り血も売り底を這い回り
八尾市 松下 蕉露

覆水を盆に返した惚れた奴
出雲市 竹治 ちかし

絵に描いた餅で話がはずむ妻
岡山東 岩道 博友

前職は言うまい老後の鞆を振る
富田林市 松本 今日子

川柳に親子でたのし意地をみせ
平田市 久家 代仕男

愚痴聞いてもらっ一里の山を降り
大阪市 上江洲 勝子

散歩行く路に不安の地下の街
桜井市 前山 美恵子

生きてきた証しを刻む自費出版

西宮市 津山 冬子
敗戦を背負い立派に孤児育ち
吹田市 茂見 よ志子

婚礼の讚美歌口を合わすだけ
高知県 小澤 幸泉

こいのぼり今年も眠る倉の隅
大阪市 稲本 凡子

ライバルへ矢をつがえれば胸を張り
広島市 望月 晴彦

マイナスの暮しと悟る余命表
西宮市 松本 一郎

一言を足せばなんでもないことを
宝塚市 吉田 笑女

新弟子の味も決ったちやんこ鍋
★ 豊中市中桜塚三丁目13-15

投句先 下560 橘高薫風宛(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題 「ありがと」 選者 森中恵美子

締切 5月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町3-43 NHK

大阪放送局 さわやか広場係

発表 5月27日(日) ラジオ第一放送

午前10時から

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

水粉千翁

表札の中に帰つてとげを抜く

納 糸葉

テクニク過剰と言つてしまつては川柳の行き詰まりの扉はひらけない。

そのためにも実にはうまい表現であると思う。この句の鑑賞には多角的に見つめるものがあると思うが、その一例として、家出した者と見ることも出来る。

表札の中に帰つては巧妙な表現と見たい。

そして、とげを抜く、もよかつたと思う。結局わが家に戻つて来て、とげの傷あとも癒えてくるのである。

子に貰うこの嬉しさと口惜しさと

若宮 武雄

実にうまい川柳である。生長した子から貰う親、親と子の感情はこ

うなのであろう。嬉しさと、口惜しさの中で親と子の輪廻が

くり返されるのである。

謎ときが下手で真ん中歩きます

菅井 とも子

善人には解け難い謎が身動きならないほど身辺にある。

善人とはそれを意に介しないで歩き続けるのである。

真ん中を歩く善人のてらいのない姿こそ、美しいものである。

大きな忘れものしたのではないか下り坂

天正 千梢

平明な表現から反省する感情を余すところなく言い得て至妙というの外ない。

功成り名遂げたとき、すらすらと歩ける下り坂にこそ、忘れものを考え直すことが、更に人間完成のための大切なことをこの句が教えている。

ハイヒール男にきついたけくらべ

高橋 千万里

男である私先ずふき出した。

作者は多分女性であろうが、男を側面から見極めた、そして実感かもわからないと思えば迫力充分である。

洗面器卑しい笑い消せるかな

林 瑞枝

このひとり言は実にきびしいものがある。自他何れを見つめているのかは別として、

「卑しい笑い」に卑しい現実がひそんでいるのがよくわかる。

そして洗面器そのものも句を引き立てた。思えば上がると揺さぶつてやる縄梯子

野村 太茂津

猪突猛進の軽卒さを見せ場にして縄梯子をよじ登りたがる輩の多い中で警告している。

揺さぶつてやるのが決して酷でないことを知り、それはむしろ思いやりであることを知りたい

老醜を曝す路肩に黒い雪

時末 一灯

「黒い雪」は感情の表現である。老醜を曝すとは、言うべくもなく、やり切れぬ悲しみでもある。

それが黒い雪として見えたのであろう。黒い雪と見る前に老骨にも自ら鞭打ちたいものである。

ある憤怒それから日本海が荒れ

渡辺 菩句

作者は朝夕、日本海と共に暮らす人である。

怒りを抱える日本海こそ、またその怒りを聞いてくれる海でもあると作者は言う。

美しく泣けぬハンカチ折りたたみ

松本文子

泣くことは正直でなければならぬ。殊更の貰い泣きであつてはならない。

正直な人は殊更泣けぬ。そのハンカチは折りたたんだまままで美しく泣けぬ人の美しさではなからうか。

私の秀句鑑賞に目についたそのほかの句は多情な女造花に水をやりたがる

高橋 千万里
も深い思いを込められた川柳作品と思つ。

近頃思ふこと

羽原静歩

私が近頃しみじみと感じていることを少しばかりお話ししたいと思います。私は去る五十七年十二月古稀を記念して、これまで私の体験した数々の出会いと別れの思い出をまとめて句集「足跡」を刊行したわけでありました。「足跡」刊行については、各方面から数々のお祝いと激励を賜わり、文字通り身にあまる光栄と思っています。

さて、その中で、とりわけ私の心をゆすぶったお手紙に次のようなものがあります。

それは川柳「しんぐう吟社」の大矢十郎先生のお手紙であります。御承知のように先生は昭和五十六年十月、路郎賞を戴いた立派な方であります。即ち

「順々に嫁くそれだけを養まれ」の句、誠に先生のはのほのとしたお人柄をあますところなく表現された句であります。その先生から次のようなお手紙を頂いたのであります。以下、お手紙の原文を紹介させていただきます。

この度は句集（足跡）をご惠送賜り誠にありがたく厚く御礼申し上げます。早速お礼状

を差し上げる心算が娘の結婚式其の他多忙が重なり本当に失礼の段平にご容赦賜り度くお詫び申し上げます。句集を拝見致しまして先生も天理教を信仰されている事をご同慶に存じます。私の父母も六十五年添うた時からの天理教信者でした。六十五年間添うた夫婦も珍しいが、六十五年間信仰を続けた夫婦も又珍しい事と思います。十人目の十郎にとつても最もはこりの一つとしております。私も門前の小僧ですが一番尊敬する人は天理教祖様です。（天理教の教祖は中山ミキ）

「気がつけば父の足跡踏んでいた」 静歩
此の句を読んだ時、亡父母に対して申し訳なく思いました。

ありがとございました。ゆっくり読ませて戴きます。「みかん」同封しました。ご覧下さい。

大矢先生のような御立派な方が親ゆずりの天理教の信者であること等全く知らなかった。私は早速柳誌「川柳塔」の昭和五十六年十月号を出して見ました。先生の柳歴を御紹介しますと

昭和四十四年川柳瓦版一行を迎えて浅利太平、小山峻氏らと共に「新宮時事川柳会」を結成、傍ら葵水先生のご紹介で近作柳樽へ投句。白柳、葵水両先生より通信指導を受ける。四十七年葵水、太茂津両先生推薦にて川柳塔社同人。四十七年一月川柳しんぐう吟社創立みかん。五十年一月川柳塔社第一回各地柳壇

大矢十郎還暦記念句集

「みかん船」出版記念句会

〈本社8月句会〉

とき 昭和59年8月7日(火)午後6時
ところ なにわ会館

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12
地下鉄谷町9丁目・近鉄上本町
下車東南

おはなし

西尾 朧

兼題 「富」

川上 大輪選

「喜」

岩本雀踊子選

「豊」

野村太茂津選

「榮」

橋高 薫風選

特別課題 「みかん」

大矢十郎謝選

席題 当日一題

黒川 紫香選

各題3句・締切午後7時

会費 千五百円(句集「みかん船」呈)

川柳塔社

賞受賞。五十三年川柳塔社理事から参事拝命
一男五女。

とありました。特に私は最後の「一男五女」
の四つの文字に心打たれたのであります。六
人のお子様を當々として育てられ、しかも、
その内五人の娘さんを夫々他家に嫁入りさせ
られている、この平凡にして、しかも偉大な
事実の中から、路郎賞受賞の句

「順々に嫁くそれだけを羨まれ」が生れたの
は全く敬服の他はございません。このお手紙
を通して、私を感じましたことは、先生が常
に「信仰」という心の灯を燃やされ、その信
念の上に立たれて数々の素晴らしい川柳をお
作りになられているこの事實は只々羨ましい
限りと思ひます。

次に同封の「川柳みかん」第二三三号の中
に、先生の四女裕子さんの御結婚に当り川柳
塔の同人の方々から数々の祝吟がのせられて
いますが、その中に黒川紫香先生の
「慶びは父の瞳に娘の晴れ着」
野村太茂津先生の

「慶びのとさめきを聞く秋の天」
若柳潮花先生の

「仕合わせは貴男と呼べる人が居る」

更に又、十郎先生は最後に父親としての喜
びを「和を保つ夫婦に長い坂がある」とその
心境を述べられています。私も「一男一女の父
親として、長女「良美」を昭和五十一年の一
月に嫁がせた経験がございます。その時、私

は「結ばれて白梅の坂登りけり」という祝吟
を述べまして、これを句集「足跡」の中に入
れたのであります。

更に川柳塔十月号に先年亡くなられた若本
多久志先生が、「すばらしき哉人生の秋」と題
された随想の終りに「幾山河越えてわが道悔
いもなし」又、同人近詠の末尾に、去る四十
七年、日米親善川柳大会で二週間私と起居を
共にした故浜田久米雄先生が「喜寿の日が迫
り死などは恐れない」と述べられ、更に先年
路郎賞を受賞された句に「握手した掌が離れ
ないま、坐わり」というのを思い出し、最後
に薫風先生の「母病むに紅白分つ花多し」と
いう句を拜見しまして、一層感銘を深めたの
でございます。ともかくも「川柳」という御
縁のありがたさをしみじみとかみしめて
今日この頃でございます。

近く大矢十郎遺曆記念句集「みかん船」発
刊とのうれしいニュースを伝え聞きましたが、
すばらしい収穫を積んだ船の到着を心待ちに
しております。

あらがいの弁

浦島太郎的感慨をこめて

早川清生

ふとしたことがきっかけで、薫風さんから

川柳塔の最近号を送っていただきました。川
柳からまったく離れて十年になりますので、
非常になつかしい思いで拝見しました。しか
も珠玉の作がいたるところに見られて、さす
がに伝統という感を深くしました。しかしペ
ージを開いてまっさきに感じたのは、かつて
キラ星のごとく名を連ねていた作家たちが、
ほとんど姿を消していたことです。その多く
はずで亡くなられたそうで、哀惜の念とと
もに、改めて十年の重さを実感しました。そ
の後、柳箋を分けてもらいに本社へ行きまし
たら、それら個性ゆたかな作家たちは、本社
の入口に短冊となって残っておられましたか
ら。次に感じたことは、川柳塔全体がなんだか
女っぽくなったことです。これは水煙抄を主
体に、女性作家がたいへん多くなったことに
も原因すると思ひますし、女性作家の進出は
それ自体まことに歓迎すべきことなのです。
しかし私を感じたのは、塔社の傾向がすこし
抒情に過ぎるのではないかとということです。
私自身、抒情性ゆたかな川柳も好きですし、
それが現代的な感覚でびつたりときまつたと
きは、この上ない爽快感を覚えます。だが私
は、川柳は人間の生活と同じように多様であ
り、その領域はたいへん広いものだと思ひて
いますので、柳誌が特定の分野にかたよるこ
とは好ましくないと思ひます。万一にも抒情
的な作品ばかりであったり、トリビアリズム
や次元低い感傷の句が並ぶようになったら、

ほんとうに困ると思うのです。

ところで本社へ伺ったとき、おいでになった小出智子さん(だったと思います。違っていたらごめんさい)が、勉強しなさいと四五冊の柳誌を下さったのです。参考までに各誌同人吟の巻頭句を並べてみます。

石を抱く木馬にながあいながあいな冬 三崎岳風
胃の裏を多数派が往く梅雨末期 荒木慶子
どこまでも生真面目に悔る朝の髭 奥野誠二
酒瓶をゴロリ倒している刺客 土田欣之
ということでありまして、まことにみごと

であります。洗練された鋭い感性をみせています。現代川柳の有力な流れを示すものであり、柳人たちが多くの指向がここにあることも確かなようです。ただ、好みていいですよ、私は平明な中に高い詩性もつ句により魅かれます。もちろん現代詩は難解なのが当然だなどと考えるのは、いうまでもなく錯覚です。その作品はしばしば類型的であります。第一、川柳が大衆への伝達性、ひいては大衆との連携をこれ以上失うことになれば、その進歩的な標榜とすらはらに、たいへんなことになると思うのです。

次に私は、塔誌にすぐれた社会性をもつ作品が少ないこと、あるいはそうした作家の育っていないことに何よりもさびしさを感じたのです。それは私自身がそうした分野でいい句が残せたに幸いだと考えているからです。いまさら、滑稽、諷刺、穿ちという川柳の三

要素にこだわらる作家はいませんが、私は川柳というものはやはり批判精神を基調とすべきであると考えています。これは政党新聞などにみる単刀直入な時事川柳を指すのではなく、もちろん駄洒落や悪口雑言の句を指すのではなく、あくまで詩性に裏うちされた新鮮な現代的感覚の句をいいます。ゆたかな文芸的香気を保ちつつ、社会の不合理や人間生活の機微に迫る、そうした作品を数多く示すことが、川柳に対する世間の正当な評価を獲得する早道ではないでしょうか。そういうえば、文学芸術は近代精神の上に築かれねばならず、それに反する俳句、短歌は、複雑な近代社会の思想、感情、現実を盛りこめる容器でないとするのが、古い話ですが、桑原武夫の第二芸術論でした。

また、かつて須崎豆秋という作家がおられました。飄逸な作品と温厚な人柄で、みんなに愛されていた人です。
降りる客いとんのんと続くなり
ピョピョイとつなぎを大中小にわけ
といったような句は、私などとうてい真似のできない境地ですが、こうした作風に接することもほんとうに稀になりました。その代わり、女性的な繊細な句、鋭い感覚の句があふれています。むりに針小棒大というなら、一本の広い道にはかり人があふれて、右往左往している感じですね。桜も桃もチューリップも花なのに、みんなモダンでかつこよい蘭に

ばかり気をとられている感じなのです。川柳は創作です。夕刊をみていたら、鈴木健二さんの直言がありました。「中高生の展覧会を見に行ったが、絵にする素材は生活の中に溢れているはずなのに、描いている作品が似たり寄ったりなのである。」

ことは誌寿六十年だそうす。大正の末に路郎主宰が、川柳における伝統のよさに革新のみずみずしさを加え、社会の共感を求めて川柳雑誌を創刊されたときの感激と覇気は今も脈々と塔誌に受けつがれています。川柳雑誌は、路郎作品の魅力とともに、彼が個性ゆたかな数多くの好作家を育て、百花咲き乱れる花園をつくり上げたことによって、独自の地位を築いたのです。塔誌はそうした伝統の上にさらなる深化充実を加えたと私は信じています。しかしいま久しぶりに塔誌を通読して、どこかかつての川雉と異なる雰囲気を感じます。社会情勢の変化が作品に微妙な変質をもたらしたのか、川柳自体が文芸として十年の発展を重ねたのか、あるいは私の力が衰えて句がわからなくなったのか、今の私には判断できません。半面もつとも幅広く素材を求め、斬新で迫力ある作品が横溢してほしいと、もちろん偏見ですが思うのです。また極言すれば、川柳なんて所詮は作句技術より、人間の空元成度の問題だとも思うのです。そういう不遜な気持ちで水煙抄に出句したら当然ながら次々と没になりました。

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

藤井明朗

精一ばい生きて続編などいらぬ

高杉千歩

人生の浮波を乗り越えて回顧する時、静かに暮したいわずらわしい事はもうたくさんと
思ふ。人間の心理的な告白、作者の達観した人生に触れる。

「おしん」が終ると家中動き出し

有働芳仙

おしんの句は多い。話題も多かった。老いも若きも心ゆさぶった事である。下5の動き出しは句をひきしめる。

釘ひとつ夢がひろがる書写真

田中晴子

誰しも夢をもつ。希望と幸せを追う人生の縮図、設計の写真へあれやこれ豊かな夢はひろがる。生活の感情の中に共感をよぶ。

家計簿を見ぬから呑気な事が言え

高野宵草

生活の一駒。その場も情景も浮かぶ。ほんとうですぞ。やんわり風刺もきいて共感。豪雪に雪やコンコンとも言えず

丹下玉子

今年の雪は全国的。日本列島水づけの感がした。遊びもならず、口ずさむ雪の歌も吹雪に消されてゆく春が待ち遠しい。好きな句。気がつけば夫婦の歩幅ずれている

宇野昭代

これこそ夢を追って働いて来た夫婦。ほっと一息つけば夫との影がずれていたと気がついた時、淡い感傷にひたる。人間の心理描写をつたいあげて共感をする。まだ距離を置いて女は城にいる

市川鱗魚

この句から様々な想いが走る。女心の感情を言い得てうまい。男心の情感をかきたてるはがゆさと相まって、心がゆるれる女性心理をうたいあげた手腕は老練である。

恋序奏しずかに沈む角砂糖

藤井高子

作者の句にはひかれる。新鮮な用語を用い表現はたしか。純情な恋が始まる。さわやかなふんい気も漂ってほろにがき青春の一駒。これと言う不満のなさが物足らず。岐れ路で風の誘いに乗ってみる

安田志津

2句共好きな句。前句は平凡であるが円満な家庭生活がつづく中にふと気がつく事もあ

るが、これはぜいたくな不満である。人間の身勝手さについて考えさせられる。後句は詩情の中に交錯するものがある。人物も浮上して、女と男の情感をつまく表現されている。人間の子まで生ませる試験管

高崎雀声

最近見受ける句のひとつ。授かりものとか神秘的とか、こうなつてくると将来が心配になる。神の怒りにふれる事かも。

露天風呂ロマン抱かせる星のフタ

児玉歌子

旅に出ると大胆にもなるもの。ひとときの淡い想い出を星はまたたく。生れそつなロマン。

旗色が悪そう補聴器外しとこ

世辞という不快指数にむせかえる

脇田米朝

前句、人間の機微をついてうまい表現。後句、心にもない世辞、それも自分のための世辞の多さ、複雑な物欲からまる、不快指数の多い現代の世相を作者の詠歎に共感。

生き生きと仕事を語る夫の酒

石原淑子

妻の灸 夫火をつけ嬉しそう
冬を舞い春を招んでる牡丹雪
銀の馬車鏡の中へ消えてゆく
手袋の片方なくし春の雪

植松慶子
東原福子
中尾まゆみ
満仲きく子

主として真実味のある句を頂く。ご寛容を。

沼

小島蘭幸選

沼にすむ鳥解禁日までは見た
耳うちをされて沼より引き返す
泥沼を渡って来てもお人柄
どろ沼の女に積るぼたん雪
泥沼に極楽があり蓮の花
沼を生かして養殖うなぎに賭けようか
恐い話聞かせて沼に子をやらぬ
底の無い沼を見ている挫折感
サラ金の家の向うに沼がある
ゴルフの球飛んで野鳥の来ない沼
バツちゃんの民話が沈む森の沼
干拓地沼の神話は生き続く
絵はがきの沼落し穴などはない
沼三つ抱いて高台父祖の墓
人の目にふれるな沼に咲いた花
春の沼おやゆび姫に逢えそう
龍がいた沼へ汚水が流れ込む
泥沼の中で故郷の灯を思い
底なしの沼で都会の灯が点り
伝説の沼のほとりに建つ祠
沼の泡なにか不満がありそうで
沼に石抛ればヒント湧きそう

油絵の沼は眠ったままである
底なしの沼シベリヤの目に残り
この沼に誇りを持って蛙
伝説の沼に女の業がある
俵せを追えば底なし沼に出る
生涯を小さな沼で終える亀
沼に咲く花を見つめて喪に耐える
睡蓮の花から沼の朝が耐え
沼の面を見つめて女うごかない
沼に住み沼の神から逃げ出せぬ
沼の底知らず水芭蕉の花優る
沼涸れて男が甲羅干しにく
沼に咲く蓮華は浄土まで匂
沼に咲く蓮に浄土の露を置く

婦美子
弘朗
可住
枯梢
テルミ
ゆう也
雄々
愛論
カズエ
武津水
雄々
義美
元江

輝

嘉数兆代賀選

塔還暦柳界諸師のいぶし銀
輝いた過去が決断鈍らせる
太陽が輝く牛の目の中で
輝いた頬が若さを謳歌する
輝いたひとみの中に僕がいる
信じ切る瞳の輝きに答えねば
老木も輝く五月の陽をうけて
メルヘンの世界に霧氷の森がある

ちよ
ろ亭
可住
倫子
文子
玉恵
道子
ちよ
佳雲
カズエ
古都路
七面山
人
地
天
軸

乳房ふたつ揺らいで止まぬ沼の底
人情の浅さに沼が涸れている
蓮の花沼の暗さを語らない
渡り鳥沼を静かに眠らせる
鬼が血を洗ったという小さき沼

佳雲
カズエ
古都路
七面山
武庫坊
武庫坊
とんたく
与呂志

カラスみな帰って輝く山の星
少年の瞳の輝きにある決意
幸運の女神輝く子の未来
明日へ繰る頁輝く海がある
対面に輝く残留孤児の顔
太陽が輝いている除幕式
輝いたバツジ汚職の胸につけ
栄光に輝く勝利の裏話
輝いた親に辛苦の皺を寄せ
表彰の蔭に輝く内助の功
一行に母が輝く母の文
ふる里に星が輝く空がある
青年の主張輝く明日があり
夫の目が風に輝くニューモード

喜酔
たす子
美緒
婦美子
正坊
たかし
はじめ
よし津
芳水
季峰
正敏
義美
ちかし
小菊

輝いた顔に未来を握りしめ 幸泉
 輝きを嫌うもぐらが土を掘る 幸一
 輝いたままで夕陽が海に落ち 佳雲
 いふし銀かも余生を飾る句が生れ 千世子
 輝きの強さに負けた流れ星 年代
 少年の的に輝く星一つ はつ絵
 鍵盤に指が輝くコンサート 浪速子
 さわめきの中を輝く人が来る 赤木和子
 輝いた過去は忘れぬ伝書鳩 雄々
 輝きをときどきくれる投書欄 泰子
 ママを画く目が輝いている 公一
 花火のように闇に輝く恋でした 七面山
 遺蹟から輝く過去が掘り出され 狸村
 この俺に輝く句碑が一つある 弘朗

忠 告

中川 滋 雀 選

忠告はお互い様と言う夫婦 狸村
 あの時の忠告今も身に沁みて よ志子
 忠告ありがとう僕には僕の道 正坊
 見込みある君には厭な事も言う よし津
 忠告は聞き置ただけの天の邪鬼 枯梢
 忠告を聴いてくれそう言うてみる 武水
 その頃は忠告上の空だった 年代
 小さい嘘空の青さに叱られる 悠泉

生き甲斐の輝く親にある川柳 規不風
 幸福に輝く誕生石の指 素身郎
 はたちの娘の輝きには勝てぬ 重人
 輝ける話題を拾う絵の具皿 文平
 眼帯の外は輝く春だろ 耕花
 父さんが輝く今朝のトップ記事 里風
 地 父さんが輝く今朝のトップ記事 里風
 天 春の鏡に女の輝く顔がある 元江
 家系図の中に輝く私たち 静歩
 軸 年輪の重味輝く日の微笑

忠告も耳に逆らう地位となり 公一
 忠告はしても帽子は脱がされぬ はつ絵
 忠告の代わりには聖書置いて去に 愛水
 やんわりと忠告盃さしながら 明論
 ワンクッションにおいて忠告聞いている カズエ
 おかわりの茶わんに忠告少しもり 小菊
 絶対の自信忠告受けつけず 右近
 忠告へ今日は他人と言う夫婦 文平
 励ましの言葉が忠告かも知れず 喜醉
 忠告をするがと酔いがくどくなる どんたく
 経験があり忠告がくどくなる 素身郎
 忠告が素通りをするロバの耳 幸一
 まだ若いわかい忠告に腹を立て 勝美

忠告を入れて出直す菜葉服 テル
 忠告のとおりにあつた落し穴 柳影
 忠告を素直に聞いた涙つば 森脇和子
 先輩の忠告猪口の中にある 多賀子
 好きだから忠告なんか気にしない 山久
 忠告の本音は貸したものの返せ 墮駄
 忠告も恋のとりこに耳が無い 代仕男
 忠告はすまいふくれるだけだから ちよ
 姉さんのやさしい忠告だけに手 規不風
 忠告をじっと聞いてる箸枕 重人
 忠告を神の怒号として受ける 弘朗
 人生の忠告暦を読んでみる かすみ
 忠告をするのにオブラートが要る あやめ
 忠告を明日の自分の為を受け 弘朗

忠告を残し瑞穂の秋が暮れ 可住
 忠告に妬心を少し覗かせる 赤木和子
 忠告を愛の言葉と受けとめる 泰子
 忠告は心の襷に聞いておく 寿美
 うちよってんの中で忠告見失ない 可住
 人 大事な子に大事な忠告はする 与呂志
 地 星一つないから忠告身に沁みる 玉恵
 天 忠告の同じ痛みを分かち合う 赤木和子
 軸 忠告はそつとひと言だけがよい

初歩教室

題一斜一

本田恵二郎

- 梨郷 なんてやろネクタイ斜の縞が意気
- 千代女 (斜め柄のタイでめつきり若返り)
- 小愛 (細い道斜めになって通り抜け)
- 正坊 (雑沓を斜め斜めに通り抜け)
- 凡太 (斜め降る吹雪について走着行く)
- 同 (ジョキング斜め吹く雪つき破り)
- 同 (人生を斜めに生きるサングラス)
- 同 (生きる道斜めに歩くサングラス)
- 同 (孫の所作斜めで眺め悦に入り)
- 同 (夫の所作斜から見て助言する)
- 同 (斜めから夫の所作がもどかしく)
- 同 (白い杖斜めの風をよむ試練)
- 同 (白い杖斜めの風にたじろがず)
- 同 (捨てられて剣を斜めに研ぐおんな)
- 同 (捨てられた女 斜めに剣を研ぐ)
- 同 (斜めから見れば美人に見える)
- 同 (斜め美人とはこれなるかこれなるか)
- 同 (ご機嫌が斜めの父へそつと盃)
- 同 (ごきげんの斜めな父へそつと酌ぎ)

- 歌子 逢う度に斜めの腰が深くなる
- 同 (ハネムーン傘を斜めにして戻り)
- 同 (スカーフを斜めに老いに負けられず)
- 同 (斜め読みの知識をひとに押しつける)
- 同 (斜め読みの知識やたらに押しつける)
- 同 (上役は社史の恥部に斜線入れ)
- 同 (彼氏には肩を濡らさぬ斜め傘)
- 同 (斜め傘彼氏の肩は濡らすまい)
- 同 (悲しみを斜めの帽子に見逃さず)
- 同 (悲しみが斜めの帽子からこぼれ)
- 同 (新米のマジック斜め種が見え)
- 同 (斜めから新米マジックの種こぼれ)
- 同 (石段を斜めに昇る老いの知恵)
- 同 (斜面には思わぬこわい鬼がいた)
- 同 (傾斜面で思わぬ鬼が待っていた)
- 同 (斜めからそつとねたるは無理なもの)
- 同 (斜めにかまえスタート合図待つ團児)
- 同 (スタートライン斜に構えた豆選手)
- 同 (ご機嫌は斜めかまわずそつて居る)
- 同 (斜めなご機嫌放つておけ放つておけ)
- 同 (ピサの塔斜めの姿勢保ち抜く)
- 同 (ピサの塔斜め姿勢で名が売れる)
- 同 (スカートを斜め裁ちて春を出す)
- 同 (飲み仲間春にうかれて千鳥足)
- 同 (千鳥足花を斜めに追いかける)
- 同 (斜めから眺めた美女の泣きほくろ)
- 同 (斜めからカメラ斜めの位置につく)
- 同 (防犯のカメラ斜めの位置につく)

- 紀雄 (斜めから防犯カメラに見つめられ)
- 同 (押されても引張られても靡く斜め織)
- 同 (斜め織り引つ張られても押されても)
- 同 (捨てるだけ列車の旅の斜め読み)
- 同 (窓走る景を斜めに週刊誌)
- 同 (裏口が駄目なら斜めをこじ開ける)
- 同 (裏口が駄目なら斜めからねらえ)
- 同 (貸家札斜めに貼るを見かけない)
- 同 (貸家札斜めと言つて齡がバレ)
- 同 (初孫のソナツ前から斜から)
- 同 (白銀に斜滑降の技あざやかに)
- 同 (処女雪へシユパール斜めに縦に描き)
- 同 (斜め布アザインの良い孫の服)
- 同 (斜め布みごと生かした孫の服)
- 同 (斜め布みごと生かした孫の服)
- 同 (ごきげんが斜めならずと唄が出る)
- 同 (ごきげんの斜めならずと唄になり)
- 同 (落ちぶれの顔を斜めに叩く雨)
- 同 (負けそつて逃げの斜めに身構える)
- 同 (逃げ腰になって斜めに身構える)
- 同 (新幹線斜めの座席視線ゆき)
- 同 (グリーン車の斜め向うに一と目惚れ)
- 同 (産業も斜陽があつて浮き沈み)
- 同 (産業の海で斜陽が浮き沈み)
- 同 (人生を斜めに見たり春がまだ)
- 同 (人生を斜めに歩き春探す)
- 同 (あの山の冬の斜面をかけ降りる)
- 同 (雪山の斜面へ若さをぶつつける)
- 同 (明日の賭け達磨斜めに置いてみる)
- 同 (斜めからのぞけば本心見えてくる)

(斜めから聞けば本音が洩れこぼれ)

(斜めには歩いていない僕の道)

(斜めには歩いていないつもりだが)

(斜めから人間の裏少し見え)

(斜めから人間の裏かいま見る)

(斜めから斬り込んでくる小姑め)

(雪山の斜めはこわいなだれ場所)

(雪山の斜面がなだれ呼んでいる)

(斜線さつと引いた課長のエンマ帖)

(課長席からは斜めに叱られる)

(斜めから課長の叱声とんでくる)

(ごきげんの斜めを猫に見透され)

(日本の雨へ蛇の目の傘浅い)

(蛇の目傘斜めに京の景作る)

(ノート借り斜めに読んでる一夜漬)

(借りノート斜めに読んでる一夜漬)

(急斜面にも真四角な家が建ち)

(急斜面にまんまと四角な家建て)

(新郎へ斜めに添わせ写真とり)

(新郎へ斜めに添わせレレンズ向け)

(腰おろしすんなり斜めの脚線美)

(脚線美斜めにすんなりポーズとり)

(安全圏保ちマストは傾斜する)

(傾斜するマストは知ってる安全圏)

(傾きを斜めに堪える夫婦独楽)

(物事を斜めで見てる臍まがり)

(あれこれと斜めから見る臍まがり)

(完璧な意見へ斜めにかえたがり)

(真すぐの意見を斜めに曲けたがり)

妻子

同

みつる

同

保夫

同

武水

同

やすお

同

さと美

同

あや子

同

山久

同

同

同

飲んで乗る蛇行の車不発弾

(酒臭いハンドル斜めに逃げたがり)

(千鳥足リズムとりとりのいい気分)

(千鳥足にも癖があり斜め型)

(千鳥足のリズム斜めにくすれ勝ち)

(斜め模様妻が自信の毛糸編み)

(斜め模様妻の自慢が編み上り)

(ライバルとかち合う眸にある斜線)

(ライバルと斜めに視線がからみ合い)

(斜めあつかずはなれず妻が来る)

(神経痛斜めからだ通り抜け)

(神経痛斜めに五体を突き抜ける)

(電卓を斜めに持っている赤字)

(世の中を斜めに生きる人もある)

(スクランブル信号斜めに馳け抜ける)

(メランコリーの窓へ斜めに銀の雨)

(許されぬ人と契った斜め傘)

(決闘を斜めの雨がかきためる)

(病院のスロープ登れた松葉杖)

(斜めから万引見張る目が光り)

(斜めならよいが向いに同業者)

(巻尺を斜めに引つ張る暴走車)

(斜めから激しい愛の鞭が飛ぶ)

(にくい目が斜めに胸を突いてくる)

(寄り添えば雨が斜めに妬いて降る)

(進歩した社会斜めなこと通り)

(影法師斜めになって散歩好き)

(陽の一番好き斜面が萌えはじめ)

(斜めから上目使いの反抗期)

昭治

同

勝美

同

三男

同

たかし

同

節子

同

寿美

同

柳右子

同

兼治郎

同

寿子

同

同

同

同

同

忠広

ポーズとる女斜めに身構える
斜めから一輪挿して引きしまり

同

題一反対一 5月20日締切(7月号発表)
宛先 岡山県倉敷市下津井一八九三四
◎七二一 本田恵二郎

川柳塔社常任理事会 (4月1日)

山席者 菜・薰風・紫香・潮花・太茂津・敏
柳宏子・与呂志・吸江・天笑・凡九郎・寿馬
雀踊子・笛生・史好
〈議事並に報告事項〉

★現事務所開設以来、当番制で事務処理を行
ってきたが、専任制にすべきではないかとの
意見があり検討することとする。

★菊沢小松園追悼本社5月旬会「小唄」の選
者、正本水客氏は都合により若柳潮花氏に変
更された承。

★本社6月旬会を遠山可住川柳句集「ふろん
ば」出版記念、本社9月旬会を天矢十郎遺曆
記念句集「みかん船」出版記念旬会とする。
詳細は別稿参照。

★中原胤人、森山盛桜、越村枯梢三氏の同人
推薦の件、了承。

■5月の常任理事会は1日(火)

木次の桜に心残して——山陰の旅

小出智子

四月七日の本社句会を中座した一行は、午後九時三十分大阪駅発大山五号に乗車。まるで小学校の遠足のような賑やかさである。こんなところも川柳塔ならではの旅の楽しさであろう。句会で会っていても、ゆつくり話すこともないし、初めての方ともまるで十年



の知己のような間柄になって車中での話が弾む。鬼遊さんの欠席が惜しまれたが、退院の近いことを聞いてひと安心。十二時を過ぎる頃からようやく静かになった。明日のため

ば……。
松江駅に着い

たのが午前五時五十分、駅には何人か眠そうな旅人の姿があった。六時過ぎ駅の喫茶店が開いて、それとばかりに珈琲を注文する。愛想よい店員さんと雀踊子さんが冗談を交し、いつもの賑やかさを取り戻す。目的地木次駅に着いたのが八時二十五分。前日から海潮温泉に泊っておられた栗主幹と落ち合った。駅前前の旅館で朝食をすますと、堀江正朗氏からお迎えがあり、新築間もない立派なお住居へ歓迎して下さい。正朗さんのお喜びのお顔と対照的に、芳子夫人は川柳会場のお世話役とあって忙しい中にも、嬉しさを隠しきれない

ご様子で、いそいそとしておられた。少憩の後、会場へ案内されるその道すらお目あての木次の桜はまだ蕾固く満開まではあと一週間以上はあろうかと残念でならなかつた。

会場はもう大勢の柳人が集まり、三十五周年記念大会のムードで満ちていた。久々に会える方や、初めてお目にかかる方とご接

拶を交し、出席させていただいて良かったとしみじみ感じさせられる一時であった。入選句の発表が終り、六月二十四日の第八回全日本川柳大会での再会を約してお別れした。その夜は当日ご出席の千代さん瑞枝さん新春さんのお三方と共に、立久恵峡に一泊することになる。こじんまりとしたとても静かな旅館で、ほかに客も無く、内輪という気楽さもあって、みんなよく喋り、よく唄った。翌朝の立久恵峡は、木次では見られなかった桜の替りに、梅が満開で、そそり立つ奇石と共に素晴らしい景観であった。

紫香さんの手廻しもよく、タクシーで清水寺へ。千代さんお馴染みの店で精進料理をいただいたが、美味しくて幸せの連続だった。更に足立美術館へと足を伸ばし、名園名画にうっとり。五百円也の珈琲をいただく頃から明日からの現実を思いはじめていた。

十六時四十七分発に乗車すべく米子駅に着くと、車楽氏をはじめ瑞枝さんのご主人、きやらばく川柳会のみなさんが見送りに来て下さり、一同感激して名残りを惜しみつつ車中の人となった。雪の大山が右の窓から、また左の窓からと美しい姿で見送ってくれているかのようであった。少々無理なスケジュールも、名幹事の紫香さんのお蔭で、楽しくのんびりと良い旅をさせていただいたことを、みんな感謝したことでした。

柳界展望

集録・板尾岳人

講演、まさに目の御不自
由なこの方だけしか作れな
い川柳だ。

▲本社副主幹橋高薫風氏が
3月11日柳宴創立30年記念
大会に「花道」の選者とし
て参加、郡道上八幡在住の惜
春氏の「花道の裏でひしめ
く阿修羅たち」が秀句に。

▽お便り△

■小用で函館へ来ました。
昭和5年函館で開かれた第
2回海峡親善川柳大会で路
郎先生に初めてお目にかか
ったことなどしみじみ回想
しています。

(工藤甲吉)

■川柳岡山社発行・川柳自
選作品集(吉備団子)三十
四集が3月27日発刊された。
参加者海外も含めて五四四
名、作品数五四四〇句の豪
華版。昭和時代の柳樽とし
て後世にも伝えられるもの
と確信し、常に座右に置い
て何時でも何処からでも手
軽に鑑賞することが出来る
と大森風来子主幹の序文。

▲川柳塔社相談役東野大八
氏は来る5月6日(日)正
午より名古屋市博物館にて
愛知県川柳作家協会20周年
総会並びに川柳大会で記念
講演をされる。

▲第3回松江番傘(マツバ
ン)大賞受賞祝賀川柳大会
で準大賞句(幸せを音の中
から選りわけろ。堀江正朗)
の作品鑑賞を住田三鈿氏が

士手でございました。合掌

(堀江芳子)

■五年前退職致しました第
二米子幼稚園の創立記念式
に参加、幼児教育に精進致
しまして創立と同時に主任
園長代理として勤めた園で
した。

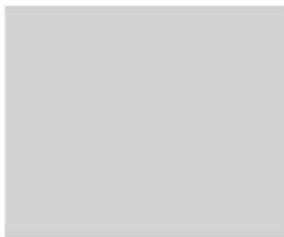
(澤田千春)

■郵政省発行の部内雑誌
「郵政」の柳壇(志水剣人
選)に時々投句しています
が、58年度優秀賞として川
柳部門賞を頂きました。

生き方が下手か風邪さえ長
引かす

(越智一水)

■小松園先生の御逝去を聞
きまして、お元気で木次へ
おいでくださいった時など思
い出して、もうすぐ35周年
の観桜句会の時期を控え、
もう一度見て欲しかった桜



▽句会案内△

- 南大阪川柳会
時・5月19日(土)夕6時
所・寺田町・高松会館
兼題||頑丈・疑惑・グラマ
||芸人
- 東大阪川柳同好会
時・5月26日(土)夕6時
所・東大阪市社会教育セン
ター内
兼題||歩こう・雰囲気・考

新同人紹介

- える・根気
- 駒つなぎ川柳会
時・5月28日(月)夕6時
所・寺田町・高松会館
兼題||神秘・動揺・受ける
・猛者
- 西宮北口川柳会
時・5月14日(月)昼一時
所・西宮中央公民館
兼題||そわそわ・無頓着・
自由吟
- 南海電鉄川柳句会
時・5月17日(木)夕6時
所・南海会館内南海電鉄(株)
本社地下食堂
兼題||禁煙・男・ケーキ
- 富柳会 鳥羽伊勢吟行
時・5月21・22日(月)・(火)
所・伊勢神宮|鳥羽
会費・二万円也
兼題||海女・島
申込みは藤田泰子迄5月10
日締切り
- 菜の花句会
時・5月10日(木)夕6時
所・八尾神社内西郷会館
兼題||社員・さんげ・走る
・道具
- 堺川柳会
時・5月14日(月)夕6時
所・堺青少年センター3F
兼題||声・親・匿名・風
- 中 原 諷 人
— 紫香・由多香・洋々推薦
- 森 山 盛 桜
— 紫香・由多香・洋々推薦
- 林 荒 介
— 菜・紫香・薫風・花子・千代推薦

本社 四月旬会

会場 なにわ会館

七日 午後六時

今年は関西地方に春一番が吹かず、陽気は三歩前進二歩後退、桜の開花は記録的に遅れている。

今月のおはなしは黒川紫香氏。3月25日の鳥取県川柳大会は地方色豊かで、情熱あふれる鳥取県らしく大変盛況であったと報告されこの日夜行で塔社から16名参加するむらも創刊35周年記念大会の木次町近辺の観光案内をされた後、本題のトイレの話へ。駅のトイレというのは大体汚いもので、殆んどいってよいほど落書があるものだが、感心したのは東北、角館駅のトイレ。しゃがむと正面の白い壁に名所案内の美しいイラストマップが描いてあり、楽しく用を足すことができた。終戦直後、枕木の買付けで泊った旧家の豪奢なトイレに面くらった話から舞台はハワイ、台湾へ飛び、小林一三翁の長トイレへと展開。こと阪急となると口調も熱がこもる。

初出席は前山美恵子さん(桜井市)。

四月の月間賞は奥田みつ子さんが獲得。

(史)

(進行―天笑) (受付―与呂志・重人) (記録―重人・比呂志)

出席者―与呂志・岳人・滋雀・凡九郎・只士・天笑・雀踊子・幸生・柳伸・春蘭・狸村寿馬・重人・太茂津・三男・武庫坊・年代・英子・幸・勝美・静歩・狂虎・紫香・潮花・はつ絵・寿子・浦野和子・満津子・道子・右近・水客・萬的・トメ子・白水・射月芳・寿美・文秋・薫風・あいき・山久・弘生・美代子・景子・美房・美恵子・智子・頂留子・英壬子・公一・美幸・喜風・三十四・覚然坊・好一・蕉露・比呂志・敏・古都路・冬葉・悦郎・みつ子・度・史好・規不風・楓楽・柳宏子・白兔・吸江・泰子

庶題「ゴール」

吉岡美房選

全頁に賞を上げたいゴールイン
ゴール迄走る男と村を出る
ゴールで握るライバルの温い手よ
人生のゴールに保険屋まだ癡め
ゴール迄完走する顔並び
辿りついたゴールに過去をぬき捨てる
卒業の紙はゴールではないぞ
ゴールなどないお遍路の鈴の音
栄冠を取ったゴールから風冷える
坂越えて来たのにゴール見当らぬ

柳 岳人
冬 葉
与呂志
滋 雀
美 幸
狂 虎
規不風
射月芳

口惜しさはゴール直前息が切れ
ゴールインそれから始まる長い坂
嘘一つ目出たく呑んだゴールイン
これからのことは知らないゴールイン
競ったゴールの下に鬼が居た
ゴールしてマラソン普通の女の子
陽が斜めゴールは霞んだままである
鬼灯を噛むとゴールが見えて来る
ライバルの音が聞えて来たゴール
蝸牛きつとゴールへたどり着く
あれこれとゴールが見えて慌てだす
ゴールインするまで開かない拳
春雷に一瞬近くなるゴール
春光のゴールへドラマ組立てる
ゴールインしてからわかった母子手帖
一着でゴールを切つてからの坂
ゴールする明日へ母は鶴を折る
ゴールまだ遠く川幅ひろくなる
ゴールから遠くにひとり居る歩幅
古くともゴールイン迄清くいる
ゴールには遠く炎を抱き続け
ゴール以後空しい風も少し吹く
僕の手の中がゴールだ駆けて来い
ゴール寸前自分を責めて見なくなる
冬のゴールにふくらんだ森がある
僕が踏むゴールに観客などいない
ゴールインこの淋しさは何だろう
ゴールインしたとき虹は消えました
視野に抱くゴールへ終止符など打たぬ

右 近
満 津 子
浦 野 和 子
智 子
弘 生
萬 的
白 兔
岳 人
紫 香
岳 人
三 男
幸
武 庫 坊
雀 踊 子
景 子
天 笑
悦 郎
水 客
与 呂 志
規 不 風
寿 子
楓 楽
潮 花
狂 虎
幸 生
狂 虎
年 代
寿 子

ゴールまで惚けたくはない薄化粧
ゴールからはじまる一歩だつてある
美房

席題「伸びる」

福本英子選

都市砂漠となりの草はよく伸びる
柳伸

豆の木が伸びると喋り出す絵本
滋雀

だぶだぶの服着せられた伸び盛り
天笑

豆の木の伸びる教えを笑えるか
雀踊子

デモクラシー踏まえてスラリと伸びた足
寿美

伸びて来て農家あわてる春野菜
勝美

少年の靴一人歩きから伸びる
白兔

靴ちびてきたのは伸びぬ棒グラフ
射月芳

ペラングに伸びたはこべを可愛がり
みつ子

背伸びしたローンに頭ぶつつける
満津子

パンストの伸びにすまないナと思つ
道子

春うらら間のびしている御挨拶
静歩

背伸びした家のローンが重た過ぎ
美代子

伸び縮みしてついでくる影法師
公一

堀越えて新芽が伸びるばくの庭
はつ絵

成績は伸びたが孤独つきまとう
柳伸

糸電話伸ばして孫とする電話
紫香

頑張れば伸びる教師の処方箋
美房

うかうか出来ぬライバルの爪伸びている
浦野和子

伸びるのは摘まぬがこぼれ放つとかれ
美房

地下鉄がのびると黒い議員出る
天笑

父よりも伸びた背丈で父を見る
幸

試歩伸ばす土筆に春の詩を貰う
太茂津

背ただけ伸びても大人でないだヨ
凡九郎

ライオンもババも伸びてる日曜日
智子

伸びた手の先から欲が逃げていく
同じ種まいて隣が新芽伸び
山久

豆の木が伸びると気のいい鬼が落ち
景子

伸ばしたら届くところに罨がある
文秋

触角を伸ばして火傷した話
狂虎

喜寿済んでまだ伸びている生命線
規不風

髭伸びてあしたのことを考える
美幸

茸伸びて次の世紀を考える
幸

背伸びした分だけ命ちぢむかも
狂虎

伸び縮みする紐であやつる母の知恵
浦野和子

ネタ切れへもつと伸ばせという合図
柳宏子

伸びる芽をつまねばならぬ慈悲もある
柳宏子

面白いほど食欲がある伸びざかり
智子

芽が伸びる春のドラマのはじまりに
幸

伸びるだけ伸ばし魚拓の墨のいろ
英子

兼題「円」

宮園射月芳選

仲の良い夫婦で楕円の中に住み
寿馬

銃口の円い穴にも人が棲む
幸生

忍従でつなげば丸い円になる
幸

一円を啜った日から奈落見る
優

月円となり弦となり年めぐる
どんたく

円熟期女の自我が強くなる
寿美

円満な鳩が吹き矢を研いでいる
柳伸

円陣を組むとはなしが丸うなる
柳伸

井の中の蛙小さな円を描き
耕花

熟年の恋円周をかけまわる
赤木和子

一円をすなおな気持で拾えるか
天笑

同心円あなたを軸に回ります
山久

落書きの円の一つは母の顔
コンパスの円は綺麗でつまらない
大茂津

マンネリの円周ばかり駆けている
楓

親父には負けないほどの円を描く
智子

再会を誓って円を描き直す
悦郎

児が描くいびつな円に夢がある
はつ絵

ライバルと同心円にいる心算
水客

石拾う鍵っ子ひとり円を画く
紫香

円のまわりを離れられない一人
白兔

円を画くトンビ遊んでおりませぬ
幸生

香具師の描く円に釘付けされている
文秋

親と子の円が微妙にずれてくる
三男

生真面目にいびつな円を画く男
浦野和子

あと一人妥協をすれば円になる
道子

痛ましい事故白墨の円の中
景子

川柳初歩教室

とき 五月八・十五・二十二日

(火曜日午後一時半～三時半)

ところ 日中文化センター

(阪急梅田駅北口から北東一〇〇

m・阪急北ビル4階)

講師 黒川 紫香

会費 二、五〇〇円(三回通し)

申込 千五三〇

大阪市北区茶屋町一〇一六

日中友好協会大阪府連合会

(電話 三七二八一三一代)

円周をかける男の数え順
台風の円が近付き釘を打つ
古新聞妻は十円笑わぬ
円から出ると天国がありそうで
円卓に着くのに下座探して
円描いたそこに疑問が伏せてある
円陣でイナゴを運ぶ蟻の列
夫婦独楽少しびつな円をかく
マル一つ画いて老僧目を閉じる
円周を辿って抜け道考える
子を入れる円をいつでも描いておく
武器捨てて世界制覇を目指す円

兼題「突破」

宮尾 あいき 選

さあ突破進軍ラッパ妻が吹く
末席の思わぬ意見が突破口
一線を突破せぬまま熱が冷め
不況風突破を誓う棒グラフ
全力をつくせば見える突破口
ホームラン記録突破の甲子園
目標突破またライバルに追い越され
突破した記憶の中の日の丸よ
どん底を這って見付けた突破口
逆転の突破口にするヒット
難関突破エリートコース一直線
外資導入倒産への突破口
難関を幾度び突破して二人
人生は突破で始まる登り坂
突破した昨日の靴が唄いだす

寿子 冬葉 重人 はつ絵 悦郎 悦郎 雀踊子 柳宏子 滋雀 楓楽 射月芳 千秀 登志代 幸一 吸江 頂留子 三十四 英子 勝美 浦野和子 英子 三男 景子 満津子 美恵子 太茂津

突破して傷を舐め合う凡夫婦
反対を突破している愛一途
鳴門橋難関突破のヘルメット
カーテンを押せば突破が出来ますか
幸せを信じて壁を突破する
記録更新突破口への汗涙
突き破る壁の厚さは考えず
突破した線でノルマを決められる
妻と娘のスクラム突破する秘策
振り出しに戻り見付けた突破口
突破した気配素直な風あたり
ひたむきな女が握る突破口
突破する山がでっかく見えてくる
独力で突破みどりが美しい
突破口の向うにありそう春の風
突破口見つけて川が広がる
春色の紅買いマンネリ突破する
突破口開けばまるい風に遭う
一線を突破結婚致します

美幸 道子 英子 美代子 寿馬 春蘭 天笑 美房 三男 楓楽 白兔 柳伸 浦野和子 道郎 悦郎 道子 楓楽 重人 あいき 美雀 道子 英子 美代子 寿馬 春蘭 天笑 美房 三男 楓楽 白兔 柳伸 浦野和子 道郎 悦郎 道子 楓楽 重人 あいき

兼題「びくびく」

笠原 吸江 選

良心がびくびく仮面の裏にすむ
手術台組上の鯉になり切れず
手術室また点いている赤ランプ
余る程無くてビクビクせずすみ
びくびくと生きたときかがつかれる
ロケットにびくびくして阿呆らしさ
びくびくと射る矢は的にとどかない
びくびくの握手向うの手も震え

美雀 道子 英子 美代子 寿馬 春蘭 天笑 美房 三男 楓楽 白兔 柳伸 浦野和子 道郎 悦郎 道子 楓楽 重人 あいき

奈良市立中央公民館竣工祝賀

第56回奈良県川柳大会

日時 5月20日(日) 10時開場

会場 奈良市立中央公民館

三条通やすらぎの道角郵便局あと

宿題 後(うしろ) 宮口 笛生選

枝 中本まさお選

小荷物 大神 古梅選

財布 古川 一高選

結ぶ 河合 渡口選

風 吉田 益子選

席題 2題・各題2句 正午メ切

会費 八〇〇円

投句先 奈良市北市中町

杉野 睦朗 宛

投句 (15日まで) 五百円(誌呈)

主催 奈良県川柳連盟

敗北の弁へ借金追ってくる
 しょうもないことに両方びくびくし
 びくびくと嫁いで目出度く子が産れ
 神のみが知る足音を死刑囚
 税務署でびくびくしてあはらしさ
 びくびくしてたら問題読みちがい
 びくびくとするから腹を探られる
 びくつくなうしろの鬼が唾うてる 浦野和子
 卵巣もったしびくつくことは無し
 びくびくを伏せる心を見失う
 びくびくとしてゐる振りて腹をかけ
 両方がびくびくしてる核兵器
 ロボットにびくびくする日が来るだろう
 びくびくと聖書をめくるホスの猿
 ひとり芝居びくびくしてる訳でなし
 核心へびくびくしてる正直で
 弥次郎兵衛びくびくするなと揺れている
 びくびくと空巢が押ししているアザー
 びくびくと頼めば笑顔で貸してくれ
 びくびくと入って混浴温もらす
 原告がびくびくしてる証人席
 地に還る定めびくびくなどしな
 質問が来そう先生と目が合うた
 びくびくと脱ぎ大胆になる女 浦野和子
 なかばびくびく女の過去に触れたがる
 萬的
 びくびくと春一番砂時計
 岳人
 びくびくと動いたうきに来る蜻蛉
 紫香
 独り身をびくびくさせるものがない
 柳伸
 びくびくと来たお役所で茶を出され
 紫香

三十四
 柳宏子
 喜風
 幸生
 与呂志
 天笑
 満津子
 浦野和子
 千秀
 寿子
 只士
 勝美
 楓楽
 はつ絵
 水客
 道子
 水客
 潮花
 登志代
 英子
 満津子
 赤木和子
 公一
 浦野和子
 萬的
 岳人
 紫香
 柳伸
 紫香

肩ヒジを張ってもビクビクきこちない
 びくびくと通天閣が立っている
 会者定離そんなにびくびくするでない
 びくびくと手形は無口で耐えている
 良心がびくびくしている影法師
 素っ首を洗って社長の前にいる
 兼題「平等」 野村 太茂津選
 平等に分けぬと魔女の血が凍る
 平等に徽章をつけた貴賓席
 考えかたの差で平等がもめている
 平等に減らぬ悩みの多い靴
 男女平等女も飲みます旗も振る
 生も死も平等かなとふと思つ
 神代からアダムとイヴの不平等
 一率に分けて平等とは言えず
 平等に母はこの血を分けました
 やがてくる別れは誰にもきつと来る
 平等へ冷たいほどの子供の目
 平等の底にも不平沈んでる
 平等に出発点で皆並ぶ
 平等の風船玉がよく割れる
 平等に切れぬ西瓜へもめてくる
 朝起きもお酒の量も平等で
 平等やなんておまのかホントーニ
 平等をルートでひらいてみたくなる
 不平等な話と思う役どころ
 平等法男女の別は厳とある
 浦野和子
 美代子

平等の暮しがしたいめし茶碗
 平等を説いて白亜の城に住む
 平等の愛へ受皿みな違ひ
 平等にしたので女逃げました
 平等に気ままだが言える夜の貌
 平等がどうにでもなるのど仏
 平等を唱えて本音隠し持つ
 平等に産んでも顔の出来不出来
 平等にしない平等だってある
 平等に三等分をできませるか
 平等を謳うといくさの顔になる
 ふところ手みな平等な顔をする
 平等もよいが格差もつけて欲し
 平等に包んだ仏の座の広さ
 平等に愛を欲しがるのは喜劇
 平等に分けろと遺書に書いてない
 夫婦茶碗女は小さい方がよい
 平等を盾に女は強くなる
 平等に残り時間が減ってゆく
 博愛主義も人間時には不平等
 赤木和子
 登志代
 年代
 柳伸
 白兔
 冬葉
 あいき
 重人
 三男
 滋雀
 水客
 潮花
 滋雀
 幸
 史好
 満津子
 狸村
 みつ子
 大茂津

吉水照江さん(岸和田市)より
 亡父十三回忌供養として
 金一封
 拝受致しました。
 川柳塔社

冬也柳城

締切毎月末。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。

整理・板尾岳人

勝山双葉川柳会 鈴木 節子報

新妻の料理味より愛を盛り
学転のあつい噂に春の雪
新しいことになじめて年重ね
香たいて心新たに整理する
新築に古女房でごめんなさい
新築の祝いはローンへ横すべり
昔五座浪花囃子は春団治
あわれ五指みなそれぞれの罪をもち
新しく伸びる力へ春一番
新社員重要書類に遠い椅子
新刊書読みふけりつて来た車窓
新調へ娘の目嫁の目々の目
見栄張った分だけ稼ぐ昼と夜
栄光に君が代名曲だなと思つ
見栄を張る男が好きなきりめし
繁栄に馴れて気付かぬ砂の城
朝の笑顔で新人採点されている
歯に合わぬ五色豆がなつかしい
四捨五入してプライドを傷つけず
三三五五三三五と七五三

勝子 景子 いく子 千梢 好子 求芽 凡九郎 鬼遊 柳宏子 覚然坊 春蘭 久葉 冬葉 与呂志 岳人 射月芳 芙佐女 あいき 浩一郎 文秋

五目ずしみんなお嫁にやりました
新月に心のすき間のぞかれる
甲子元旦新しい筆おろす
新しい門出に妻と旅をする
立派な五体持つて骨のない男
商人の根性ではじく五つ玉
栄達の道で薬人形を斬る
新築の和室で老母の肩をもむ
五里霧中だけど出口はきつとある
新しい席ロケットにうばわれる
同居せぬつもり五階に住みなれる
若者の五月とおなじ苦がない
新人の呼び名が取れてきつい坂
ベランダの新芽隣へ声を弾む
嬉しい日五本の指がよく弾む
五十音順ではいつもあとになる
国債ファンド五年先など分らない

夕花 洋子 史好 薫風 雀子 雀踊子 藻介 重人 頂留子 寿子 柳伸 智子 楓楽 藤子 妙子 智慧子 節子 正朗 はじめ 峰雪 秀子 芳子 孝華 文子 みどり 鶏生 蚊声 ゆき子 雪路

天井で猫と鼠の知恵くらべ
苦しみに耐えて花咲く大学生
異性呼ぶ夜明けの猫へ浅い春
晩年は爪をかくした猫になり
趣味の友楽しみ小さい旅をする
雪とけて旅誘われる花だより
年金の財布は夫婦別に持ち
年金で趣味を生かせる世に感謝
肩書をおろし気軽な孫の守
年金で楽しい老後のプランたて
太陽のぬくみはつぼつ梅だより
春そこにはつぼつ桜芽がひらく
肩書の重たい程の名刺みる
いそがずにはつぼつ歩むカタツムリ
こたつの番はつぼつ何をしようかな
肩書がふるまう酒に酔わされる
冬眠もならずラッシュユの中の僕

克子 よし美 清祥 三喜子 ナツエ 章子 よし子 百代 はる代 静子 ヤスカ マサコ 喜代美 林蔵 千里 藤子 明朗 千代子 覚然坊 柳伸 頂留子 良京 春蘭 好一 喜風 柳宏子 雀踊子 三十四 悦郎 度

むらくも句会

藤井

明朗報

東大阪川柳同好会

斉藤三十四報

朗報へわつと賑う台所
肩書は老人会の役ばかり
喜寿と古稀子等に招かれ旅に出る
ほのぼのと聞く朗報は花便り
春の土手から冬眠の幕をあけ
朗報へ母は水割少しのみ
鬼瓦冬眠などはまだ知らず
朗報を祈る満願の坂登る
水道管破裂 冬眠あわてさせ
夜汽車から旅の疲れを持って出る
留学生親の届かぬ苦勞する
三味線の音色にはけた猫の皮
学生もテスト受験に鉢巻す

度

大臣の声明に見る二枚舌
建前の声明文を用意する
声明が出る度進む核基地化
勝った方の声明文で昼の顔
その裏に裏の裏読む声明書
声明の裏に秘密のある政治

城北川柳会

神夏磯道子報

只一つの武器は仕事の道具だけ
泣き落しという女の武器はもう古い
核弾頭武器も茲迄来たものか
早春譜子の毬母の手を抜ける
武器持たぬ平和な国を望みます
情報網都会も狭くなりました
金の事になると夫は遠い人
モノリザの笑いに冬が澄むばかり
志立てて都会で皿洗う
大都会診断すれば胃拡張
雪積り庭の松枝手ごとく
明るさと暗さが同居する都会
ピーポーの絶えぬ都会の二十四時
都会の谷間に古い家訓が生きて居る
冬枯れに傘の花咲く御堂筋
灯の下に鬼も仏も居る都会
反核を叫ぶ日本が武器増やす
フルムーン遠出を誘う駅のピラ
地下街で雪のニュースを遠く聞く
都会の駅一期一会の人で混み
ピストルを持つから人生観狂う
平和な日何故か軍歌がきこえてる
職人の心へ溶けて行く道具
歩道橋ねぐらに都会の鳩生きる

白屯 美子 みつ子 弘生 凡九郎 滋啓 炉 斎 千世子 新一郎 千賀子 すみれ 重彦 ふみ 静歩 圭介 ただし 茂樹 好恵 静子 テルミ 達子 婦美子 悟郎 公一 道子 右近 笑風 泰世 登志代 節子

密輸入さる武器又しても夜を咲く
闇わぬ銃象嵌の美しさ
大都会砂漠の隅に住み馴れて
へそくりが互いに出る他人めき
ご馳走はないが田舎の茶が旨い
豆撒きに子が逃げまわるせまい家
ウインドー借りて都会に春が来る
ライバルの武器が気になる棒グラフ
地下街を出る度違う都会の灯
妖しくも美しい顔を持つ都会
へそくりがありまます宝石見て歩く
遺伝子も一寸違えば武器になる
打吹川柳会 奥谷
今日も雪天は凡愚を試すのか
色眼鏡慣れるとそれが尋常に見え
合格と直ぐに判った弾む声
外出に妻ありたけの服を出し
歌うのは苦手黙って蟹つづく
ますくとも孫に見せたい句を残し
年金が春の顔してお年玉
ゆとり無く路傍の石をけつてみる
働いたその日の晩酌うまいこと
悪い癖似ねばよいのに特に似る
借り衣装だぶつく袖が気にかかり
子育てにゆとりない娘を思いやり
さりげない妻の言葉に含む針
空瓶で飲んだ酒豪の量が知れ
気のゆれを明るい眼の子がみつめ
流行を先取り娘変化する
ごみ集め寒させても熱いお茶
子のために水火をいとわぬ母であり

達一郎 弘生 晴子 頼一郎 午郎 茂一郎 満津子 山久 星斗 倫子 美恵 正之 弘朗報 宗光 柳風 寿満湖 民子 松女 梅朗 吉朗 みをき 忠男 幸枝 嘉寿恵 文子 孝美 亮二 康子 節子 高代 喜美子

さすがプロ見せ場はちやんと心得る 弘朗
川柳たけはら 森井 菁居報
はだしのゲンみたこわかったおもろかった 保育はるみ
ゆきだるませんせいだけがつくってた 小三純
外は雪ホットジュースがおいしいぞ 小方昭
せらろはつづくちよつとおいい父のさと 小六仁
中学という壁の向うにある希望 小四美
母さんの手あみ手袋あたたかい 小五早
もつすぐだ春の光がさして来る 中一紀
みんなライバルで朝から燃えてくる 高一愛
失敗の巻を生かして春を待つ 菁居
残り火のロマンへくべる諸がない 静水
しょうもないことを覚えていた小指 蘭幸
父と子のいくことを覚えてほどほどに 令子
曲り角やっぱり夫についてゆく 淑子
春の宵花が膨らむ音がする 笑子
哀しいからと言って後もどりできますか 房子
雪しんしん孫のおしめはどうしてる 観杏
流れ矢を引き抜いていく冬の海 節夫
ライバルの歩幅へ合わせ射程距離 洋之祐
口下手の父は丈夫な足をもつ 比呂子
煮こりへんとはなしに亡母おもつ 鈍舟
手本書く自分の手本書けぬまま 敬子
喜びもつかの間受もつた子の支度 浄美
もう父が呑むこともない盃よ 西合
同じ日はなし新雪を今朝も踏む 貞子
孫抱いて餅がふくらむわらべ唄 一路
遠慮することを知らない隙間風 シゲヨ
老い多情人恋い世恋い未来恋う 兼治郎
翠洋会 中西兼治郎報
定退後土に楽しみ持つプラン

吉報を一足先に知らされる
 楽しさをさりげなく書くフルムーン
 万葉を偲んで摘み菜葉しむ野
 地図にない春の道ゆく古都めぐり
 楽しさはまだ見ぬパリのスケジュール
 国訛聞くと水車が廻り出す
 芽がみな約束続くカレンター
 万障を繰合せする小唄会
 芽が出ない男パチンコしてさえも
 枯枝に血が巡り出す赤い芽よ

サークル檸檬

植松

慶子報

綾子 光子 照子 宏子 恵正 楓楽 登志実 みつ子

ピカピカのカーでサラ金逃げまわり
 ひなまつり男わびしい穴を掘る
 輝きをなくした二人の青い鳥
 娘が成長する程離れ出さくうがり
 ぼんぼりに女の炎がみえかくれ
 笑いだすあかるさたもつ輝きよ
 新社買胸のバツジが輝けり
 初雛を娘には買えずに孫に選る
 雛まつり母につながるものばかり
 ひなあられ五彩の夢掌に
 孫抱いて雛を見る目になつてくる

岸和田川柳会

植山

武助報

柳太 美房 森子 千代女 今日子 登美子 慶子 泰子 美緒 薫風

子育てを終えて再び妻になる
 亡兄の忌にやっぱり亡母の事に触れ
 萌え出した芽が大空に背伸びする
 悔いばかり残して日々が過ぎていく
 隣席へ餉りレーするバスツアー
 すいすいと泳ぐ選手の寒稽古
 すいすいと儲けた金の減る速さ
 あれこれと五十は五十の夢を見る

礼子 ひで ころう さよ子 あい子 照江 佳生 富志子

金婚へ曾孫益つぎに来る
 CMの間にチャンネル浮気する
 寒暖へ迷い続けている木の芽
 泥沼に沈んだ人形戻らない
 金策に足もつれる猛吹雪
 生きていく決心くれた子の寝顔
 先頭でラッパを吹きたがるピエロ
 栄転の人を見送る春の駅
 月並みな言葉に宿るあたたか味
 親の意に添わぬ決心する無口

尼崎いくしま川柳会

角野かず子報

幸代 世界人 武助 狸村 ゆずる 希久志 甘平 射月芳 白光子 操子

足音立てて春のいくさがやつてくる
 母の手に餅は素直に丸くなり
 ほら吹き笛がときどき弱く鳴る
 社名入り紙袋それなりの貌
 雪の原母が一層小さくなる
 合鍵がすこし鳴るのは午後の罪
 大正の恋野菊の幕で結ばれる
 的を射た女の尻は重かった
 くだらない事を言ってるよい男
 寝るのには惜しい話が耳につく
 老妻がチョコのかわりに二合瓶
 軒までの雪染めている赤提灯

状態いまちまづつてある野望
 餅花をくぐって買った小さい鈴
 よもぎ餅子は故郷をまだ知らず
 胃袋を覗いてもらっている不安
 さようなら運命線と対話する
 鼻唄を淋しいときも口ずさむ
 落ちてはいる切符キセルの匂いがし
 仏壇へ板チョコ供えバレンタイン

かすみ 弘生 郁栄 かず子 定人 紫香 伊升 墮駄 佳秋 晴子 美智子 伊三郎 美代子 牧郎 年代 春子 乙女 はし芽 かね子

第16回 東洋樹川柳賞贈呈川柳大会

第16回 東洋樹川柳賞

東野大八氏

日時 昭和59年5月13日(日)10時半開場
 会場 神戸市立福祉センター5階 婦人会館

神戸市中央区通橋3丁目4-1

兼題

黒 続 く (当日発表)

雨 約 東 点 友だち いびき 鳥

特別課題(一句) 樽 石井 冬魚選

席題なし・締切12時半

講演 「これからの川柳」 東野大八

会費 千円(記念品呈)

懇談会 三千円(当日受付)

主催 時の川柳社

宅急便国の母から逢餅

レフリーの目に境界の断下る

ピリオドを打って一人の足になる

年上の女房が餅をまた焦がす

ひな祭招待状を孫がくれ

貝拾い下手な熊手がよく見つけ

ふるさとで大の字になる古畳

やり切れぬむなし右翼の宣伝カー

父ちゃんの髭が恋しい雪の国

子を消した雪の深さへ竹ちつくす

猪食えは昔の傷が疼き出す

亡き人の形見となりし紙人形

もう一度白紙の私にもどりたい

若夫婦切符は二枚重ね持ち

玉子

歌子

礼子

良征

一郎

保蔵

すえ

シズ

静江

梨枝

よしを

藤田 奏子報

千代女

今日子

幸一

黒田 草舟

老いぼけ

憎まれておのれ誇示する老いのつね

忘れぬために嫌味をいうて見る

ぼけしこと知らず放言居士となり

ぼけと訝えたがいちがい老いるらし

ぼけてよしぼけたふりするさらによし

自画像

いつしかに屈伸体操ムリとなり

チャンバラを二本見では叱られる

へたな字で耕目理めて今日も暮れ

始まりは切符二枚の指定席

乗り替えの出来ぬ切符が似合ってる

往復切符がもっているのは罪と罰

凡人で暮らす切符を握りしめ

傷口を母のぬくみで包むなり

今やつと人に話せる傷の跡

四捨五入に見捨てちゃう嫌と一円貨

四捨五入すると私は善人で

四捨五入四・九という不運

この俺の哲学にない四捨五入

エンマにも仏心の四捨五入

四捨五入ママは天狗の通知表

紙うらに母の綴った一行詩

夫婦という切符でしばっている自由

義理で読む祝詞の紙は透けて見え

傷口の数え唄なら持つていて

傷口へ母から届く紙つぶて

傷口をつつき虚しい日を送る

楢山へ往復切符買っておこ

四捨五入カウントにない四捨五入

四捨五入頭の痛い粗大ゴミ

紙吹雪青一色にする舞台

傷口をみせずおかめの面をつけ

川柳わかやま

数だけは増えても味方とは言えず

減っていく余生へ夢が増え続け

脈拍が増えては勝てるはずがない

口数が増えてのぞいて来た心

なやみごと増えて世間を知りました

ライバルが増えてゴールが遠くなる

サラ金の看板増えて平和とか

美佐子

喜代

冬二

花梢

千代

治郎

富久一

美緒

泰子

優

弘生

恒子

与呂志

森子

美房

美代

岳人

金太

きぬ

勇

美津子

柳太

慶子

光

三男報

老

太茂津

狂虎

公九郎

凡九郎

寿子

克子

もっていくらし老母貯金増やしてる

想い出をひとつ増やした途中下車

禁煙を叫び自販機また増やし

人生の重みへ皺が増えてゆく

繕いの糸を女は手離せぬ

綾取りの糸に幼い虹がある

妥協するひとつの糸がもつれてる

糸を吐く怪獣がいた東京都

武装せぬ母が生きぬ糸車

片恋の長さを抱いた蜘蛛の糸

孤児笑う縁の糸は切れていず

養父母へ苦悶の糸が放されず

昔ほど糸は要らない使い捨て

からくりの糸が切れるる楽屋裏

疑いを消しても納豆糸を引く

嘘言えぬ人へ思わず気を許す

もう許す気でつく朝のおみおつけ

バカバカと女は許すつもりなり

影すでに許す気でいる父の背

人みんな許して太陽今日も照る

許し乞うおとなになつてゆくために

許すとは言わずに財布委される

許す気になれば許せる程のこと

背信の友を許した歩が軽し

叱つてる母さしくとくに許してる

英霊へ二度といくさは許されぬ

貧しくて神の許しに遠ざかる

許される私自身を許せない

的はず視線とくに許してる

許すしかない枕も納得する

お彼岸の墓に告げたい事ひとつ

栄美子

正子

桂香

和久子

千寿子

緑良

道夫

雀踊子

豊太

柳宏子

きみ

庄平

信秋

悦郎

照子

英子

紫香

萬的

紀美女

幸

正博

凡太

白光子

信子

登志代

弘生

武庫坊

裕美

千代雄

すんなりとあなた許すと言えますか
川柳塔からつ 浜本 義美報

三男
義美報

宿坊に朝湯が欲しい部屋の冷え
これしきの年金の税も逃がさない
籠の鳥広い世界へ逃げ出す

白漢子
栄

老いてなお違つ童画を抱いている
怨念を抱くと火を吐く火繩銃
春よ春カメラぶら提げ野に山に

荒介
昭二

踏まれ通し方がいい顔している畳
お隣に頼み上手の新世帯
妻と子の比重が重いヤジロペー

素石
虹江

逃げこんだ穴にピエロと鬼がいる
いちばんに春を逃げてく渡り鳥
逃げるのにいつもの庭に来る雀

美穂
武庫坊

相手が悪くて失言に金がいら
失言は本音と建前別にある
失言がもとで肩書揺さぶられ

舞吉
鶴丸

鈍角を親が教える曲り角
桐餅を餅のせてわずかな夢を持つ
陶磁器の陶苑土産は後家茶碗

正敏
四郎

逃げ腰を囲む女にからまれる
川柳塔まつえ 恒松 叮紅報

和友
紫香

巣立つ子の羽根には虹を抱かせとく
退院を羽根ひろげ合う千羽鶴
すり合わせ羽根で呼んでる恋の歌

ゆう也
美智子

美しい女紫煙くゆらし足を組む
五カラットの夢正夢になるときも
日本列島いつまで続く雪日和

高明
多々子

三角の頂点で笑う男達
愛と憎三角形を狂わせる
手際よくナースの捌く三角形

多賀子
芳枝

産声に母の祈りは長かった
満願へ祈りを終えたよだれ掛け
川柳ささやま 河原みの報

素水
愛子

還暦の川柳塔の灯に集う
緋の衣脱げば屋台の飲み仲間
京都塔の会 松川 杜的報

ちよ
多弥

また出るぞ三角野郎樽たたき
三角帽ぬいだピエロの足に風
二代目が逆三角形にしてしまい

春梢
瑞枝

除雪費を鯨腹食って春そりり
春先へ傷もつ男の血がさわわぐ
春先にピンク色した風が吹く

房子

妻が居て娘が居てくれて喜寿の膳
一日に五分遅れる置時計
撒く人の善意信じる花の種

潮花
花代子

また倒産きく春先の風が沁む
また倒産きく春先の風が沁む
また倒産きく春先の風が沁む

孤呂二
与根一

笑い袋の底に涙が溜つてる
一流の時計狂うて見たくなる
和の中の頂点に立つ厳しさよ

史好
悦郎

墓の前亡父にすがるときはかり
台北の旅で日本語聞く安堵
ペンギンのエプロン汚れたまま夏がゆく

春江
はつ絵

春先の露地でかごめのみきこえ
春先の外出着てみてまたぬいで
笛鳴きをきく春先の緑に佇ち

雄々
みつこ

少年が明けて夫婦の気がゆるみ
少年の手帖に裏口などはない
アルバムの中に黄色い風が棲む

礼子
千代子

大阪の水でペンギン夏を越し
ペンギンの恋は水の上で燃え
ペンギンの不満南極が汚れかけ

孝江
芳江

抱き癖をつけては罪を子に着せる
しかと抱くあれは密書かもしれず
実印を押してからふつと抱く不安

嘉寿子
秀子

妻にしか分らぬ箱が棚にある
頭打つたびに利口になるだろう
捨て鉢になってはならぬ血廻し

千代子
牧郎

宿坊の朝が澄み切るほととぎす
宿坊で戴きますを覚えさせ
宿坊の雪へ男は過去を持つ

冬子
麗水

鬼瓦上げるまではと抱く抱負
鬼瓦上げるまではと抱く抱負
鬼瓦上げるまではと抱く抱負

愚童
代仕男

見栄はった寒さ一人になってから
見栄はった寒さ一人になってから
見栄はった寒さ一人になってから

楓楽
正敏

宿坊の雪へ男は過去を持つ
宿坊の雪へ男は過去を持つ
宿坊の雪へ男は過去を持つ

花村
水客

抱き癖をつけては罪を子に着せる
しかと抱くあれは密書かもしれず
実印を押してからふつと抱く不安

由郎
正朗

見栄はった寒さ一人になってから
見栄はった寒さ一人になってから
見栄はった寒さ一人になってから

泰子

宿坊の朝が澄み切るほととぎす
宿坊で戴きますを覚えさせ
宿坊の雪へ男は過去を持つ

麗水
花村

抱き癖をつけては罪を子に着せる
しかと抱くあれは密書かもしれず
実印を押してからふつと抱く不安

愚童
代仕男

見栄はった寒さ一人になってから
見栄はった寒さ一人になってから
見栄はった寒さ一人になってから

楓楽
正敏

宿坊の朝が澄み切るほととぎす
宿坊で戴きますを覚えさせ
宿坊の雪へ男は過去を持つ

麗水
花村

抱き癖をつけては罪を子に着せる
しかと抱くあれは密書かもしれず
実印を押してからふつと抱く不安

愚童
代仕男

見栄はった寒さ一人になってから
見栄はった寒さ一人になってから
見栄はった寒さ一人になってから

楓楽
正敏

宿坊の朝が澄み切るほととぎす
宿坊で戴きますを覚えさせ
宿坊の雪へ男は過去を持つ

麗水
花村

抱き癖をつけては罪を子に着せる
しかと抱くあれは密書かもしれず
実印を押してからふつと抱く不安

愚童
代仕男

見栄はった寒さ一人になってから
見栄はった寒さ一人になってから
見栄はった寒さ一人になってから

楓楽
正敏

佳句地10選 (前月号から)

森井菁居選

あきらめてからの祈りが母にある
真実の祈りは口に出しはせぬ
割引を生かして母の炬燵掛け
割引で一ト皿多い夜の膳

割引の値札にダイヤが売れ残る
割引けば仏になれぬ葬儀料
やぶ椿老いをたしなむ身繕い
紅椿ふと立止る下駄の音

寒椿せめてベッドを春にする
夫を恋う月夜の底に咲く椿
無理せずとときは無理と思つてず
無理せずにへそくり相場はつてみる

フアツションとして古着麩り
フアツション感覚を入れて老舗よみがえり
無理のないところでソロバンはじいとく
僕でない僕がマイクから聞こえ

解説者のマイク些かしやべりすぎ
あの時の無理がと数珠が聞く悔み
川上 入仙
川柳しんぐう

貯金ない暮しへ丈夫に育つ子等
子の貯金苦しい親が目をつける
貯金するゆとりはないと派手好み
局員に自分の貯金を指図され

貯金箱いくつ買つても中味なし
旺盛な男がすわる廻り椅子
旺盛な親父を持つてまた継げず
旺盛な頃しのはせる記念館

可住
みのる
文平
とみ子
胡次郎
百合子
久子
さしゑ
米朝
貞子

旺盛な若さを受験がとじこめる
旺盛な食欲既に敵を呑む
よい意味にとつて世の中丸く生き
意味のない石が波紋の輪を広げ

書き甲斐の意味をロケットさこれない
書きにくい意味も辞典はばからず
手話の意味知らぬが心あはたまる
戸締りのついでに見事な月を見る

戸締りをしても気になる風の音
戸締りにうるさい父に金がない
長距離で戸締りしたか母の声
戸締りの隣へ合わず鍵の音

倉吉川柳会
内緒ごと電話口でも声ひそめ
毬ついでどかな春を待つている
足音に電話の声が他人めき

一流の方と交り感化うけ
一流のデザインまねて春の服
子育てをのどかに語る祖父の酒
電話では猫撫で声で話してる

うそ方便もつともらしく聞く受話器
母の鈴となる詩がある
彼岸では何してはけるのちら雪
借り電話暗号だけて用を足し

のどかな話にさせて林檎むく
がさつかぬ進退一流とも言われ
耳遠い返事のどかに戻つて来
一流の育ちが違つ肌ざわり

屋台からのどかな顔で男出る
探知機で御用になった誘拐魔
一流の竿で小魚ばかり釣る

登成
亜也子
有也
千夢
秀泉
一扇
登
博泉
聖地
形水
入仙
富子
華水
溪水
正
ひろし
潮花
勇太
道子

与呂志
白光子
金太
英雄
武雄
十郎
すみれ
正子
輝子
登志代
悦子
まさ子

熱血漢だけどのどかなとこが欠け
一流に弱い女のフランス狂
あの山を越せばのどかな梅の里
電話ではもう一つ足りぬ事があり

ネグリジエ夢の続きのプッシュホン
彼岸から梵字でとどく果しッ
彼岸すぎまで芽を出さぬ樹々もある
ライバルをぐつと押さえている序列

川柳化粧箱
美女よりも優しい女が好きな歳
ワンカップ窓に男のひとり旅
好きなもの食べと言われてから不安

風糸のもつれを風のせいにする
開運のなかつた守り札返します
鳥よ来い柿の実枝にひとつ残す
義理理めてきた古里は母一人

豊這う虫一匹に湧く憎悪
早春の陽差しへ老母と猫と居る
聴き上手自慢癖は長帳場
年金がはいり墓参に去ぬ実家

気にとめぬ人から貰つたほめ言葉
よい祖母になりたくはすむお年玉
他家の猫日向ボックは扉の上
カーテンを開けてびつくり雪の高

手相見がアンタ脇役ですと言つ
川柳大阪
井上 喜酔報
時折に口は休んで目で話す
日を追つて買物かごに重い税

野菜食はずにいても死にはせん
賭け事を論ず力は子の言葉

弘朗
ゆり子
民子
律子
千枝
瑞枝
苦句
独歩
大鷹
岳詩
実男
互伸
秋信
さとる
悲子
礎石
葉香
紅月
永楽
みね子
輝月
サワ子
みつ子
とし
客遊子
喜酔報
まさ
君枝
キミ
和世

嫁がせてもうそろそろの孫を待ち
 抜け道はちゃんと押えてある余裕
 しんしんと野心を持たぬ細雪
 やりきれぬ一面記事に箸を置く
 牛肉の輸入日米もやめて
 せい肉を落しあちやんシワが増え
 肉体美サマービーチで披露する
 お前とは肉と葱とで五十年
 志気のない若者はかり増えてきて
 志気ひそか燃やして明日へかける夢
 パチンコ屋軍歌鳴らして志気あおり
 志気上げとにらんでいます棒グラフ
 窓際の志気を侮ってはならぬ
 親にかかる志気を知ってる影法師
 親の亡い田舎に足が遠くなり
 うさぎ小屋田舎が恋しい歳になる
 うさぎもれた田舎芝居を掘りに行く
 母の味想いださせる田舎味噌
 雑踏のストレス田舎に捨ててくる
 笹舟も画になる田舎住み慣れる
 水入らず母娘が田舎弁になり

三幸川柳教室

桜井

千秀報

雅果 本蔭棒 喜醉 比呂志 嘉孝 晃山 謙翠 三十四 金太 伸子 喜楽 重人 与呂志 しげお みつる 弘雄 鉄心 洛醉 天兵 定子 みね 周穂 靖子 ふく代 志津子 三千子 孝子 敏子

今朝もまだ妻は無言で膳を出し
 風雪と書いた表紙の日記買う
 日記書く霜夜の月を眺めつつ
 起きて食べ遊んで食べて寝る日記
 犬の所作書き恙ない日記
 掃除機を置いて娘の日記読む
 掻き捨てることは書かない旅日記
 豊かさはストープ点けてみかん食べ
 安くてもやはり蜜柑の里が湧く
 共に語る友なき夜を蜜柑むく
 艶のあるみかん眺めて顔撫でる
 また行こうみかんの花が匂う頃
 蜜柑狩りほんとの目当ては別らしい
 松茸がみかんになって山をおり
 結婚の用意は出来てまだ嫁けず
 星凍る里の地輪の話し声
 ちゃんこ鍋明日はどの手を使おうか
 経済の進歩にいどむ子の地獄
 母となる心づもりを書く日記
 凍てついた心のままで捺した判
 フタばかり開けて急がず鍋料理
 タイムカプセル開けて進歩を見届ける
 葬式の費用は腹に巻いている
 嘘にあう度に凍結する受話器
 鍋底をのぞいて笑う奴がいる
 進歩した科学へ明治遠くなり
 前衛の進歩ではない花とお茶
 散る花のかなしき定め愛凍る
 お迎える何時来てもよい遺書を書く
 ぼたん鍋仲居べらべらよく喋る

重次 輝子 千香子 武夫 千秀 千枝子 智水庵 静子 久美 文子 当代 幸子 桂香 弘生 善信 頂留子 幹斎 一二三 不二夫 柳右子 柳石治 恒明 柳伸子 律子 一步 萬楽 凡子 寿美 萬的

そのうちによいことがある鍋の底
 恋人に破れて恋の手ほどきにも進歩
 いつでも死ぬ時の用意はあるつもり
 凍りつく夜のあたたかい愛の詩
 師匠の目進歩する程酷い瞳
 気の早いのがひとりいる鍋料理
 サクラ湯を用意してたい使者を待ち
 辞表用意して正義感とおる
 鍋を焦がして子供にあたることはない
 ひきさがる知恵覚えて来た進歩
 これも進歩妻のタクトに添うている
 マイペースで通す今年も用意ドン
 凍てついた心で相手の非を見つめ
 進歩した玩具へ大人が嬉しがり
 春の用意はとくにできた沈丁花
 人情が凍り通じぬ糸電話
 絵日記の後に進歩の印もらう
 凍てついたしこりを女抱いている
 すらすらと嘘の一つが書けました
 しがらみが凍てついてくる乱れ髪
 凍りつく大地に貧しき種をまく
 鍋かけたことも忘れていた電話

川柳大原

白岩

文衛報

鬼遊 美比古 文秋 浩一郎 柳宏子 重人 邦晴 規不風 史好 凡九郎 美代 智子 真砂 千代三 楓葉 冬葉 美津枝 白兔 悦郎 雀踊子 小路 春子 寿恵子 玉恵 文衛 耕花 妻 万里会 いさむ

一寸やせた夫に大きな茶碗買つて
 瘦せたとは言わずに母の背に触れる
 やせたいの願いにお餅のうまい時期
 お見合の返事をせかず梅が咲き
 春雷を聞く日紅梅もつつぶら
 ラーメンを運んで勉強してもらい
 ラーメンの湯気で機嫌の直る孫
 立ち食いのラーメンで足る飲み仲間
 ラーメンの鉢が重なる母の留守
 横道をふさいで除雪車行つちまい
 腹いせをビールの泡がしゃべり出す
 かと言って火のない煙でもなさそう
 ゆきお

川柳後楽

井上柳五郎報

サラ金苦とうとう蒸発してしま
 逃げ腰の男の過去にある弱味
 いつまでも逃げてはならぬ石を積む
 真直ぐに逃げる背に矢が刺さる
 輪を逃げた日から寂しい日がつづき
 石けんか子が置いてゆく開けたまま
 湯の宿の石けん旅の恥落す
 石けんの臭うシャツに非番の身
 石けんの公害持ち出す主婦の会
 石けんを背中に親と子の対話
 特売で買った道具が既に錆び
 身から出た錆に気付かぬ老いの愚痴
 幾星霜錆びつてくまでの歴史見る
 錆びている釘もわずかに牙を剥く
 錆びついた仮面に本性乗っ取られ
 束ね髪色を意地にヘルメット
 断った値引きへ色気つけと客
 だんだんに薄れる色気酒で染め

はるみ みさこえ
 みづえ 敏子
 正巳 宮子
 たけよ 寛平
 元江 直二
 直二 やよい
 政美 桃風
 健一 哲郎
 恒洋 吟平
 胡風 博友
 紫峰 秋月
 佐加恵 番茶
 玉水 照路
 たけ志 宏大
 柳五郎 定平

色気をだしたら足元すくわれる
 オーエスケイ川柳会 大坂 形水報
 一杯やったぞグラフのびてくれ
 のびるだけのばした頭で子は戻り
 鉛筆の芯削れずに風揚げる
 凧の糸ふつりと切れたからの旅
 停年を境に日記閉じたまま
 記念写真皆まっすくに背をのぼし
 監督が延ばせのサイン出した雨
 長年の日記たまにはうそも書き
 凧上げて景色子供の頃となり
 試験地獄の中で子供が伸びてゆく
 又のびた寿命に生きている気兼ね
 21世紀の都会は空へ伸びてゆく
 東大阪川柳同好会 齊藤三十四報
 グループに風見鶏など欲しくない
 グループという安堵感あり柵越える
 グループの紅一点は負けていず
 グループをはみ出して来た猿と居る
 合格発表からグループが別れ
 グループのひとりが反旗持っている
 グループの中のひとりという強み
 グループの連帯感にある隙間
 グループで目立たぬ奴が賞を受け
 悲しみも嬉しさも知る酒の席
 酒の出る会だ万障繰合わせ
 いけずして砂場の隅で泣く園児
 子のいけず親も騒動に巻き込まれ
 京言葉やんわりいけず言うてはる
 いけずした夜はむなし風の音
 いけずにも負けずに職人腕を上げ

草風 博泉
 千夢 聖地
 亜成 てまり
 登 一念
 秀泉 一扇
 有一 入仙
 形水 喜一郎
 凡九郎 喜一郎
 滋啓 凡九郎
 みつる 律子
 雀踊子 美子
 柳宏子 弘生
 白屯 白屯
 三十四 喜風
 良京 千代子
 悦郎 悦郎
 頂留子 頂留子

川柳サークル「卯の花」

発会句会ご案内

このたび薫風・鬼遊両先生にご指導を受けております高槻市在住の川柳仲間が句会を持つことになり、若柳潮花先生、黒川紫香先生を迎えて発会句会を開く運びとなりました。柳友お誘い合わせの上お気軽にお出かけ下さい。

日時 昭和59年5月16日(水)午後1時
 場所 高槻市市民会館三階集會室
 (阪急電車高槻市駅下車南へ5分)

おはなし 黒川 紫香
 兼題 趣味 上原 逸選
 旗 高杉 鬼遊選

母 桶高 薫風選
 輝く 若柳 潮花選

席題 一題当日発表
 (投句締切り 2時)
 会費 三百円

いけずめく隅に座った姉芸者
心境を木偶が見事にとらえてる
期するものあり心境を語らない
グループを逃れ汁粉の店に寄り

尾浜川柳会

上田

佳秋報

さびしさは好きを嫌い鏡拭く
あの髭は嫌い猫が身構える
最後迄妥協嫌った父の灰

二十一世紀の風邪もやっぱり卵酒
葉の裏でゆっくり春を待つ卵
卵生むだけで鶏餌をつつく

その節は頼むと逝った友に言う
雪化粧妻のあの世も寒かろう
からむ客帰ったあとに塩を撒く

名城の庫に偲はず塩の跡
料理本にもない姑の塩加減
塩加減気になりだした老いの坂

塩分をひかえた料理に馴らされる
塩の蝶塩をまきたい客も来る
湯に浮かぶ恐い刺青過去のもの

ニセ金少し気になる俺の義歯
湖に女がひとりドラマかな
ある日ふと渡った橋を戻れない

白魚の指に魔性をひませる
砂浜で娘は返答指で書く
指ぬきをいつもしている母の指

節くれた指見せ寡婦は語らない
夜明けには泣くなど犬に言うてある

城北川柳会

野呂

右近報

輝けるチームは常に謙虚なり
花開く音さわやかな沼の面

慶三

章久

柳影

右近

寅之助

弘治

礼子

良征

歌子

佳秋

光重

新吉

いとお

貞男

保

すみ

勝見

夢之助

貞吉

紫香

清太

武庫坊

よしつぐ

江美

昌子

牧郎

八重

八重

八重

沼神秘包む夜霧が生む詩情
沼の中白く咲いてる蓮の花
伝説の沼にまつわる恋一つ
グランプリ輝く陣に光るもの
記念盃床の隅に輝いてる

この子故泥沼の酒媚びて飲む
泥沼に足つつ込んだサラ金禍
ていねいな言葉武器にする戦
雪だるま目鼻は葉っぱでやさしくて
何もかも卒業した様なしわのかず

泥沼の苦勞も思い出の一つ
ママと画く日が輝いて居る園児
流行の原白と黒がある
神様の前でも騙す人が居る

溺れそう水面の花に誘われて
紙おむつ明治の母の目にさわり
定年の背なに輝くものが無い
黄金は輝く事を知って居る

責任の無い判こなら軽く押す
沼地でも渡り鳥には夢の国
出稼ぎのグラスにうつる雪の屋根
土沼に咲いた仏の蓮の花

失敗の報酬だつて悪くない
沼蓮の咲く音に心洗われる
泥沼を渡って来てもお人柄
綿菓子に似た白雲を沼写し

あの人もあの人も逝き夕焼ける
争いも泥沼になりイイ戦争
亡母の顔沼に映して語り合う
母校にもつらの暖簾子等元氣

大学にパス目の輝き違つて来

千世子

すみれ

ふみ

静歩

茂樹

ただし

達子

右近

節子

山久

麻黄

公一

婦美子

悟郎

満津子

秀月

笑風

重彦

静子

正之

登志代

星斗

美恵

テルミ

泰世

晴子

弘生

達一郎

道子

茂一郎

午郎

不運な日なのにみくじは吉と出る
泥沼の心が笑顔で救われる
マイホーム昔運根とれた沼
輝いた金鶏勲章庫の隅

三幸川柳教室

桜井

残り火が騒ぐ三年ぶりの人
三姉妹心おきな友となり
幸せとは考えてるうち眠くなり
幸せを鴉の声が持つてゆき

よそ目には幸せそうに花も活け
泣いたことすら幸せと思う日々
大仏が春雪を着てすがすがし
立派すぎ仏壇身内がもて余し

ポケットに淋しい鍵を一つもつ
カラフルな糸で可愛い夢を縫い
古毛糸ママのリフォーム冴えてます
糸切れた風だが息子を信じとく

飲ませないように女房が糸を引く
夜が更けて碁石の音が冴えてくる
大根も重石に堪えて味を出し
幾年も堪えて離れぬ夫婦石

石一つ置いて庭木が目立ち出し
こづかれば流れてとれる石の角
はからずも重石となつて道化役
石工で生きてく見事な力こぶ

待ち合わす場所にされてる石はとけ
風邪の神わが家は居心地いらしい
庭に来る鳥も風邪らし声かすれ
鼻風邪を楯に青空見て寝てる

ポケットに無理に押し込む思いやり

わかあゆ川柳会

小砂

白汀報

頼一

好恵

倫子

三十四

千寿報

靖子

敏子

美代子

つゆ子

千香子

ふく代

静

文子

輝子

久美

みね

三千子

智水庵

志津子

定子

当代

幸子

桂香

周穂

愛子

千秀

静子

富美子

孝子

重次

第8回

全日本川柳大会

日時 昭和59年6月24日午前10時開場

場所 島根県米子市皆生温泉グラントホテル大ホール(米子駅より送迎バス皆生温泉入口下車)

宿題 第一部(事前投句、5月末日締切) 空(そら) 山本六道郎選

艶 泉 淳夫選

待つ 奥田 白虎選

3.5×18センチの句箋一枚に一句宛記入、無記名、封筒に住所氏名明記し、投句料金一〇〇〇円

投句先 千五四二

大阪市南区谷町七丁目一三九

新谷町第二ビル二〇六号

日本川柳協会大会係

振替口座(大阪7) 3575

宿題 第一部(当日出句)

森 八木 千代選

若い 土居 哲秋選

鏡 堀口 初枝選

鳴る 堀口 北斗選

各題各題共二句宛、未発表作品に限る

当日会費は二〇〇〇円(昼食記念品代共)

日本川柳協会

柳伸	浩一郎	雀踊子	弘生	雅風	千代三	章久	智治	信美	勝美	洋子	寿美	喜風	楓楽	白汀	美栄	鈴江	はるみ	民子	ヒデ子	清泉	歳栄	英子	輝水	朝子	世似	秀徳	敏明				
上品にうどんを食べて味が無い	それぞれの想い煮つまるうどんすき	椰子の実に故郷は遠い波枕	遠方に奇麗な嘘を置いてくる	おいずるの鈴は遠い虹に燃え	少年の瞳は遠い虹に燃え	遠方の神様ご利益ありそつで	白鳥が遠い童話をつれてくる	孫抱きに船酔いしながら母は来る	遠方へ春には帰る渡り鳥	愛のピリオド心の奥で考える	心の奥見られたくないのど仏	咽喉の奥から出そうな本音かみ殺す	奥さまによろしく妬心の女文字	奥の手を二度とは使えない相手	その奥を知っているからある迷い	奥の手があると知らぬ賭け将棋	うみなり川柳会	小林由多香報	触角をのばして女の心引く	触ってる証提決め手となる指紋	孫の手がじいさんひげをそつとなで	触らせて女男を読んでいる	言葉では足りず手足でたしかめる	女房の顔見連える五つ紋	また女帯と着物で化けて見せ	大島をなぐつた詫びに買ってやり	三年も浪人やつぱり医者めがし	志半分ちびた靴をはく	裏方に徹し舞台に気を配り	核配備平和な村の明日が無い	サラ金も楽ではなさそうピラ配り
由多香	草人	雅女	熊生	雄人	正	芳泉	豊生	舟宏	希満子	富枝	静生	富美湖	凡九郎	文秋	慶三	柳宏子	好一	恒明	喜美子	恭太	庸佑	公一	頂留子	悦郎	滋雀	真砂	凡子				

開いたら閉じることにしている自動ドア
止り木で酔うて互いに心見せ
無愛想に入れて吐き出す自動ドア
酔うほどに憂き世忘れた自動ドア
川くだり自由の滝へさしかかり
親と子の狭間に自動ドアがある
憧れの道へ偏差値バリケード
目がすわつて来た一人去り二人去り
鉄格子も天国にいる酔い心地
憧れのわが家大きい青写真
憧れた日記の文字が褪せている
憧れは媚薬やさしくなる女
憧れの人を捧げた旗の波
押花はらり憧れの詩集より
憧れた虹が見えない虹の中

南大阪川柳会 中川 滋雀報

水仙のあたりに吹いている和風
純日本人で炎は内に秘め
顎ひげに和風を誇る父の下駄
おふくろの味で効かせる紺のれん
団地には和風の軸が落ち着かぬ
結局は和風に落ちつく老いの日々
あくびする男に挑むのはよそつ
助走いま挑む姿になつて
欲望という心の鬼に挑戦し
挑まれたことは無かった女運
挑んでくるくらし吊皮しかと持つ
処女峰というから男捨ておけず
一杯のうどんの情へしみる風
むつかしいこと考えぬかけうどん
十代の恋素うどんでつっぱしる

育つ子の落書き部屋の壁温い
落書きに思わぬ孫の個性知り
新雪へ誰が書いたか好きとある
本音かも知れぬ落書き太い文字
砂に書くスキスキ海の風が消す

馳つなぎ川柳会

里 小路報

繩のれん杜のうっふんを発散し
実力は左程でないが実力者
家計簿に得心ゆかぬことばかり
方便の嘘は咎めず聞いてやる
雑兵の発散人形を叩きつけ
発散もしいが神経痛が出る
得心をくれる冬のシクラメン
大物の目こぼしされている汚職
カルチュアで発散してる主婦の午後
軍艦マーチストレスを解きほぐす
眼鏡はずして得心の顔でなし
実力は五角根性だけ違い
二の舞は思わぬ鳩の群動く
なんとでもいえと実力秘めたまま
コマ様もワイロが効いたお目こぼし
総本山得心の顔で買う土産
そうでつしやろと実力が見られてた
二の舞を主演未婚の母である
得心をした妻を読んで居る
実力がなくて真面目な線を引き
いつの世も銭につながるお目こぼし
冷や酒で弱い男のうさ晴らし
妻なせか見て見ぬふりの花名刺
目こぼしはしない婦警の正義感

行子 君女 とし江 天雀 葉士人 春蘭 勝美 凡子 寿美 雅風 恒明 美代 一步 美津枝 冬葉 史好 甘平 白兎 頂留子 萬的 柳右子 凡九郎 邦晴 悟郎 弘生 重人 善信 規不風 鬼遊 律子

得心の出来ないままに米を研ぐ
お目こぼししません法は守ります
よくしゃべる女で発散しています
得心の女に長い夜が明ける
ゴキブリを潰し発散してる妻
言わんこっちゃないとの舞見て二座る
実力を気にしはじめているノート
目こぼしを知ったときから勝っている
鳥籠の隅発散も出来ぬまま
得心のゆくまで委任状眠る
発散をした夜のここち良い寝息
汗かいてもやもや吹つとぶ寒稽古
目こぼしをされて重い荷を背負う
リモコンを上手に使う実力者
水槽の魚目こぼし等会わぬ
実力にいつも孤独がつきまとう
発散を明日に一日耐えている
他人のめし食うて実力たくわえる
川柳はびきの 塩満
再会の過去は一夜の酒が埋め
頑として亀は甲羅を出たがらず
あの頃を懐の裏で温める
紅梅に神のタクトよゆるくなれ
金婚の夫婦もめてる植木市
日向ぼこ小鳥の歌に背を伸ばし
春や春神経痛も逃げて打ち
肝心な時にヘソクリ雲がくれ
あの女いま頃もしや呪い釘
春の風恋の一つも出来そう
孫のため老いてお百度踏む入試
倦怠期夫婦のレール錆びている

悦子 覚然坊 幹齊 真砂 千代三 翠子 柳伸 健司 アキラ 浩一郎 柳宏子 月子 文秋 信治 美幸 小路 天笑 敏報 吐来 寿美 美代子 阿衣 隆 一屯 敏 隆二

この辺で左遷覚悟の正義感
一年中春の室温風邪をひき
定年は妻への感謝借りておく
省エネで爆弾抱えた日の仕事
風光る街にビエロがおどり出る
春場所を暴れ暴れた大乃国
嫁姑仲良くなった岩田帯
白紙に今日が埋められ生きている
悔い残る朝がなかなか起きられず
天職と思う主婦業に精を出す
手内職ローンの一端かついでる
なつかしい変体仮名の古葉書
職人の無口で腕の確かなる
西宮北川柳会 妹尾 春江報
好きな娘と嫌いなコーヒー飲んでいる
帰省した娘がコーヒーの通でいる
コーヒーでアロポーズとは安すぎる
虫も春私もコーヒー飲んでる
コーヒーの底に溜息沈ませる
コーヒーをそして一人は汽車にのる
珈琲冷めたまま二人の刻つづく
モーニングコーヒー雲雀の声が調和する
ロボットが入れた香りのないコーヒ
コーヒー飲む二人には風の音遠い
コーヒーにも春めくもがある茶房
本音聞くコーヒーに砂糖入れてやり
和解するきっかけとなる兎の笑顔
還暦を機に川柳に誘われる
新入社机をふいて呉れてから
同病がきっかけとなるおつき合い
きっかけを根掘り葉掘り聞きたがり
伴子 惠美子 末一 忠宏 只士 隅谷義一 三千代 昭子 与呂志 和子 石橋義一 喜代子 胡村 伊三郎 静子 保蔵 美津枝 冬子 伊升 みつ子 武庫坊 柳まゆみ 紫香 園歩 一太郎 清太 君子 よ志子

きっかけは林檎ぼたりと落ちた時
ふつと出たお国訛りがきっかけで
泊らせるきっかけ雨が降り始め
きっかけは幼馴染みと言う夫婦
きっかけは炬燵で触れた手の温み
きっかけがつかめず奥歯ぎりぎりし
中座するきっかけ父の咳払い
百合根だけ食べられるとは不公平
球根が無事であったか雪の下
耐えて来たおんな球根植えてる
赤い花を信じ球根植えてる
球根も愛情もては咲いてくれ
球根の眠りをやぶる春のかぜ
フリージア老いの二人にある和み
球根が春の香りを持ち上げる
寒椿と言うけど雪は冷たかろ
泣きに来た人になやましい猫柳
B面の役で個性は出さすおく
春休みの子供にまかす旅プラン
冬の陽を布団に五時間盗ませる
啓蟄の虫に答えぬ春の音
おしっこも指名制なり孫二歳
銭湯で見る顔に逢う終電車
生きものの好きな女房に世話やかれ
自信ない男佻しい見栄をはる
恋文を誰に届ける春の蝶
春風に心あたりの無いくしゃみ

右近 花村 三笑子 春江 紀雄 恵 敏夫 礼子 春子 眉水 隆子 宏子 文平 泰世 弘生 求芽 笑女 年人 定人 いわゑ ぬ女 幸 幽香 和子 俊男 伴子

山道をゆきつつ自分確かめる
甘酒を客にすすめて国自慢
甘酒の甘さにも似てる若夫婦
甘酒の湯気が梅見の客を呼び
甘酒が恋のムードを壊す夜
甘酒をよばれ禮絵枯山水
甘酒に心使いの土生菱
汗拭いて甘酒する寒稽古
焼餅のふくれっ面が妻に似て
やき餅を焼くよりふくれるほうがよい
ふくれれ面見たくないけど行き場無く
新婚もふくれれ面から本音吐き
減税も家計ふくれる春きびし
防衛費ふくれる陸で福祉減り
不況風サラ金ばかりふくれれゆく
朝のことまだふかれてる夕餉の輪
春の芽やふくらみ露の蓋の見ゆ
ふくれると別の色気を出す芸妓
猫柳ふくれる顔に春近し
孫の頬一緒にふくらむ紙風船
ふくらんだ夢に棘が追って来る
さりげなくふくれた頃が懐かしい
ふくれれなくれない妻で馴らされる
胎動へ日毎ふくらむ母性愛
この道の果てに勲章置いてある

一屯 正人 清心 昭子 つや 一香 与呂志 喜代志 義一 君枝 麻男 繁男 かわす うめ ふさ 本蔭棒 治子 比呂志 律子 美佐 美代子 秋園 美房 吸江 和子 忍

何時からか五人ばやしの笛がなし
鼓笛隊祭の街にして通り
おみくじを結んだ宮の返り花
自殺的行為の白紙委任状
退院のベッドの上の千羽鶴
たとう紙が知り度い今日の話
千代紙の人形抱いて乳母育ち
立春大吉障子にうつる梅の枝
紙襦袢どうのこうのと育兒欄
紙飛行機とびかう中を自習する

井上柳五郎報 節子 絹子 節子 よし津 幸太郎 房子 たず子 絹子 翠記 忍 桃風 柳五郎 弘隆 秋月 草風 政美 紫峰 進 玉水 哲郎 恒洋 健路 照昭 敏昭 胡風 佐加恵 たけ志 番茶 吟平

川柳藤井寺 赤木 和子報

幽香 和子 俊男 伴子

口笛に日曜大工が乗っている
公達の栄華の夢が横笛に
赤信号婦警の笛がよくひびき
書留に口笛二階下りてくる
草笛の上手だった倉の軒

房子 よし津 たず子 翠記

人見 翠記報 忍

房子 よし津 たず子 翠記 忍

菊澤小松園追悼本社5月句会

日時 五月七日(月) 午後六時
 会場 なにわ会館
 天王寺区石ヶ辻町19-12
 地下鉄谷町九丁目・近鉄上本町下車東南
 電話 06-772-1441番
 おはなし 西尾 栗
 「網」 津守 柳 伸 選
 「女」 岩本 雀 踊子 選
 「冗談」 金井 文 秋 選
 「小唄」 若柳 潮 花 選
 兼題 各題三句以内厳守
 席題 二題 当日発表
 会費 五百円

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川 柳 塔 社

6月の兼題は表紙裏に発表

6月の本社句会は7日(木)

「夜市川柳」募集

第12回 「旗」 西尾 栗 選

締切 5月31日

投句先 〒593 堺市堀上緑町二一九一

河内天笑方

堺川柳会

● 募 集 ●

七月号発表 (5月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栗 選
 水煙抄(10句) 黒川 紫 香 選
 愛染帖(3句) 橘 高 薫 風 選
 課題吟(各題5句以内)
 「クール」 辻 文 平 選
 「味」 神夏磯 道子 選
 「返事」 川上 大輪 選
 ★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
 ★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

八月号発表 (6月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栗 選
 水煙抄(10句) 黒川 紫 香 選
 愛染帖(3句) 橘 高 薫 風 選
 課題吟(各題5句以内)
 「良心」 西森 花村 選
 「瓶(壺)」 林 瑞枝 選
 「年輪」 小西 雄々 選
 ★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
 ★用紙は川柳塔社柳箋をご利用ください。

5月の常任理事会は1日(火)

定価 五百円(送料50円)

半年分 三千二百円(送料共)

一年分 六千三百円(送料共)

昭和五十九年四月二十五日印刷

昭和五十九年五月一日発行

編集兼 中島 蓬太郎

発行人 藤原 童心社

印刷所 藤原 童心社

〒545 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(06)691-691四番
 振替口座大阪813336八番

編集後記

☆エトリブルフルの夕の常任理事会で、出席者に古い掃除機の寄付をお願いした。事務所開所以来三年半当時中古の掃除機を頂いて使用していたのが、もう吸引力もなくなり用をなさなくなったのである。

☆翌日の午前中に新品の電気掃除機が届いた。むき苦しい事務所に掃除機のプルーがやけに光っている。

☆高杉鬼遊さんが過労で倒れられた。社の会計を一手にひっかまえての激務に加え、還暦句集の応募が殺倒したわけで、背中に激痛が走る原因不明の症状が続いた。

☆四月二日、常任理事会の報告券々、印刷費など受け取りに鬼遊さんをお見舞いする。入院当初、高杉久代った表札が二度目に行った時から鬼遊になっていた。一鬼となった病氣を追い出さんとなきまへん」と、自分で書き替えたという。

気が激しくて目覚める。熱を計ると三十九度を越えている。単なる風邪だろうと薬を飲んで専ら汗を出す。☆電気掃除機の代りはありがたいことにすぐに出て来ても、鬼遊さんや私の代りはずぐには見つからぬのである。鬼遊さんも私ももう若くはない。一步退いて小手をかきして見るぐらいの余裕が必要だろう。

☆川柳塔の役割り機構も再考するところに来ているようだ。

☆川柳塔の中国行きを発表した。路郎先生の曾遊の地大同の石仏辺りから万里の長城へも足を伸ばしたいが先ずは上海・蘇州・桂林を計画した。上海で中国の文人と交歓出来ればと思う。

☆五月、東野大八さん東洋樹賞受賞の大会と菊沢小松園さんの追悼句会、六月は遠山可住句集「ふるんぼ」出版句会、七月は路郎忌、八月には大矢十郎句集「みかん船」出版句会。以上のように慶弔句会が交々催され、句会部も多忙になる。

☆川柳塔還暦、この活気が何よりもありがたい(薫)▼入院後早や三週間を経過した。本当の病氣で済んだ。担当医は保証するが病氣はまだない。日々検査中である。レントゲン写真も既に四、五枚を数え、心電図七枚、バリウムによる胃の透視一回、腹部超音波検査三回、日に日に病源を探査するも、ようとして尻尾を捉ませない。

▼オニがヒトなみにもつともらしい病名を求めると必要はない。犬猫病院なら即座にオニにふさわしい病名をつけてもらえるかも知れない。鬼のかくらんと謂うのがあるがそれとも違う。何故、病名にこだわるのか、ふと不思議に思う。

▼「どこがお悪いのです」と訊かれたら、病名を告げれば、それなりに意も通じるが、病名がないと故事来歴から話さなければならぬ。一通語の電話が三通話にもなり、それでいてお互いに釈然としない。

の三月中旬、突如、背中を激痛が襲う。居ても立ってもおれない状態で、数時間堪えたが一向に治らない。病氣は何時してもよいと言えぬものではないが、時期が悪い。折角の句集応募の郵便物が日々配達され山積するも、領収お礼のはがきもお届けできない。鬼いっぴきの入院のため、会計室宛のすべてのご送金に対して、皆様は大変ご心配、ご迷惑をおかけしたことをこの欄を借りて深くお詫び申しあげます。(き)

☆「構造と力」という本が若者の間で凄く人気だそう。建築に関する本ではない。いま何故か「記号論」がブームで、そのバイブル的書物として学生達のステイタスシンボルになっているのである。流行とあらば何はともあれ、かじってみよう。精神で早速、衝動買いをした。

☆このころが何と極付の難解な文章が第一頁からぎっしり詰まっている。哲学には十代以来とんと縁

遠くなっている中年の油の切れた脳細胞では到底理解できそうにない。残念ながら投げ出した。ただ、思想・哲学の文章にありがちな晦渋な表現に溺れることなく、終始軽快なフットワークで理論を展開してゆく、この不思議な魅力が今日の若者の感性にびびりたくるのかもしれない。因みに著者は京大人文科学研究所助手、26才の俊秀である。

日刊



投稿欄案内

川柳 選者・橘 高 薫 風

(掲載日) 毎週水・土曜日

俳句 選者・小 寺 正 三

(掲載日) 毎週火・金曜日

短歌 選者・佐々木 信夫

(掲載日) 毎週月・木曜日

投稿規定

はがき一枚に三句(首)以内(川柳・俳句・短歌と明示すること)投稿随時。

自由課題・秀句には掲載紙贈呈。

投稿先

〒530 大阪市北区中之島三丁目二番 朝日新聞
ビル6F・電波新聞大阪本社「学芸部」あて。

昭和四十二年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十九年四月二十五日 印刷
昭和五十九年五月二日発行(毎月二日発行)

この夏、おいしさひとりじめ.....

アイスクャンデー

宇治金時・あずき・チョコ・ミルク・パイン



高島屋 そごう 松坂屋 阪神 ドーシカ店
近鉄(アベノ・土六・奈良・東大阪・京都各店)
サン・ストア(中之島・淀屋橋各店)
京阪モール 新川売店 虹のまち店
泉北高島屋 南海難波駅構店
国鉄大阪駅店
大阪・なんば



TEL (641) 0551